ISSN　1348-4192

東北人類学論壇

第５号

論 文

社交期としての冬
－冬季娯楽活動にみるユッピック／チュピック社会生活の変化と持続－
久保田　亮

調査報告

変貌する社会の中の農村家族
－韓国慶尚北道高霊郡Ａ面Ｂ村のＣ氏一家の生活史－
菅原　順也

研究ノート

遠刈田の熊供養　－クマ猟師の後裔たち－
田澤　晋太

おやじたちは今　－「おやじの会」に見る男縁の再構築－
薄葉　豊

2006 年３月

東北大学大学院文学研究科

文化人類学研究室

東北人類学論壇

Tohoku Anthropological Exchange

第 5 号

2006 年 3 月

目　次

論　文

社交期としての冬
　－冬季娯楽行事にみるユッピック／チュピック社会生活の変化と持続－
・・・・・・・・・・・・・・・・久保田　亮　1

調査報告

変貌する社会の中の農村家族
　－韓国慶尚北道高霊郡Ａ面Ｂ村のＣ氏一家の生活史－
・・・・・・・・・・・・・・・・菅原　順也 18

研究ノート

遠刈田の熊供養
　－クマ猟師の後裔たち－
・・・・・・・・・・・・・・・・田澤　晋太 38

おやじたちは今
　－「おやじの会」に見る男縁の再構築－
・・・・・・・・・・・・・・・・薄葉　　豊 52

『東北人類学論壇(Tohoku Anthropological Exchange)』規程　投稿規定
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70

東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange 5:1-17(2006)

社交期としての冬
―冬季娯楽行事にみるユッピック／チュピック社会生活の変化と持続―

久保田 亮

１．はじめに

本稿はユッピック／チュピック村落における社交的な活動として冬の娯楽行事の性質を分析することを通して、アメリカ社会の周縁に生きる先住民の社会生活の変化と持続について検討する。

アラスカ州南西部に暮らす先住民、ユッピック／チュピック（Yup'iks/Cup'iks）の伝統的[1]社会生活は夏と冬では大きく異なっていた（モース 1981[1906]）。夏季における基礎的な社会単位は双方的拡大家族であったが、冬季は複数の夏の基礎的社会単位が冬季居住地に集住した（Fienup-Riordan 1986:31）。冬季居住地における居住形態も家族が共住する夏季の形態とは異なっていた。すべての成人男性がカジキ[2]（*Qasgiq*）で共住する一方で、女性や子供たちなどのその他の家族はエナ（*Ena*）と呼ばれる住居にそれぞれ分かれて暮らすのが、冬の居住形態であった（Fienup-Riordan 1986:31）。成人男性が寝食を共にしたカジキは、儀礼の実施場所、社交場などの役割をも果たしており、冬季居住地における儀礼的、社会的中心であった（Fienup-Riordan 1994:34）。そして、カジキの周囲を取り囲むように複数のエナが立ち並んでいた（Fienup-Riordan 1986:31）。

伝統期におけるユッピック／チュピック社会の季節的変異は、彼らの伝統的生業である狩猟・漁労・採集活動のリズムと深く関係していた（モース 1981[1906]:82）。そして、その変化が宗教生活などの社会生活の諸側面にも作用し、それら諸側面も季節の変化に同調して変異することをモースは指摘した（モース 1981[1906]）。夏季は狩猟･漁労・採集活動が活発化し、同時に社会単位の枠組みを越えた社交的な活動が沈滞化する季節であった。アラスカ南西部では夏の訪れとともに、解氷した海面からアザラシが顔を出し、各種渡り鳥が産卵のため南から飛来し、シャケが河川を遡上し、やがて内陸部のツンドラ一面に野いちごが実を結んだ（Fienup-Riordan 1994:14-25）。こうした時期毎に変化する利用可能な自然資源の収穫のため、彼らは個別の拡大家族単位で沿岸部、河岸、内陸部へと移動しながら暮らした。他方、冬は狩猟･漁労・採集活動が停滞する季節あり、それに変わって社交的な活動が活性化する季節であった。冬の気温は－30 度まで低下し、河川や沿岸海域は凍結した（Fienup-Riordan 1994:28）。こうした自然環境要因は生業活動の実施を困難なもの

[1] 本稿では、ユッピック／チュピックの定住化以前を指して伝統期と記述する。本稿で筆者が取り上げる地域において、それは 1950 年以前を示す。また、「伝統的」とした場合でも定住化以前の状況を言及したものとする。
[2] チュピック語ではカイギ（*Qaygiq*）と呼ぶ。定住後、成人男性は家族と同居するようになったが、定住以降もカイギはしばらく存在し、男性村人たちの社交場、作業場などとして利用された（Fienup-Riordan 1994）。

としたため、彼らは冬季居住地に集結して夏季に捕獲した食料を消費して暮らし、主に屋内での活動を行った（Fienup-Riordan 1994:28）。

冬の営みの代表的なものが、ユッピック／チュピックが集団的に実施した各種伝統儀礼であった。儀礼は、冬季居住地の社会的中心であったカジキで執り行われた。

アラスカ州南西部に暮らす「エスキモー」社会には、カナダやグリーンランドに暮らす「イヌイット」社会に比べて、より精巧な伝統儀礼のサイクルが存在した（Lantis 1947, Morrow 1984, Fienup-Riordan 1994）。冬季居住地における伝統儀礼サイクルは冬至の時期に開催されるナカウチック（膀胱祭）に始まり、ケブギック（使者祭）が続き、ケレック（招待祭）の開催により締めくくられた（Morrow 1984）。

冬の儀礼は、人間と超自然的存在との友好関係や村落内・村落間の社会関係を維持、強化する機会であった。例えば、前述のナカウチック儀礼においては、アザラシの魂が宿るとされる膀胱を人間世界へやってきたゲストとしてもてなした後に水中に沈め、その魂が再び肉体を得て再生することを祈念した（Morrow 1984:118-127）。一方、ケレック儀礼においては、仮面ダンスを披露して動物の魂を惹きつけ、来るべき夏の狩猟・漁労活動の成功を願った（Fienup-Riordan 1994）。また、ケブギック儀礼では近隣冬季居住地の住民を招待し、ダンスを披露したり、贈答品を与えて歓待した（Morrow 1984:131）。このように、ユッピック／チュピック社会における冬は、「観念上の集団が再構成される機会」（モース 1981[1906]:88）として位置づけることが出来た。

しかし、20 世紀初頭に本格化する西洋社会との接触は、伝統ユッピック／チュピック社会生活の季節的変異に影響を与えた。まず、キリスト教宣教師をはじめとする西洋社会からのエージェントが伝統儀礼やダンスの実施に干渉[3]した（Fienup-Riordan 1991, 久保田 2005）。その結果、伝統儀礼は断絶し、ダンスは伝統儀礼の文脈で踊られることはなくなった。他方、伝統的宗教実践の崩壊とともに、ユッピック／チュピックのキリスト教教義、実践の受容が進んだ。また、新設の定住村への移住により、「集合の冬」という伝統ユッピック／チュピック社会の特質は相対的に弱められた。並びに、ユッピック／チュピック子弟を対象とした公的学校教育の実施や商品に対する依存度の増加による村落経済の複合経済化が本格化し、季節的に変化する狩猟・漁労パターンに並んで、登校・下校時間、就業時間、休日、祝日といったアメリカ主流社会由来の制度が村落生活のリズムを律する大きな力となっていった。

村落生活のリズムを左右するこの二つの力は、二つのカレンダーの違いとして具体化する。つまり、「12 月」が「太鼓を叩き鳴らすとき」（Jacobson 1984:670）もしくは「あちこち周辺に出かけるとき」（Jacobson 1984:670）である「エスキモーのカレンダー」と、「12 月」を祝祭、休暇のシーズンとして位置づける「主流社会のカレンダー」という、二つのカレンダーである。

本稿が着目するのは、この二つのカレンダーと現代ユッピック／チュピック村落社会生活との関

[3]キリスト教宣教師は、アガシコック（*Angalkuq*）というユッピック／チュピック社会の宗教職能者が介在する伝統儀礼を「悪魔的行為」としてとりわけ激しく糾弾した（Ménager 1962）。

係である。キリスト教徒化、定住化、経済システムの変化、アメリカ的教育の適用といった歴史的経験を経て、現在の「エスキモーの冬」はいかなる様相を呈しているのであろうか。

そこで本稿はこの問題意識に基づき、アメリカ主流社会由来の制度としての「クリスマス休暇」という枠組みの中で、「エスキモーの冬」がどのように変化し、かつなにが持続しているのかを民族誌的データの分析に基づいて検討する。具体的には、「クリスマス・ダンス」と「バスケットボール大会」というクリスマス休暇期間中に開催された二つの娯楽行事を取り上げ、それぞれの歴史を踏まえた上で二つの活動の性質を分析・対比し、主流社会からの影響に対して先住民社会がいかに応答しているのかという観点から述べたい。

本稿が利用する民族誌的資料は、2005 年 12 月から 2 ヶ月間実施したチバック村での実態調査で収集したものである。

調査地であるチバック村は、アラスカ州南西部のベーリング海沿岸地域にある。近隣地域に暮らしていたチュピックが現在のチバック村に移住したのは 1950 年のことであった。1950 年に、201 名（44 世帯）が、翌年に 22 名（4 世帯）がチバック村に移住した（Flanders 1986:110）。その後、チバック村の人口は増加し続け、2005 年では推定 916 名が暮らしている（State of Alaska 2006）。2000 年の国勢調査によれば、総人口 765 名中、19 歳以下の人口が総人口の 55%（418 名）を占めている。

表 1　チバック村人口推移。

年度	総人口	増加数
1950	234	―
1960	315	80
1970	387	72
1980	466	79
1990	598	132
2000	765	167
2005（推計）	916	151

State of Alaska(2006)より筆者作成。

チバック村は総人口の 95.5%（692 名）をアラスカ先住民が占めている（State of Alaska 2000）。彼らの自称はチュピック（*Cup'ik*）といい、アラスカ南西部のその他村落で暮らすアラスカ先住民の自称であるユッピック（*Yup'ik*）とは異なる[4]。この違いはチバック村出身者が中央ユピック語の一方言「フーパーベイ・チバック方言」として言語学的に分類される「チュピック語」を話すことに由来している（Jacobson 1984）。

2．クリスマス時期のヨガックと「クリスマス･ダンス」

本章が取り上げるダンスとは、ヨガック（*Yuraq*）、もしくはエスキモー・ダンス（Eskimo dance）という様式のダンスである。

宣教師との日常的な接触が始った 1920 年代以来、伝統儀礼の文脈におけるヨガックは勿論のこと、娯楽としてのヨガックもまた公的な場面から姿を消した。だが 1944 年にヨガックは再び公の

[4] 言語語学的な分類では、チバック村及び隣村のフーパーベイ村住民の言語は中央ユピック語の一方言「フーパーベイ・チバック方言」である（Jacobson 1984）。しかし、チバック住民の自称は、チュピック語を話す「チュピック」、フーパーベイ住民はユッピック語を話す「ユッピック」と両者には違いが認められる。

活動として復興した。本稿が対象とするチバック村では、当時の冬季居住地の一つであったカシューナックに教会が設立されたことを祝してチュピックがヨガックに興じたのだが、この出来事が「ヨガックの復興」として語られている。この復興に先立ち、チュピックは宣教師とある取り決めを交わしたという。それは、ヨガックから宗教的な要素を一切排除するというものであった（Pingayak 1998）。以来、ヨガックは「純粋な娯楽」として村落生活の公的な活動としての地位を得た。

1950 年のチバック村への移住以降、チュピックはクリスマス時期及びイースター時期の二度、ヨガックを踊ったという。本章では、クリスマス時期のヨガックを歴史史料と住民の語りに基づき記述した上で、2005 年の「クリスマス・ダンス」について記述し、社交的な活動としてのヨガックが歴史的にどう変化したのかを検討する。

２－１．クリスマス時期のヨガック

クリスマスの時期のヨガックは、チバック村に人々が住み始めた 1950 年に既に開催されていた（Flanders 1986: 111）。当時のクリスマス時期のヨガックでは、隣村のフーパーベイ村住民がチバック住民によって招待され、両村の住民がそれぞれヨガックを披露しあった（Flanders 1986: 111）。

チバック住民P氏によると、チバック村でのヨガックが終わると、今度はフーパーベイ住民がチバック住民を招待してフーパーベイ村でヨガックを開催するのが常であったという。1950 年のヨガックにおいて、チバック住民がフーパーベイを訪問した記録は確認していないが、クリスマス時期にヨガックを通して二村が交流したことが、1960 年代の学校新聞記事に記されている。例えば、1962 年 12 月号には、12 月 26 日と 29 日の夕刻に村公民館でヨガックが開催された、という記事がある。この記事は「多くのチバック村在住の老若男女がかなりの時間をエスキモー・ダンスの練習に費やし」たこと、及びドラマー2 名、ダンサー11 名をはじめとする多くのフーパーベイ住民が訪問したことを伝えている（Chevak Tundra 1962b）。また、1967 年 12 月号には、フーパーベイ村のダンサーが 12 月 31 日に訪問してチバック村の 4 時間にわたるヨガックに参加したこと、及び今週末[5]にチバック住民がフーパーベイ村を訪問してヨガックをする予定であることを伝える記事がある（Chevak Tundra 1967）。

先の学校新聞の記事にもある通り、村人はクリスマス時期のヨガックに向けて練習を行った。チバック住民L氏によると、練習はカジキ[6]で行われたという。その際、村の古老が年齢に応じて村人をグループ分けし、どのグループがどのヨガックを踊るのかということを割り当てていた。こうして古老が割り当てた曲を、チバック住民L氏は「私たちの歌（Our Song）」と呼んでいた。L氏によれば、各グループは「私たちの歌」だけを練習し、他のグループの歌を練習することは決してなかった。そして「私たちの歌」をドラマーが歌い始めた時だけ、観客の前でそれを踊った。それぞれ

[5] 1967 年 12 月 31 日は日曜日であるため、ここで言う「今週末」とは 1 月 6 日から 1 月 7 日にかけてであると考えられる。

[6] チバック住民であるL氏はチュピック語を話すため、実際には「カイギ」と言及したが、本稿では混乱を避けるためあえて「カジキ」と記述した。

の歌が誰の歌かが予め決まっており、かつそれぞれが一曲だけ「我々の歌」を持っていたため、ヨガックを披露するダンサーは常に異なった顔ぶれであったというのである。

村人は観客がパフォーマンスをより楽しむことが出来るように工夫を凝らしていた。その一つが仮面の利用であったという。例えば、チバック住民Q氏によると、ある男性の製作した仮面は人間の顔を模した仮面であったが、その両目玉が動く仕掛けが施してあった。目玉には糸がとりつけてあり、その一端を肩に取り付けて踊ると、肩を揺らす度に目玉がギョロギョロと動いた。また、同じく人間の顔を模した別の仮面は、顎の部分が動くようになっており、首を振るたびに顎がガクガクと揺れたという。

こうした仕掛を施した仮面の利用の他にも、仮面を二つ予め装着して、ダンスの最中に外側の仮面を脱ぎさるパフォーマンスや、カーリーヘアーのカツラをつけて踊るパフォーマンスなど、いかにして観客を惹きつけるかということがヨガック・パフォーマンスの一つの焦点となっていたという。

チバックとフーパーベイの両村民はどちらがより多くの観客を惹きつけることが出来るかを通して競い合っていた。例えばチバック住民Q氏はフーパーベイ住民とチバック住民とによるヨガックの際、フーパーベイの人々の演技に加わったことがあったが、それに憤慨したチバック住民R氏から批判されたという。当時のヨガック・パフォーマンスは、ダンスによる両村の競い合いであり、相手方のヨガックに参加する自分の行為は、自村のチームに対する反逆行為とみなされたのだ。

ヨガックを通した競い合いに関して、パフォーマーがどれだけの観客を惹きつけたかを計る大きなバロメーターは「観客をどれだけ笑わせることが出来たか」であった。多くのチバック住民は「チバック住民のヨガックは、フーパーベイのそれよりも常に面白かったので、何時もヨガックの勝負に勝っていたのだ」と述べた。

また、その年に初めてハンティングに参加して獲物を得た少年、野いちごを摘んだ少女、または初潮を迎えた少女が踊る際には、アクータック（*Akutaq*）[7]や魚を振舞い、彼らが供給者となったことを祝福することもあった、とH氏は語った。

このように、クリスマス時期のヨガックは、チバック村設立当初に始まり、以下に記述するように現在も実施されている。しかし、こうした過去のヨガックに関して、チバック住民はクリスマス時期にヨガックを踊ったとは語るものの、キリストの生誕日であるクリスマスだからという理由でヨガックを踊ったのではない、と述べていた。例えば、チバック住民S氏は、「クリスマスだからヨガックを踊ったのではなく、冬だからヨガックを踊ったのだ」と明言した。そして、今日のクリスマスにおけるダンスは、過去のダンスとは別ものである、とも言っていた。

[7] アクータックは俗に「エスキモー・アイスクリーム」と呼ばれる料理であり、「混ぜ物」と訳すことが出来る（Jacobson 1984:54）。字義通り、サーモンベリーなどの野いちご類、砂糖、アザラシ脂、ゆでた魚の白身などを「混ぜて」作る。

2－2．クリスマス・ダンス

それでは、クリスマス時期のヨガックの現在とはいかなるものか。

現在のクリスマス時期のヨガックは、「クリスマス・ダンス」と村人に呼ばれている。クリスマス・ダンスでは、ヘッドスタートから高校生までチバック村学校の生徒全員がヨガックを披露することになっている。彼らが踊るのは、チバック村学校文化遺産プログラム責任者であるG氏創作のヨガックである。G氏はどのヨガックをどの学年が踊るかを事前に割り振っており、生徒たちはそれに従って最低週1回は割り当てられたダンスを練習する授業に参加する。だが高校の授業科目でヨガックを履修している生徒はその限りではない。「ダンキック・シアター」と呼ばれるこの授業は週4回あり、その中で履修生は様々なヨガックを練習するだけでなく、ドラムの叩き方指導、歌唱指導、振り付け創作なども学んでいる。

クリスマス・ダンスはチバック住民のための行事である。例えば、後述するバスケットボール大会では、事前に大会開催告知を各村の小売店などに掲示し、村内並びに村外からの参加チームを募ったのだが、クリスマス・ダンスではそうしたことは行われない。また、「文化遺産週間」、「冬祭」、「ツンドラ祭」といったヨガック・パフォーマンスを伴う年中行事では他村を公的に招待するのが常であるのだが、クリスマス・ダンスではそうしたことも行われない。

2005年のクリスマス・ダンスは12月25日[8]にチバック村公民館を会場として開催された。ダンス開始時刻は午後7時を予定していた。だが、観客、ダンサーのどちらもが会場になかなか姿を現さなかったため、実際にヨガックが始まったのは開始予定時刻よりも1時間遅い午後8時であった。

会場である公民館には二つの装飾が施されていた。一つは高さ190センチほどのクリスマス・ツリーである。ツリーは金色、銀色のモールなどで飾り付けられていた。もう一つは、アザラシ皮製のキャンバスに描かれた村人の先祖4名の人物画であった。この人物画は、1920年代に撮影された写真を元に、チバック在住の教師が描いたものであった。

前述した通り、クリスマス・ダンスはチバック村学校に在籍する生徒たちがヨガックを披露する機会とされていたのだが、実際にはそれ以外の村人たちもパフォーマンスに参加していた。これはこの会で演じられた合計21回のダンス・パフォーマンスのすべてに認められた。これらの村人たちは、ヨガック・パフォーマンスが中盤にさしかかるとステージにあがり、生徒たちとともにヨガックを踊った。ダンスとともに披露されるドラムと歌は、50代から20代の男性村人7名が担った。

パフォーマンスの途中からステージにあがるのは、そのヨガックを披露することになっている生徒たちの家族や近親者（母親、父親、祖母など）であった。例えば、A氏と妻のB氏の間には、学童年齢にある子が6人いる。クリスマス・ダンスでは、この6名がそれぞれの学年毎にダンスを披露したが、A氏はそのうち長男、三男、四男のダンス・パフォーマンスの際にステージ上にあがって子供たちの背後でヨガックを踊った。また、妻のB氏は長男、次男、三男、四男、及び三女、四女のダンス・パフォーマンスの際にステージ上にあがり、子供たちの後ろで共にヨガックを踊った。

[8] 2001年に実施した同村での予備調査の際も、ヨガックは25日午後7時30分から午前0時まで行われた。

また、N 氏（女性）とその義理の母である O 氏は全パフォーマンス中、一度ステージ上で N 氏の子が踊るそばでヨガックを踊った。

クリスマス・ダンスで踊った人の延べ数は、生徒及び途中から参加する村人たちを含めて 339 名であった。だが、前述した通り、生徒たちが踊ったのは一人一回ずつだったが、その他の村人たちは数回にわたりステージ上にあがりヨガックを披露したため、実際にダンサーとしてステージ上で踊った人の実数は、生徒 162 名、その他の村人 40 名の総計 202 名であった。また、男女別にみると、男性 88 名（うち生徒 85 名）、女性 114 名（うち生徒 77 名）であった。2005 年度のチバック村学校の生徒数は330名であるため、クリスマス・ダンスには全生徒の約半数のみが参加したということが出来る。



写真 1　親子によるダンス演技。
（2005 年 12 月 25 日筆者撮影）

他方、クリスマス・ダンスに観客としてのみ参加した村人の正確な人数はわからない。約 4 時間半のクリスマス・ダンスの中で、途中から参加したり、終了前に帰宅したりした村人が多数いたためである。ちなみに、ダンス開始時に公民館に姿を現した村人は約 130 名ほどであったが、この中にはダンサーとして参加した村人も含まれている。

クリスマス・ダンスについて、チバック村学校文化遺産プログラム責任者である G 氏は「クリスマスを祝うためにヨガックを踊るのである」という見解を示した。また、チバック住民 T 氏は、個人的見解であると前置きしつつ「ヨガックを踊ることでキリストの誕生を祝う意味があるのではないか」と述べた。

２－３．クリスマスの時期のヨガックの通時比較

定住村であるチバック村への移住以来、村人はクリスマスの時期にヨガックを踊っていた。しかし、「クリスマス・ダンス」と過去に開催されたクリスマス時期のヨガックとのあいだには次の三点の相違がある。

第一点は参加者の違いである。過去のヨガックではチバック住民により招待された隣村住民の参加があった。しかしこうした他村住民の招待や参加はクリスマス・ダンスには認められない。この点から、過去のヨガックが村落外に広がる社交の機会を村人に提供していたのに対し、クリスマス・ダンスは村落内に限定された社交の機会となっている。また、この変化により、ダンスを通した競い合いという性質は、クリスマス・ダンスには認められなくなっている。

第二点は参加者の属性の違いである。過去のヨガックでは村の古老がヨガックの準備や披露に一

定の役割を果たしており、「老若男女」がヨガックに参加したとされている。しかし今日のクリスマス・ダンスでは、公的学校教育の中で文化教育に携わる G 氏の先導の下、学校に在籍する生徒たちとその両親（特に母親）、祖母が主たる参加者となっていた。つまり、クリスマス・ダンスは村落内における社交の機会ではあるものの、実際の参加者は学校の生徒、及び彼らの近しい親族の中でもヨガックに関心を持つ村人に限定されている。

第三点はクリスマス時期のヨガックに対する意味づけの違いである。過去のヨガックは、1960 年代の事例から推定すると、キリストが生誕したとされる 12 月 25 日に実施することを前提としていなかったと考えられる。また、村人の語りでは、過去に実施したクリスマス時期のヨガックは「冬」という季節に結びついており、キリスト教の祝祭である「クリスマス」とは無関係な活動であったとされている。一方、クリスマス・ダンスに関しては 12 月 25 日、すなわちキリストの誕生した日に踊ることこそに意味があるとする村人の語りがある。つまり、クリスマス時期のヨガックに対する意味づけは、伝統チュピック／ユピック社会における冬の活動としての位置づけから、キリスト教の祝祭としてのクリスマスに関連する活動としての位置づけへと移行していったと言うことができよう。

３．バスケットボール

バスケットボールは冬場にも楽しめる室内競技として 19 世紀の終わりにアメリカで誕生したスポーツである（ネイスミス 1983[1941]）。本章ではチバック住民によるバスケットボールの受容と村落生活への定着の歴史を概観した後、クリスマス休暇に開催された二つのバスケットボール大会について記述し、社交的な活動としてのその性質を検討する。

３－１．バスケットボールの受容と定着

バスケットボールはアラスカ州内において指折りの人気スポーツである。2005 年度にアラスカ学校活動協会（Alaska School Activities Association）がアラスカ州内の高校生を対象として実施した調査では、バスケットボールはもっとも多くの高校生が参加する活動であった。また、男子高校生は好きなスポーツの第一位に、女子高校生はバレーボールに次ぐ第二位にバスケットボールをあげた（Alaska School Activities Association 2005:4-5）。

チバック住民がバスケットボールに触れるようになったのは 1960 年代のことであるが、その当時はそれほど人気のある活動ではなかった。例えば、1962 年及び 1965 年発行の学校新聞「チバック・ツンドラ」の児童紹介記事において、5 名の男子児童が趣味、もしくは好きなスポーツとしてバスケットボールを挙げている（Chevak Tundra 1962a, 1962b, 1963, 1964, 1965）。だが、その他大半の男子児童たちは「趣味」として狩猟、潮干狩り、釣りを、女子児童は裁縫、料理、読書をそれぞれ挙げている。また、村落生活の紹介記事の中にバスケットボール大会などの記述はない。

チバック住民のG氏は、自分がバスケットボールを始めたのはセントメリーズの寄宿高校での学校生活を通じてのことである、と語った。彼がチバックを離れ、セントメリーズでの高校生活を始めたのは1960年後半のことである。当時のチバックには高校がなかったため、高校進学のためにはG氏のように村外の寄宿高校に通わざるを得なかった。つまり、こうした寄宿学校生活での経験を通じて、チバック住民は徐々にバスケットボールに親しむようになったのである。

チバック村における初めてのバスケットボール大会は1976年に開催された。この年はチバック村での高等学校教育が始まった年にあたる。チバック住民H氏は、当時を振り返って「ろくな試合ではなかった」と試合の様子を語った。

以降、バスケットボールは村人に人気のスポーツとなる。1983年10月撮影のドキュメンタリーには、成人男性、成人女性の参加する試合の場面、そして生徒たちがユニフォームを着用し、学校体育館でシュート練習をする場面が収録されている（KYUK 1983）。生徒たちが課外活動でバスケットボールをする一方で、学校を卒業した村人たちは村バスケットボールリーグに参加することでバスケットボールを続けることが出来た。リーグ参加者は週に四度練習を行い、週末にはリーグ内、もしくは他村からのチームとの試合をした（McDiarmid 1983:66）。こうして毎週開催された試合は、選手は勿論、その観戦客にも、レクリエーションの機会を提供した（McDiarmid 1983:66）。また、1985年、1988年には高校バスケットボール部が州大会へと進出するなど、チバック住民のバスケットボール技術は年々向上していった。

表2 チバック及び近隣村落における試合一覧。

開催期間	大会名	開催村
12月16日～17日	フーパーベイ・クラッシック	フーパーベイ
12月26日～31日	**クリスマス・トーナメント**	**チバック**
1月4日	不明	フーパーベイ
1月6日、7日	対外試合（高校）	**チバック**
1月7日～10日	トーナメント	ヌフタック
1月13日、14日	対外試合（中学）	**チバック**
1月19日～22日	**KCUK トーナメント**	**チバック**
1月27日	対外試合（中学）	スキャモンベイ
1月28日	対外試合（高校）	ウラナクリート
2月3日、4日	対外試合（高校）	フーパーベイ
	不明	トゥクソックベイ

筆者作成。

現在バスケットボールはチバック村、並びに近隣村落において冬の娯楽としての位置づけを確固たるものとしている。表3－1は調査期間中にチバック住民が参加した試合の一覧である。まず、高校、中学バスケットボール部に所属する学生はほぼ毎週チバック村もしくは他村での対外試合を行っていた。また、筆者が直接観察できなかった1大会[9]（表には未記載）を加えると、12月から

[9] チバック村学校関係者の話によると、チバック村で12月上旬に「フープフェスタ」という大会が開催された。この大会は各村落の男子高校バスケットボール部、及び女子高校バスケットボール部が参加した大会であったが、参加村落、開催期間などその詳細は不明である。

2 月にかけて合計 3 つの大会がチバックで開催された。さらに、こうしたチバック村開催の試合に他村での大会開催を加えると、12 月下旬から 1 月下旬にかけて、ほぼ毎週チバック村及び近隣村落のどこかで大会が開かれていたことになる。

このように村でのバスケットボールは 1970 年代以降にはじまり、現在チバック村はもとより、近隣諸村落で数多くの大会が実施されるまでに至った。

3－2．フーパーベイ・クラッシック

「フーパーベイ・クラッシック」は毎年 12 月にチバック村の隣村であるフーパーベイ村で開催される高校女子バスケットボール大会である[10]。2005 年度大会は 12 月 16 日から 2 日間続いた。参加チームはフーパーベイ、チバック、スキャモンベイ、そしてノームの 4 チームであった。大会形式はこの 4 チームによる総当たり戦であった。合計 6 試合の結果、3 戦無敗のチバックが 2005 年度の優勝チームとなった。

試合会場であるフーパーベイ村学校体育館には連日多くの観戦客が訪れた。体育館設置の階段状観覧席（約 200 名が座ることが出来る）は常に満席状態で、エンドライン、サイドライン沿いの床にまで多くの観客が座っていた。

試合観戦には入場料を支払う。成人が 2 ドル、子供が 1 ドルである。ただし、60 歳以上の高齢者と幼児は無料で入場である。入場料を受付に支払うと受付係員が観客の手の甲にマジックで印をつけた。この印を係員に見せると一度体育館を出ても、再入場できる。

大会期間中には会場で 3 種類のくじが販売された。観戦客は売り子を呼び止めてくじを購入した。それぞれの賞品はジンジャー・ブレッド製の家、ケーキ、そして現金[11]であった。くじは 1 ドル単位で販売されているが、1 ドルあたりで購入できるくじの枚数は種類に応じて異なっていた。ジンジャー･ブレットくじが 4 チケット、ケーキくじが 2 チケット、現金くじが 1 チケットであった。くじの抽選は大会表彰式終了後に実施され、その場で賞品が渡された。また大会記念Tシャツ、菓子や各種炭酸飲料が学校購買店で販売されていた。

観客の大半はフーパーベイ住人であったが、中にはチバック村をはじめとする近隣村落住民の姿も見受けられた。こうした観客の一群としてまず挙げられるのは、出場選手の両親と年長のキョウダイである。彼らは選手の送迎を兼ねて、応援のためフーパーベイ村を訪問していた。例えばチバック住民の A 氏は、妻の B 氏と彼らの子供たちをつれて試合会場に現れた。チバック村高校バスケットボール部に所属する彼らの娘が本大会に参加したためであった。同じくチバック住民 C 氏も、妻の D 氏、息子の E 氏とともに自分の娘が出場する試合の観戦のためフーパーベイ村を連日訪れた。またチバック村高校チームのポイントゲッターである F さんのため、チバック在住の彼女の姉 3 名がフーパーベイ村まで駆けつけていた。

---

10 フーパーベイ･クラッシックの開始時期については不明である。

11 現金くじは「フィフティー･フィフティー」という名前で呼ばれる。くじの販売により集まった現金の半分を当選者、残りの半分を販売者が受け取る。そのため、当選金額は何枚のくじが売れたかにより変動する。

その他、選手の家族以外でチバックから来ていた人々としては、若者たち、とくにチバック村高校に在籍する男子高校生、とりわけ男子バスケットボール部のメンバーの姿が目立った。彼らはチバックのチームが出場する試合では大きな声を出し、手を叩き、足を踏み鳴らして応援していた。

応援において興味深いのは、チバック住民は決してフーパーベイのチームを応援しなかったことである。彼らは必ずフーパーベイの対戦相手を応援していた。同じようにフーパーベイ住民も決してチバックのチームを応援することは無かった。



写真2 地元チームへ声援を送る観客。
(2005年12月17日筆者撮影)

決勝戦終了後には表彰式が行われた。優勝、準優勝、3位、スポーツマンシップ賞に輝いたチームにそれぞれトロフィーが贈呈された[12]。また、ベストプレイヤーが5人選出された。チバックからは2選手が選ばれ、メダルが与えられた。

選手、観客としての大会への参加は、親族関係、友人関係にある人々と交流する機会でもあった。チバック住民はフーパーベイ在住の親族、知人を多く持つこともあって、試合の空き時間を利用して彼らを訪問したり、彼らの家で食事をとったりした。例えば、前述のG氏は孫を連れてフーパーベイ村の古老二名（I氏、J氏）を訪問した。そのうちの一人I氏はG氏の娘婿の父で、孫からみれば父方祖父にあたる。G氏はI氏宅で食事をご馳走になり、お茶を飲みながら40分ほど歓談した後、I氏宅を去った。G氏はI氏宅を離れる前に、I氏に「クリスマスプレゼント」と言って、小切手を手渡していた。次にG氏はJ氏の自宅を訪問した。G氏とJ氏との間の系譜関係の有無は不明である。ただ、J氏とG氏はともに敬虔なキリスト教徒であり、またエスキモー・ダンスなどで顔を合わせる機会が多い。G氏はここでも食事をご馳走になり、食後にお茶を飲みながら歓談した。G氏がJ氏宅を離れる際、元助祭であるJ氏はG氏の頭に手を置いて祈り、G氏に祝福を与えた。

3－3．クリスマス・トーナメント

「クリスマス・トーナメント」は1977年からチバック村で開催されているバスケットボール大会である。2005年度大会は12月27日から5日間、チバック村学校体育館（収容人数およそ400人）を会場に開催された。先に記述した「フーパーベイ・クラッシック」とは異なり、この大会は35歳以下の男性により構成されたチームが出場資格を持つ大会である。2005年度の参加チームは、地

[12] 高校生が参加するバスケットボール大会の場合、上記の賞以外に所属選手のGPA平均がもっとも高いチームに「アカデミック・アワード」が送られる。

元チバック村から 5 チーム、フーパーベイ村から 5 チーム、ヌフタック村から 2 チーム、スキャモンベイ村から 2 チーム、そしてセントメリーズ村から 1 チームの合計 15 チームであった。大会形式は、ダブル・トーナメント方式が採用されていた。2005 年度の決勝戦はフーパーベイのチームとヌフタックのチームが対戦し、結果フーパーベイのチームが優勝した。



写真 3　トーナメント決勝戦の様子。
(2005 年 12 月 31 日筆者撮影)

「フーパーベイ・クラッシック」と同様、「クリスマス・トーナメント」においても、観客は入場料を支払った。入場料は成人 3 ドル、子供 4 ドル、選手 5 ドルであった。但し、60 歳以上の高齢者は無料で入場できた。成人よりも子供の入場料が高く設定されている理由は、子供たちが試合中のコートの中に入り込むなどして試合を妨害することを防ぐためである。こうした料金設定は数年前にフーパーベイ村でのバスケットボール大会で始められ、チバック開催の大会でも導入したものだ、と関係者は語った。

先のバスケットボール大会と同様、学校購買店では炭酸飲料、ホットドックなどの軽食を販売していた。ただ、観覧席での飲食は禁止されており、飲食は体育館に併設したカフェテリアに限られていた。カフェテリアには大きなスクリーンがあり、そこには試合の様子がリアルタイムに映し出されていた。

またくじの販売も行われていた。賞品はアーミーナイフ、テレビゲーム (XBOX)、プラスチック製バケツ、コーヒーメーカー、掃除機、自転車、ガソリン、灯油、テレビ、冷蔵庫、そしてソリであった。くじは学校購買店において 1 チケット 1 ドルで販売していた。抽選は、最終日の表彰式後に行われた。

クリスマス・トーナメントの主催はチバック村学校であった。大会運営はチバック村学校教師 2 名の指導の下で、高校バスケットボール部部員たちがトーナメント表の作成などの事前準備から、大会期間中の会場設営、会場管理、入場受付、飲食物販売、くじ当選者の発表などのすべてを担当した。

クリスマス・トーナメントで得た収益はチバック村学校高校生たちのスポーツ活動費にあてる、と学校関係者は語った。チバック村学校はバスケットボールをはじめとするスポーツ活動の機会を生徒たちに提供しており、生徒たちは対外試合のために他村落を訪問することがしばしばある。だが、村落間の主な移動手段が飛行機であるアラスカ南西部では、対外試合をするたびに飛行機をチャーターしなければならない。つまり、クリスマス・トーナメントで得た収益をスポーツ活動費として充当することで、生徒たちはより多くの活動機会を得ることが出来るのである。

大会にはチバック住民は勿論のこと、フーパーベイ村、ヌフタック村、スキャモンベイ村などからも観客が訪れた。とりわけ、フーパーベイのチームが決勝に進んだこともあり、決勝戦の会場はフーパーベイのチームを応援する歓声に包まれ、さながらフーパーベイ村で開催されている大会であるかのような状態だった。一方、決勝戦を観戦するチバック住民はフーパーベイの対戦相手であるヌフタックのチームに声援を送っていた。

大会最終日にはトーナメント戦とは別に、50 歳以上のチバック住民とフーパーベイ住民によるエキシビジョン・マッチが行われた。フーパーベイ村の代表選手に関しての詳細は不明であるが、チバック村代表は、50 歳後半から 60 歳までの往年の名プレーヤーたちで構成されていた。彼らの中には村のバスケットボールリーグの現役メンバーも含まれている。観客たちは惜しみない拍手と歓声で、彼らのプレーを後押しした。この対戦ではフーパーベイ代表が勝利した。

決勝戦終了後、入賞チームとベストプレイヤーの表彰があり、それぞれトロフィーを授与された。

「フーパーベイ・クラッシック」の場合と同様、大会期間中には村外からの観戦客がチバック住民たちを訪問していた。例えば H 氏宅には隣村のフーパーベイ村に暮らしている彼の母親 K 氏が滞在していた。H 氏一家とクリスマス休暇を過ごすためにチバック村に滞在していた K 氏は、H 氏の妻の L 氏とともに試合を見に行ったり、H 氏宅の隣に暮らす M 氏を訪問したりなどしてチバック滞在を楽しんでいた。ちなみに、M 氏は H 氏の妻である L 氏の祖母の姉妹という関係にある。また大会期間中フーパーベイ村の若者 2 名が H 氏宅を訪問した。H 氏はこの若者たちに食事や飲み物を出そうとしたが、彼らは次の試合が始まってしまうからと言い残して、そのまま去っていった。

３－４．バスケットボール大会の性質

上述した二つの事例に基づき、ユッピック／チュピック村落におけるバスケットボール大会が社交的な活動としていかなる性質を持っているのかを列挙する。

まず、大会への参加者に目を向けると、大会を開催する村落の住民以外の住民が数多く参加している点を指摘できる。例えば、クリスマス・トーナメントでは参加した 15 チーム中、10 チームがチバック村外から参加したチームであった。また、観客として試合を観戦に来たチバック村外の住民の存在も忘れることは出来ない。開催村以外の人々が選手として、もしくは観客として参加するという点はフーパーベイ・クラッシックにおいても同様に確認できる。このように大会は村の枠組みを越えた社交の機会を提供するのである。

しかも、こうした社交は大会会場の外部でも行われている。上述の二大会では、近隣の村外から大会にやってきた人々が、ついでにチバック村に住む親族や知人宅を訪問するという光景がいたるところで繰り広げられていた。例えば、フーパーベイ・クラッシックの折に G 氏が訪ねた I 氏と J 氏の場合、彼ら自身は大会会場には足を運んでおらず、その意味で大会に参加していたとは言えない。にもかかわらず、大会は非参加者である両者にも他村に暮らす G 氏との交流の機会を提供した

のだと言える。つまり、大会は、大会会場のみならず、それが開催される村落の社会生活全体に影響を及ぼしているのである。

次に、大会は村落住民間のアイデンティティの違いが表出する機会である点を指摘出来る。観客は自分の村のチームに絶えず声援を送り、自分の村のチームに対する不利な判定には大声を上げて抗議する。大会はこのような行動を通して、それぞれの観客がどちらの村の出身であるかということが可視化される場なのである。また、対戦では異なったアイデンティティを持った観客同士のライバル意識を見ることが出来る。選手はバスケットボールというスポーツで競い合い、一方観客は応援を通して互いに競い合っているのである。

また、大会は単なる娯楽行事という側面だけでなく興行としての側面を持っている点も指摘できる。じじつ、クリスマス・トーナメントの記述において言及したように、バスケットボール大会の開催は主催者側の資金集めの手段となっているのである[13]。

４．冬の娯楽行事にみる村落社会生活の変化と持続

クリスマス休暇というアメリカ主流社会の枠組みの中に組み込まれるという歴史的過程を経るなかで、ユッピック／・チュピックの冬の娯楽の性格には変化が生じた。社交的な活動としての冬の娯楽という観点から現行の「クリスマス・ダンス」を過去のヨガックと対照することで明らかになったのは、村落間の住民同士の社会関係の維持に果たしてきたヨガックの機能が縮小したことである。また、現行の「クリスマス・ダンス」におけるダンサーの構成は主に、学校と言う組織、そして同一世帯に暮らす親子関係（母子関係）を基調としており、村落内住民間の社会関係維持に果たしてきたヨガックの役割にも陰りがみえる。現行の「クリスマス・ダンス」がキリスト教の祝祭としてのクリスマスとの関係性を強め、その結果「エスキモーの冬」とヨガックの関係性が相対的に弱まった点も指摘できる。さらに、1970 年代以降から新たな冬の娯楽としてのバスケットボール大会の定着とその後の発展は、アメリカ主流社会における冬季活動がユッピック／チュピック村落社会に浸透し、人気を得たことを示唆する。

クリスマス・ダンスをめぐる今日的状況は、冬季における社交的な活動に対する主流社会の影響力の強さを物語っている。キリスト教の祝祭であるクリスマスのある 12 月、冬の屋内活動として主流社会で誕生したスポーツであるバスケットボールを楽しむ 12 月といった、主流社会のカレンダーが織り成すリズムはユッピック／チュピックの冬の社会生活に大きな影をおとしている。

このような様式の変化にもかかわらず、「エスキモーのカレンダー」に記された「社交期としての冬」という伝統時代からの季節の位置づけが現在のチバックにおいても冬の村落社会生活を律しているということは注目に値する。主流社会の冬季の娯楽活動であるバスケットボールを受容したユ

[13] クリスマス休暇以後にチバックで開催されたKYCKトーナメントはチバック村ラジオ局が主催した資金集めを目的としたバスケットボール・トーナメントであった。また、1 月上旬（表２参照）にヌフタックで開催されたトーナメントもまた、高騰する燃料費をまかなうためにヌフタック村伝統評議会が主催した大会であった。

ッピック／チュピックは、それを取り込んで、村落の枠組みを越えた「社交期としての冬」を実践しているのだ。かつてのヨガック・パフォーマンスにおいて認知された村落同士の競合もまた、バスケットボールの対戦として形式を変えて続いている。そして、バスケットボールはヨガックと同様、村人に娯楽の機会を提供している。バスケットボール大会は興行であり、参加者は現金を支払って娯楽を買うのであり、その意味で村落外からの参加者を「ゲスト」として返礼を期待することなくもてなし贈答品を与えた伝統儀礼とは対照的である。しかしながら、本論でも指摘したとおり、バスケットボール大会の影響力は、会場内にとどまらず、村落の社会生活全体に及んでいるのである。

つまり、社交的な活動の観点からみたユッピック／チュピックにとっての 12 月は、「あちこち周辺にでかけるとき」としての意味づけを失っていない。バスケットボールを拠り所にユッピック／チュピックは互いの村を訪問しあいながら、村外に広がる社会関係を維持、強化している。村落住民間の社交場はカジキから学校体育館へとその中心を移し、住民同士はヨガックのエンターテイメント性からバスケットボールの技術によってしのぎを削るようになった。しかしながら、冬はモースが 100 年以上も前に指摘した「観念上の集団が再構成される機会」であり続けている。すなわち、冬は依然として「エスキモーのカレンダー」に記されている通り「社交期としての冬」なのである。

付記

本論文が依拠する研究は、東北大学 21 世紀 COE プログラム・社会階層と不平等研究教育拠点からの支援により実現したものである。

５．文献

Alaska School Activities Association
2005 “”ASAA Winter 2005 Newsletter 48(27).
Chevak Tundra
1962a Chevak Tundra (School Newspaper) September, Chevak Day School.
1962b Chevak Tundra (School Newspaper) December, Chevak Day School.
1963 Chevak Tundra (School Newspaper) May, Chevak Day School.
1964 Chevak Tundra (School Newspaper) December, Chevak Day School.
1965 Chevak Tundra (School Newspaper) February, Chevak Day School.
1967 Chevak Tundra(School Newspaper), Chevak Day School.
Fienup-Riordan, Ann
1986 *When Our Bad Season Comes: A Cultural Account of Subsistence Harvesting and*

Harvest Disruption on the Yukon Delta, Alaska Anthropological Association Monograph Series #1, Anchorage, Alaska Anthropological Association.

1991 *The Real People and the Children of Thunder-The Yup'ik Eskimo Encounter with Moravian Missionaries John and Edith Kilbuk*, Norman and London, University of Oklahoma Press.

1994 *Boundaries and Passages: Rule and Ritual in Yup'ik Eskimo Oral Tradition*, Norman and London: University of Oklahoma Press.

Flander, Nicholas Edward

1986 *Passage: Socioeconomic Change and Cultural Continuity in an Alaskan Community*, Ph.D Dissertation, Columbia University.

Jacobson, Steve A.

1984 *Yup'ik Eskimo Dictionary*, Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska Fairbanks

久保田亮

2005「儀礼とダンスの断絶－宣教師の活動をめぐるアラスカ先住民ユピックの歴史認識」『東北人類学論壇』4 :1-20。

Lantis, Margaret

1947 *Alaskan Eskimo Ceremonialism*, Seattle and London: University of Washington Press.

モース、マルセル（Mauss, Marcel）

1981 『エスキモー社会　その季節的変異に関する社会形態学的研究』宮本卓也訳、東京：未来社（Eassai sure les variations asisonniéres, des sociétés Eskmos: Étude de morphologie sociale', 1906）。

McDiarmid, G Williamson

1983 Community and Competence: A Study of An Indigenous Primary Prevention Organization in an Alaskan Village, White Could Journal 3(1): 53-74.

Ménager, Francis M.

1962 *The Kingdom of the Seal*, Chicago: Loyola University Press.

Morrow, Phyllis

1984 It is Time for Drumming: A Summary of Recent Research on Yup'ik Ceremonialism, *Etudes/Inuit/Studies* 8:113-140.

Pingayak, John F.

1998 *Cup'ik Studies: History and Culture*, Unpublished Manuscript, Chevak, Kashunamiut School District.

State of Alaska (Alaska Division of Community Advocacy)

2000 *Community Database Online*, http://www.dced.state.ak.us/dca/commdb/CF_COMDB.htm

KYUK TV Production

1983 People of Kashunuk, Bethel: KYUK Video Productions.

ネイスミス、ジェームス（Naismith, James）

1983(1980)『バスケットボール　その起源と発展』水谷豊訳、東京：YMCA 同盟出版部（Basketball It's origin and development, Association Press, 1941）。

調 査 報 告

変貌する社会の中の農村家族
－韓国慶尚北道高霊郡Ａ面Ｂ村のＣ氏一家の生活史－

菅原　順也

１．はじめに

この約 40 年のあいだに、韓国社会は急速な変貌を遂げた。1960 年代の初めまで世界最貧国の一つに数えられていた国が、1960 年代後半から本格化した工業化によって「漢江の奇跡」と呼ばれる経済成長を果たし、1996 年にはアジアで 2 番目の OECD 加盟国となったのであり、その中で、人口構成・就業構造・生活文化などのあらゆる部分に、ドラスティックな変化が生じて来た。

本稿は、そのような韓国社会の変貌の中、農村で日々の暮らしを営んできたある家族に焦点をあて、紙幅の許す限りにおいて、その家族の生活史を詳述するものである。そのような微視的な視点と「冗長な」記述を採用する理由は次の 2 点にある。第一に、それにより今後の韓国社会研究に資する形での民族誌資料の提示が可能となり、そのことは現地調査の報告書を兼ねる本稿の趣旨に沿うものだからである。第二に、韓国社会の変貌のいわば草の根レベルを定点観測的に見ることは、その変貌の中を生きた人びとの姿をリアルに描き出すことであり、現代韓国社会や韓国現代史の理解に貢献できると考えるからである。

本稿で提示するC氏一家の生活史は、筆者が 2004 年 3 月から 2005 年 8 月まで調査地農村に住み込んでいた期間中に、その一家と食事を共にし、農作業を手伝い、儀礼や行楽に同行し、彼らと何百時間という時間を共にする中で、聞き集めたものである[1]。ラポール（信頼関係）を築けたのは幸いだった。もちろん、断片的に語られた話の内容の信頼性を高めるため、家族への集中的なインタビューを何度も行ったほか、他の村人たちから得た情報や文献資料等によりクロスチェックを行うよう、最大限心がけた[2]。

調査地である韓国慶尚北道高霊郡Ａ面Ｂ村は、2005 年 8 月現在の住民登録世帯数が 110 戸、人

---

[1] この調査は、文部科学省の平成 15 年度アジア諸国等派遣留学生として韓国・慶北大学校大学院留学中（2003 年 9 月～2005 年 8 月）に、同校嶺南文化研究院の研究補助員という立場で実施した。C氏をはじめとするB村の住民の方々、劉明基先生をはじめとする慶北大学校嶺南文化研究院の先生方、東北大学文学研究科文化人類学研究室の嶋陸奥彦先生・沼崎一郎先生・松本尚之先生、文部科学省と東北大学のご担当の方々など、筆者の現地調査をご支援くださったすべての方々に、この場を借りて、心から感謝を申し上げたい。

[2] 現在も調査地で暮らしている一家の生活史を扱っているという、本稿の性格上、一家やその関係者に害を及ぼすことがないよう、最大限に注意を払う必要である。個人名や地名を仮名処理したほか、学問的には重要と思われる内容であっても、微妙な問題については極力言及を避けた。これらの点について、ご了承いただきたい。

口が 350 名（男性 163 名、女性 187 名）の各姓村落である。慶尚北道の中心地で人口 250 万人を抱える大邱市から B 村までは、大邱市の西部停留場から高霊郡の中心市街（「邑内」）までがバスで 35 分、「邑内」から A 面の役場がある中心集落までがバスで 10 分、さらにそこから B 村の入り口までが徒歩で 5 分という距離である。中には世帯主が公務員・工場労働者・フォークレーン技師・トラック運転手として村外で働いている家もあるが、B 村の世帯の多くは現在も農業を生業としており、村の中には農地が広がっている。主な作物は、夏季が稲作、冬季がタマネギとビニールハウスでのイチゴである。

２．C 氏一家の生活史

（1）山奥の村での幼少時代（1955 年～1968 年）

C 氏は、1955 年の秋、1930 年生まれで 8 人キョウダイの長男である父と 1934 年生まれの母との間に、男 5 人の兄弟の長子として生まれた。

当時 C 氏の一家が住んでいたのは、慶尚南道と慶尚北道を南北に分かつ山嶺の南側、慶尚南道 D 郡の E 村。C 氏が「すごい山奥」と評するその集落は、D 郡の中心市街（「邑内」）から国道を北西に 7 キロほど遡り、そこからさらに 1 キロほど山側に入った場所にある。背後にそびえる山嶺を一つ越えれば、C 氏一家が現在暮らしている慶尚北道高霊郡の A 面だ。今でこそ「邑内」から E 村へ向かうセマウルバスも走っているが、当時は国道沿いを通るバスが 1 日に数便ある程度だった。E 村では自動車どころか自転車を見ることすら珍しく、C 氏たち村の子供たちは、数日ごとに「邑内」から来る郵便配達夫の自転車を見つけると、坂道を上る自転車を我先に後ろから押したという。C 氏の記憶では、彼の幼少時、E 村には様々な姓からなる約 70 世帯の人びとが、農業を生業として暮らしていた。

当時、C 氏の家族は、祖父・祖母・父・母・叔父（未婚）2 人・C 氏の 7 人家族であり、後にこの村で 3 人の弟が生まれた。2 人の叔父（それぞれ C 氏より 12 歳と 9 歳年長）は、その当時仕事をしに晋州市など都会に出て暮らしており、家には時々戻って来る程度だった。家屋は、瓦屋根の母屋と別棟が 1 棟ずつ、それに藁葺き屋根の納屋が 1 棟あり、E 村の中では、比較的立派な方だったという。里帰りした叔父 2 人や後から生まれた弟たちは、母屋にある C 氏の父母の部屋で寝起きをしたが、将来家を継ぐことになる長男の C 氏だけは、祖父母が特に寵愛し、別棟にある彼らの部屋で寝起きをし、食事をした。

1962 年春、C 氏は E 村から 15 分ほど下ったところにある小さな国民学校に入学した。1 学年約 40 人で、男女比はほぼ等しかった。当時、E 村でも就学年齢に達した子供のほとんどは国民学校に通うようになっていたが、中には家庭の事情により家の仕事を手伝わなければならず（弟妹の世話など）、学校に来られない子供たちも僅かながらいた。

この時代、他の村人たちと同様、C 氏の家でも稲作（夏季）と麦作（冬季）の二毛作を行ってい

たが、山間集落であるE村で農作業をする労苦は、並大抵のものではなかった。まず、田は山腹に点在しているため、家からそこに行くのに30分近くも坂道を上って行かなければならず、さらに1つの田から次の田に移動するのにもたいへんな時間と労苦を要した。仕事が多くて野良で食事をとるような場合を例にとっても、C氏の母は用意した食事を頭の上に載せ、延々と坂道を上って来なければならなかった。

C氏の家では日常的な農作業は基本的に父親が一人で担っており、母親は炊事・洗濯などの家事と育児を第一に行いながら、片手間に草取りなどの仕事を手伝っていた。忙しく働く両親とは対照的に、祖父と祖母は、C氏の言葉によれば、「仕事もせずただ家でゴロゴロしていた」。平均寿命も短く、人手にも不自由しなかったその当時、普通、人びとは40代にもなればもう仕事はせずキセルなどを手にブラブラしており、50代にもなれば完全に「お年寄り」としての待遇を受けたためだ。

一方、子供たちは、国民学校を出る歳になれば大人と同じように牛を繰って野良仕事をすることが求められた。国民学校に通っている子供でも、田植え・刈入れなど忙しい時期になると、家の中で父母の代わりに弟妹たちの面倒を見る役割を任された。そのため、C氏の級友の中にも、田植えや刈入れの時期になると学校を休む者が多かったという。ただしC氏の家では、そのような場合、祖母が弟たちの面倒を見てくれたため、C氏が学校を休むことはなかった。そのほか、各家が主に役畜として飼育している牛の世話も、子供や老母たちが任されるのが一般的だった。C氏の家でも、弟たちがまだ幼いために、牛の世話はC氏の担当とされ、C氏は夏になると毎日、放課後に牛を山へ連れて行った。山にはいつも子供たちや老母たちを中心に40人ほどが来ており、「牛隊長」の指示の下、自分の家の牛に草を食ませていた。「牛隊長」は、翌日どこの山に牛を連れて行くかや、山でみんなで食べる「チャム참」(間食:当時は麦と大豆を炒めたものが一般的だった)を翌日だれが持ってくるかなどを指示するのが仕事で、主に村の若い男性が務めた。以上のほか、当時は炊事・オンドル暖房などはすべて薪を燃やして行っていため、山に行って薪を集めて来るというのも、子供たちを含むC氏の家族全員の仕事となっていた。

田植えの時期など、まとまった労働力が必要な場合には、労働力が家族の外部から調達される。そのような場合にまず動員されたのは、同じE村に住んでいたC氏の「姑母」(父の妹)夫妻や「5寸」(父の従兄弟)夫妻である。そしてそれらの親族だけでは足りない場合には、村人たちと「プマシ품앗이」(労働交換)を行ったり、村の豊かでない人に現金や米を労賃として渡し労働力を買ったりした。そのほか、E村では耕地が山腹に点在しているため、刈入れ後の収穫物を家まで運ぶのは一苦労であるが、放置しておけば雨に濡れる可能性もある。そのような場合、近くに耕地を持っている人が自分の家の仕事を終えて村に下りる際、収穫物の運搬を手伝ってあげる慣習があり、「ウルリョク울력」(労働提供)と呼ばれていた。「ウルリョク」は、本来、困っている相手のために僅かな時間と力を提供するものであり、代価は必要とされないが、助けを受けた家の主人は庭に食事と酒を用意し、荷物を運んで来てくれた相手にもてなすのが一般的だった。C氏は「ウルリョク」について筆者に説明する中で、「もし今、ウチの村で、“オレのところはまだ仕事が終わっていないか

ら手伝ってくれ”なんて言ったら、“アイツは頭がおかしい”と言われるだろう。今はみんな、自分のところの仕事で手一杯だからだ。でも、60 年代、70 年代には、それが通じた」と述べた。

E村での幼少時代の生活について筆者が尋ねた際、C氏が真っ先に述べたのは、「当時は食べる物がなかった」ということだ。量を増やすために家のご飯は米と麦に大根を混ぜて炊いてあり、毎日のおかずも、サツマイモやジャガイモを茹でたもの程度だった。キムチですら、調味料とトウガラシ粉が貴重だったため、塩と少しのトウガラシ粉で味をつけた程度で、今のようには辛くも美味しくもなかった。学校に弁当を持っていく余裕などなく、昼食はいつも抜きだった。肉が食卓にのぼるのは、正月と「秋夕」（陰暦 8 月 15 日）の名節時や田植え終了後に村で豚 1 頭を屠り、村人たちで分けた時ぐらいだった。魚も貴重であり、名節や祭祀の時など特別な日を除けば、「邑内」で 5 日ごとに開かれている定期市に祖父母が出かけて行きタチウオを手に提げて来た時に口にできる程度だったという[3]。

（2）B 村への移住と中学・高校時代（1968 年～1974 年）

1968 年の春、国民学校を卒業した C 氏は、D 郡の「邑内」にある中学校に進学した。C 氏の記憶によれば、一緒に卒業した男子・女子それぞれ約 20 人のうち、男子は半分程度、女子は 3 人程度が、入学試験を受けて中学校に進学し、それ以外は、ほぼ全員が、工場などで働くために釜山を筆頭に大邱・ソウルなどの大都市に出て行った。当時の農村では、子供の数が多い一方で食べる物は不足していたため、親も子供たちが都市に出て働き金を稼いで来ることを歓迎しており、一方の子供の側も、家にいたところで野良仕事や薪集めを手伝わなければならずロクな扱いもされないことから、自ら都市へと出て行ったという。

C氏一家がE村の屋敷と田畑をすべて売り払い、慶尚北道高霊郡A面のB村に移住して来たのは、1968 年の 12 月、C氏が中学校 1 年の時だ。数年前にC氏の祖父が他界して以後、一家の家長となっていたC氏の父は、自身の生まれ故郷であり「8 寸」（8 親等の間隔）程度の比較的近い親族が何軒か暮らしていたB村への移住を決断した。理由は地理的・経済的なものである。E村は地価こそ非常に安いものの農業を営むにはあまりに環境が厳しいが、一方のB村は洛東江の支流に流れ込む河川の流域に位置しており、平坦な土地がふんだんにあったためだ。B村はA面の役場がある中心集落から橋一つ渡ったところにあり、交通や生活の便という点でもE村よりはるかに優れていた[4]。

---

[3] C氏の家では、「邑内」で 5 日おきに開かれる定期市に行くのは、主に、特にすることのない祖父母だった。家で飼っていた豚が子豚を産んだときに背負子に入れて市場に売りに行く場合など、しんどい仕事があるときは、C氏の父親が行った。

[4] B村には、C氏一家のように比較的最近になって慶尚南道D郡など近隣の地域から移住してきた人びとがかなり多い。彼らの多くはB村転入の理由として、広い平地と交通の便といった地理的な理由、または、B村が後に換金作物（主にキュウリ・イチゴ）栽培で潤ったことに関連した経済的な理由の、いずれかをあげる。しかし、この地域に長く住みついて来た所謂「トバギ」（土着）住民たちの中には、それら新規移住者の転入の背景には社会的な理由があったと考える人びともいる。それらの人びとは、筆者に対し、「あの連中はもともと住んでいた村でちゃんとした扱いを受けられなかったからこの村に来た」であるとか、「（彼らは）両班の真似事をするために来た」といった、移住を「班常関係」（旧身分関係）と結び付ける見解を示した。

B 村で C 氏一家が居を構えたのは、村の入り口から村の中心部に向かう途中、5 軒あまりの家が集まって立っている中の一軒だ。大邱に転出するという人から約 15 万ウォンで買ったその家は、「解放」（1945 年 8 月 15 日の日本統治からの解放）から間もない時期に建てられた瓦屋根の作りで、土壁で囲まれた屋敷地の中に、母屋・納屋・小さな小屋の 3 棟があった。一家が B 村に移住して来た当時、家にいたのは祖母・父・母・C 氏・弟 3 人で、しばらくして末弟が生まれた。2 人の叔父はまだ所帯を持っていなかったが、1 人は晋州市の工場かどこかで仕事をしており、もう 1 人は軍人としてベトナムに行っていた。

転居が学期末にあたったため、C 氏は当初、バスで慶尚南道 D 郡の中学校まで通わなければならなかったが、2 年生になる 1969 年の春から、高霊邑にある中学校に転校した。そして、2 年後の 1971 年には、高霊農業高等学校へと進学した。C 氏の記憶によれば、中学校で一緒だった約 200 名の卒業生（すべて男子）のうちの約半数、100 名程度が高校に進学した。中には難しい試験に挑戦してソウルや大邱など大都市にある進学校に進む者もいたが、ほとんどは C 氏と同じ高校に進んだという。C 氏は当時、役場のある隣村のバス停留場からバスに乗って「邑内」の中学・高校に通っていたが、同停留場は大邱や高霊「邑内」と陜川・海印寺・居昌・全羅道方面を結ぶバスがすべて通る幹線道路沿いにあるため、その時代でも 15 分も待てば「邑内」に向かうバスが来たという。

C 氏の父親は、家を購入した残金を資金にして自宅近くに田を購入し、従来同様、夏季の稲作と冬季の麦作の二毛作を始めた。当時の B 村の地価は、もっとも条件のいい農地で坪 350 ウォンから 400 ウォンという高い水準であり、以前に暮らしていた E 村の田畑を売った金ではそれほど多くの田を買うことはできなかった。しかし C 氏の父親は、その後、弟たち（C 氏の叔父）が外で稼いで来る金なども使って少しずつ田を買い増し、もっとも多い時には 10 団地（1 団地＝田 1 区画＝600 坪）近い農地を保有するまでになった。これについて C 氏は、当時は銀行に金を預けるという習慣が無かったため、金が入れば「無条件に」田を買ったためだと説明する。

B村への転入後、野良仕事は基本的に「モスム叶合」（作男）を使ってC氏の父親が一人で行った。「モスム」は同じB村に住む一人暮らしの 30 代の男性で、1 年に籾 10 俵支払うことを条件に、毎日C氏の家に来て仕事を手伝っていた[5]。当時はまだ耕運機などの農業機械が無かったため、E村から連れて来た牛を使って農作業をしなければならなかったが、ここでは田畑が家の近くにあり効率よく仕事ができるため、耕地が増えても父親と「モスム」だけで労働力を賄うことが可能だった[6]。薪集めに関しても、山間のE村で暮らしていた頃は背負子（チゲ）を背負って山道を上り、薪集めをしなければならなかったため、非常に非効率的で、冬になると家族全員がその仕事を手伝わなければならなかった。それが、ここでは国道沿いにリアカーを引いて峠まで行き一度にたくさんの薪を運んで来ることができるため、父親か「モスム」だけがその仕事をすれば十分だった。C氏の母親は主に

[5] 籾 10 俵の年報酬のほか、3 度の食事とタバコ 1 箱、「マッコルリ」（どぶろく）1 本が毎日提供された。
[6] この当時C氏の家にあった唯一の農業機械は、B村転入の翌年に購入した、発動機式の脱穀機である。E村で使っていた「03」と呼ばれる足踏み式の脱穀機から買い換えたものだ。その発動機式の脱穀機は、1970 年代後半にC氏の家に耕運機が導入され、脱穀作業もそれで行うようになるまで、活躍した。

家事と育児に専念をしており、仕事がある場合のみ、子供たちの世話を姑（C氏祖母）に頼み、野良で草取りなどをした。そのほか、C氏の家では、E村にいた当時、牛を山に連れて行く仕事がC氏に任されていたが、B村に来てからは、夏の間のみ、その仕事のために村の子供を一人雇った。その子は学校が終わるとC氏の家に来て牛を野に連れて行き、C氏の家で夕食を食べて帰った。B村に転入した後のこの時期、それまで課せられていた薪集めや牛の世話などから解放され、C氏自身、生活が非常に楽になったという。

まとまった労働力が必要な作業の際、B 村で主に用いられたのは、「プマシ」だった。B 村に長く暮らしてきた村人の話によれば、B 村でも以前は労働の代価を求めない「ウルリョク」の慣習があったというが、C 氏一家が転入して来た当時、その慣習はすでに消滅してしまっていた。これについて C 氏は、E 村は山奥にあり人びとも純粋だから「ウルリョク」の慣習がまだ残っていたが、「ここ（B 村）はあっち（E 村）よりもそういう点で 10 年ぐらい進んでいるから」早くに無くなってしまったのだろうと述べる。

田植えの際には「コジモ고지모」と呼ばれる請負方式も用いられた。「コジモ」とは、1 団地あたりいくらという一定額を支払うことで、その区画の田植えに関する一切の仕事を丸ごと委託する方式である。作業を受け負った人は近隣の村に住む主に若い女性たちを集め、田植え作業を指揮し、彼女たちに報酬を支払った。この方式は、人手を集めたり作業当日彼らに食事を提供したりといった面倒な仕事が一切なく、しかも当人たちが早く仕事を終えようと努力し作業が短時間で終了するなど、作業を委託する側にとってメリットが大きいため、C 氏の家でも利用した。一方、刈入れの場合には田植えと違い、力仕事ができる男性労働力が必要となった。そのため、C 氏の家では、同じ B 村の中に住む「8 寸」や「10 寸」といった親族のうち、刈入れをする自家の田を有していない人に、代価を払って働いてもらった。

C氏が中学・高校に通っていたこの時期、C氏一家のB村での生活は、C氏が「それなりにいい暮らしをしていた」と述べる程度にまで改善されていた。生活環境という面では、転入の翌年、1969 年の秋に耕地整理事業が行われ、ウネウネしていた村の中の道や耕地の境界線は、ブルドーザーでまっすぐに整備された。1971 年頃には韓国電力の電気も通った[7]。また、朴正熙大統領の掛け声で開始されたセマウル運動が 1971 年以降全国的に拡大する中で、B村の家々も屋根が藁葺きからスレートに、塀が土塀からブロック塀に改良され、狭かった路地もまっすぐに整備拡張された。C氏の家も、屋根はもともと瓦屋根だったが塀は土塀だったため、道路に面した部分だけブロック塀に改修した。この時期の特筆すべき点は、C氏が高校 1 年生だった 1972 年前後、A面全体でもおそらく最初に、C氏の家に白黒テレビが入ったことだ。兵役を終えて帰国していた叔父がエンジニアとして再びベトナムに赴き、そこで稼いだ金で高霊「邑内」の電器屋から買って来たものである。それ以後、この地域の農村でもテレビが普及していくまでの間、C氏の家には夜毎、近隣の村からも大

[7] その何年か前に、村の中の精米所が水流でタービンを回して発電を行い、各戸に電気を送っていたというが、発電が不安定でほとんど使い物にならなかったという。

勢の人びとが押し寄せ、縁側にしつらえたテレビを見て行った。特に、ボクシングやサッカーの中継があるような日は、後片付けが大変なほどに混雑したという。

食生活の面でも、この時期には大きな改善が見られた。まず肉や魚が頻繁に食卓に上るようになった。サバやタチウオなどを売る行商の女性が高霊「邑内」から毎日のようにやって来て村の家々を訪ねて回っていたほか、肉も、特別な日でなくても父親が高霊市場内の精肉店で買って来たりするようになったためだ[8]。現在の韓国では日常食の一つとなっているインスタントラーメンというものをC氏が初めて食べたのも、この時期、C氏が中学 2 年生だった冬の日のことだ。当時、特にする仕事のない冬になると、C氏の父親と年齢の近い親戚たちがいつもC氏の家に集まって花札などに興じていたのだが、ある日、彼らがラーメンを茹でて食べようと言い出し、隣村の売店で買って来ることになったのである。食べつけなかったため、全部食べることはできなかったというが、C氏は今でも庭の釜で茹でて作ったそのときのラーメンの味を懐かしく覚えている。

(3) 結婚とキュウリ農業の時代 (1974 年〜1985 年)

1974 年の春、C 氏は農業高校を卒業した。友人たちの進路は、大学に行く者、軍士官学校に入学する者、公務員試験を受ける者、父母の仕事を引き継ぐ者、商売を始める者など、様々だった。C 氏も初め、公務員試験を受けることも考え大邱の親戚の家に出ていたというが、数ヶ月で B 村に戻って来た。そして友人たちと思う存分に遊ぶなどした後、1976 年の春に軍隊に入隊した。京畿道加平の訓練所と北朝鮮と臨津江で対峙する京畿道坡州の部隊で計 36 ヶ月間の兵役期間を全うし除隊したのは 1979 年の 2 月 6 日だった。

C氏の叔父 2 人はC氏の高校時代に嫁を貰い、B村の中に所帯を構えていたため、C氏が兵役から戻って来た時、家に残っていたのは祖母・父・母・弟 4 人だった。ただし祖母はこの年の夏に他界した。C氏の叔父たちが嫁を娶り所帯を構えたとき、C氏の父親はそれぞれに田 2 団地・3 団地を与え、住居など新生活に必要なものもすべて揃えてやった。これにより 10 団地近くあったC氏の家の土地は一気に半分程度にまで減少した。それでも当時の農業は基本的には家族の食糧用であり、今のように税金・光熱費・子女教育費などで現金をあれこれ支出する機会も少なかったため、所有農地が多少減ったところで、家族が食うに困るようなことは全くなかったという[9]。

この時期、C氏の家での労働のあり方に大きな変化が生じた。原因となったのは、C氏の兵役期間中に家に入ってきていた耕運機である。その影響は絶大で、C氏が軍隊から帰って来てみると、C

8 その当時、B村の人びとがものの売買のために出かけたのは、高霊「邑内」で 5 日ごとに開かれる定期市場 (開市日：毎月 2 日・7 日・12 日・17 日・22 日・27 日) だった。C氏の家では、C氏の祖母が長く中風を患っていたことに加え、母親も市場に買い物に行くのを好まなかったため、買い物は主にC氏の父親の担当だった。妻 (C氏の母親) が頼みさえすれば、C氏の父は、肉であれ魚であれ、C氏の文房具であれ下着であれ、何でも買って来た。

9 その当時、農家の最大の現金収入源は、農業ではなく牛であり、人びとは、子供の教育等のためにまとまった金が必要な場合、子牛を売ってその金を用意した。「子牛をちゃんと産む牛が家に 1 頭いれば、子供を大学までやれる」という言葉もあったという。

氏のすぐ下の弟が牛ではなく耕耘機を使って田の起耕作業を手伝っていたほか、そのころ始めたタマネギ農業の収穫物なども耕運機で「邑内」の定期市に運ばれるようになっていた。その一方で、長いこと役畜として活躍してきたC氏の家の牛は、子牛を産ませて現金を得るためだけの存在になってしまった。また、長い間C氏の家で働いてきた「モスム」も、同様にお役御免となった[10]。

除隊してB村に戻って来たこの時期に、C氏は農業で食べていく人生から抜け出そうとしたことがある。電気工として働いていた叔父を見て、あの仕事なら自分もうまくできそうだと考え、蔚山の現代重工造船所の求人に両親に内緒で応募したのである。しかし郵便で届いた採用通知書を見たC氏の父親は、これは何だと一言尋ねただけで、その書類を破り捨ててしまった。C氏はそのとき、親父ももう歳だし、次力仕事もできなくなって来ている、長男である自分が両親を手伝うしかない、と自分を納得させたという[11]。だが、今になってC氏は、「でもよく考えてみると、あのときの親父の年齢は今の俺の歳でしかないんだよ！」と笑い、「あのとき出て行かなきゃだった。あの時出て行っていれば、こんな苦労はしなかったのに」と悔しそうな口調で語る。

C氏が軍隊から戻って来た当時、B村では稲作の裏作として、麦に代わってキュウリの温室栽培が盛んになっていた。麦とは比較にならない高収入のためだ[12]。C氏の父親も、C氏が除隊して来た年の秋の刈入れが済むと、早速C氏に命じてキュウリ農業の準備に取り掛かった。C氏に言わせれば、父親はあれこれ指示をするだけで、ビニールハウスの支柱に使う竹を竹やぶから運んで来るといった実際の仕事を担ったのは、すべてC氏である。見よう見まねで行ったビニールハウス 3 棟のキュウリ農業だったが、なんとか成功した。それを受けて、翌 1980 年にはC氏の故郷E村に住んでいたC氏の姑母夫妻もB村へと移住して来る。彼らは、当時大邱に出ていた息子からそこでの仕事を紹介されていたが、都市に出てやっていけるだけの自信はなく、逡巡していた。そのような時C氏の父親からB村のキュウリ農業の話を聞き、C氏一家を頼りにここに移り住んだのだった。

1981 年 11 月。C 氏は、嫁を貰えとの父母の言葉に従って何度か見合いをした末に、4 歳年下の現在の妻と結婚した。相手は、故郷は C 氏と同じ慶尚南道 D 郡だが、学校を出てからはずっと大邱市内の機織工場で働いて来たという女性だった。結婚式は D 郡の新婦の家からほど近い結婚式場

[10] C氏が軍隊に行く少し前ぐらいから、C氏の家では、薪ではなく主に練炭が燃料として使われるようになっていた。薪を集めて来る仕事の必要性・重要性が低下したことも、C氏の家で「モスム」を雇う必要がなくなった理由の一つだった。

[11] 後にC氏の弟たちがトラックの運転手や電気工などを職業として選んだとき、C氏の父親は「(彼らは) どうせ (家を) 出て行く人間だから」と、特に何も言わなかったという。

[12] B村の現代史に大きな影響を与えたB村のキュウリ農業は、1973 年ごろ、大学の農学部を出た経歴を持つ一人の村人が、自身の知っている技術をもとに、村人 3 人と「協同農場」を作り、トマトやキュウリの栽培を始めたのが起源だ。A面管内での最初の特殊作物栽培である。当時はまだキュウリの生産地自体が少なく、土壌などB村の自然条件もキュウリ栽培に最適なものだったことから、その事業は大成功をおさめた。「協同農場」を作った時のメンバーの一人 (男、72 歳) によれば、キュウリ農業を始めたばかりの頃、段ボール一箱分のキュウリが米 1 叭 (かます) の値段もしたという。当時は、田 1 団地を賃借りして 1 年間キュウリ農業をすればその土地を買えるほどだったという。「協同農場」は、複数の人間が協同して農業を行うということの困難さから 4 年目に解散された。しかし、その後のB村でのキュウリ農業の繁栄は、「協同農場」での技術が拡散して生じたものである。

で行い、新郎は当時流行だった長髪にタキシード、新婦は白いウェディングドレスで写真に納まった。B 村の C 氏の家に移動し、親戚たち・村人たちに対する挨拶を行った後、2 人はバスを乗り継いで慶州に新婚旅行に出かけた。

母屋の一部屋で始まった 2 人の新婚生活は、新婦にとってはつらい「시집살이」（婚家暮らし）の始まりだった。C氏の母親は当時まだ 43 歳だったが、自分が嫁に来たときに姑（C氏の祖母）がそうしたように、以後一切の家事は嫁にまかせ、自分は「ハルモニ할머니」（おばあさん）としての待遇を受けて当然だと考えていた。そのため、炊事・洗濯から、下はまだ小学校 5 年生だったC氏の弟たちの面倒までが、C氏の妻にのしかかった。しかもこの家は「큰집」（本家）である。「작은집」（分家）の人びとが毎日のように訪ねて来ていて「ラーメンを段ボール一箱買ってきても 3 日も持たない」ほどだったため、家事を任された者の苦労は大変なものだった。C氏も時には妻に手を貸そうとしたというが、例えば台所の水桶に代わりに水を満たしてやるのにも父母の目を避けて夜中にこっそりやらなければならないほど男女の性役割にうるさい時代だったため、結局、何もしてやれなかったという[13]。また、C氏夫妻に長女（1982 年）に続いて再び女子（1983 年）が生まれた時も、家を継承する男子の誕生を期待していたC氏の父親は腹を立て、しばらくはミルク代すら出してくれなかった。C氏の妻は、当時の「シジプサリ」について、自分は都市暮らしが長かったため特に田舎での「シジプサリ」にうまく馴染めなかったと言い、当時の心境を、「どこかに出かけて帰ってきて村の入り口にある橋を渡る時は、死にに行くような心持ちだった」とまで述べる。C氏夫妻に待望の男の子（第三子）が生まれたのは 1985 年のことである。

キュウリ農業は、稲作や麦作とは違い、ビニールハウスの管理やキュウリの摘み取りといった仕事が冬の間継続して発生するため、人手がかかる。中心になって働いたのはもちろん C 氏である。C 氏一家がキュウリを耕作したビニールハウス 3 棟（1 団地=600 坪に 3 棟のビニールハウスが入る）という規模は、3 人（C 氏・父親・母親）がフルに労働力を提供すれば外部労働力なしでも耕作できる限界の広さだったという。赤ん坊の世話などに忙しかった C 氏の妻は、主に家事・育児に専念していたが、キュウリ農業でも一定の役割を果たしもした。例えばキュウリを摘む日の彼らの分業体制は、C 氏・父親・母親が 3 棟あるビニールハウスにそれぞれ入りキュウリを摘み取って行き、あとはビニールハウスの前に建てられた選別作業場に来ている C 氏の妻が、幼い子供たちの世話をしながら、大きさと形でキュウリを仕分けする、という流れだった。ただし、苗のビニールハウスへの移植や摘花などの作業時にはさらに 1-2 名の人手が必要となったため、そのような場合には、同じくキュウリ農業をしている C 氏の姑母夫妻との間で「プマシ」を行った。

B 村のキュウリは、1980 年代の前半まで、大邱の青果市場でもその名が知られていた。そのため収穫期になると、各農家が選別作業を行っている作業場に商人たちが直接顔を出し、1 本いくらと

[13] C氏夫妻が子供を連れて妻の実家に出かけるような時、妻が、片手にはオムツの入ったカバン、もう一方の手には子供の手を引き、背中には赤ん坊を背負って苦しそうに歩いていても、C氏は立ち止まってもくれず、村の入り口にある橋を越えてはじめて、オムツの入ったカバンを持ってくれたという。オムツの入ったカバンを持って妻と並んで歩いている姿でも村の人に見られようものなら、村人たちの物笑いの種になったからだ。

いう交渉の末、競うようにキュウリを買って行った。当時の商人たちは自分のトラックなどを持っていないため、バスでB村まで来て、帰りは、幹線道路を巡回している営業用貨物車を止めてキュウリを積み、大邱に送るのが一般的だった。そのため耕運機やリアカーにキュウリを載せ、営業用貨物車の止まる隣村のバス停留場に運ぶまでが各農家の仕事だった。そして停留場では、貨物車が来るまでの間、商人たちが彼らに食事や酒を振る舞ってくれた。バス停留場の前は、以前は酒場で今は売店になっているが、この店に 1975 年に嫁に来た現在の女主人は、当時商人たちが時にお互いに喧嘩までしながらキュウリ農家の農民たちを接待していた様をよく覚えている。

しばらくして農民たちは、中間商人たちが暴利を貪り自分たちを食い物にしているということに気がつき始める。B 村のキュウリ農家たちは 1983 年頃になって「作目班」と呼ばれる生産者組織を結成した。そして「作目班」として運送業者と契約し、村中のキュウリを 2.5t トラックで直接ソウルの競売場に送るようになった。当時はまだオンライン送金というシステムが無かったため、輸送トラックの運転手が自ら競売の売上金が入った封筒を持ち帰り、「作目班」のメンバーたちに渡した。1980 年代以降キュウリの生産地が全国に拡散しく中で、キュウリの価格も当初に比べればだいぶ下がったものの、それでもC氏によれば“悪くなかった”。

田植えに関して言えば、若年層を中心とした労働力が都市に流出して行く中で、「コジモ」（請負方式の田植え）が行われなくなった。それに代わって B 村で行われたのが、「プマシ」の一種である、「오브랜모어부랑모」と呼ばれる方式である。気の合う者同士数人がチームを組んで各人の家の田植えを順々に行って行くという方式で、家ごとに耕作面積が違うことで生じる不公平は、たくさん耕作している人が少ない人に金銭を支払うことで補償した。C 氏の家では、主婦である C 氏の母親が C 氏の姑母ら近所に住む気心の知れた主婦 4 人と「オブランモ」のチームを組んだ。そして、以後、B 村に田植機が導入される 1990 年代初めまで、C 氏の家では毎年このチームによって田植えが行われるようになった。なお、田植え前の起耕はC氏が耕運機を使って行い、田に水を張ったり土手を補修したりするのはC氏の父親、田植え当日に主婦たちに提供する食事を用意するのはC氏の妻だった。

1970 年代後半以降、B村ではキュウリ、A面内の他の村ではイチゴの栽培が普及して行く中で、地域住民たちは多くの現金を手に入れるようになった。C氏一家がそうであったように、多くの家ではそれらの収入は子供たちが都市に出て学校に通ったり、結婚して所帯を構えたりするための費用に回された。だが中には突然手にした現金を花札博打やA面の中心部に 7 軒ほどできた「茶房（タバン）」（マダムのいる喫茶店）での飲食などにつぎ込んでしまう人もいた。またそのような「ゆとり」を背景に、1980 年代の特に中盤以降、この地域では、各種の「契」（頼母子講）をはじめ、ありとあらゆる種類の親睦のための集まりが作られた。C氏によれば、その数・種類は「ないものがないほど」だったという。その結果、C氏自身、これ以後、夏の農閑期はそれらの集まりの野遊会の予定だけでスケジュールが一杯になり、連日あちこちに遊びに行くだけで夏が終わってしまうほどだった。

B 村の他の村人たちと同様、C 氏も、特に 1980 年代以降になって、自分たちの暮らしが確実に良くなってきていることを実感するようになっていた。C 氏を含むB村の住民たちの説明によれば、朴正熙大統領の 1960 年代・70 年代に「ポリコゲ보릿고개」（春窮期）が根絶され、人びとが「食べられるようになった」のに続き、全斗煥大統領の 1980 年代になって、「確実に暮らしぶりがよくなった」、「（生活の厳しさが）和らいだ」。1980 年代は、光州民主化運動（1980 年）や 6.29 民主化宣言（1987 年）など、韓国社会の現代史にとっては重要な事件が続いた時期である。しかし C 氏ら農民たちとそれらの社会的な事件との距離は、遠い。「都市に住んでいる、オレたちより頭がいい連中にとっては重要かも分からないけど、“民主化”がどうであろうと、オレたちは自分たちがいい暮らしができればそれでよかった。オレたちには関係ない」、「全斗煥大統領は良くやったと思うよ、オレたちがいい暮らしができたんだから」といった C 氏の言葉が示すように、彼らにとって重要なのは、何よりも日々の自分たちの暮らしだった。

（4）イチゴ農業の時代①（1985 年～1995 年）

収入面では魅力のあるキュウリ農業だったが、その代償も大きかった。最大の原因は筵（むしろ）にある。「低温性作物」であるイチゴと異なり、「高温性作物」であるキュウリは寒さに弱い。冬季にビニールハウスでキュウリを育てるためには、気温が下がる夜の間、ビニールハウスの周りをたくさんの筵で覆い、ビニールハウス内を保温してやる必要がある。毎朝・毎晩、筵の撤去と設置を繰り返すのがキュウリ農家の重要な日課だった。しかも筵は水を吸うと重量が増し、翌朝それを外すことができなくなる。そのため、雨が降り出せば、夜中でも筵を外しにビニールハウスに駆けつけなければならなかった。C氏たちB村のキュウリ農家の人びとが気の休まる間もない筵の管理に苦労していた頃、C氏より 2 つ年下の若い村人が大邱から故郷に戻ってきて、B村で初めてビニールハウスでのイチゴ農業を開始した[14]。1982 年頃のことである。C氏はその男性がイチゴ農業を営む様子を見て、何よりも筵による面倒な保温作業が無いことに惹かれ、1985 年、自らもイチゴ農業へとシフトした。長男が生まれた年のことだ。キュウリ農業は資材費や人件費があまり掛からずイチゴ農業よりも収入面では有利だったが、その後、筵作業の負担から、B村の他のキュウリ農家も相次いでイチゴ農業に乗り換えた。

イチゴ農業とキュウリ農業には相違点も多い。まず、キュウリ農業が冬の間だけの裏作物であるのに対し、イチゴ農業は苗育成（5 月～9 月）→ビニールハウス準備・苗移植（9 月）→ビニールハウス管理（9 月～5 月）→収穫（12 月～5 月）といった具合に 1 年を通して仕事があり、その手間の多さは比較にならない[15]。仕事の性格も、キュウリ農業が力仕事など村人たちが「男がする仕事」

[14] 高霊郡A面では、1966 年に一人の農民が河川敷でイチゴの路地栽培を試みたのを端緒にイチゴ農業が広がり、1975 年以降は、ビニールハウスを利用した栽培が本格的に行われていた。B村はキュウリ農業が盛んであったため、面内の他の村に比べればイチゴ栽培の開始が遅かった。

[15] 村の人びとは、イチゴ農業について、「13 ヶ月農事」という言葉を使う。前年に植えたイチゴの収穫作業が進行中の 5 月に、早くも次年度分の苗の育成を始めなければならない、イチゴ農業の手間の多さを表した言葉

と考える仕事を含んでいるのに対し、イチゴ農業は、村人たちが「女がする仕事」と考える、座ったり屈んだりしたまま行う細々とした手間の掛かる仕事がとにかく多い。イチゴを収穫する時期を中心に、各イチゴ農家は家族外部から女性労働力を雇うことになる。ビニールハウス 5 棟（1 団地=600 坪に 3 棟のビニールハウスが入る）でイチゴ農業を始めたC氏の家の場合、収穫期にはほぼ連日、C氏の妻・母親に加え、同じ村の女性 2〜3 人を日雇いの「働き手」として使うようになった。収穫作業の流れとしては、まずC氏の母親と「働き手」2 人がビニールハウスの中で腰を屈めて一日中熟したイチゴの実を摘み取り続ける。一方、C氏の妻ともう一人の「働き手」は、ビニールハウス前の選別作業場の床に座り、選別作業台の上に広げたイチゴを大きさごとに選別し、手早くしかも見栄えよく容器に詰めて行く。男性C氏は母親たちがビニールハウス内で摘んだイチゴを妻たちが作業をしている選別作業場に運んだり、妻たちがイチゴを詰め終えた容器にラップをかけて出荷用ボックスに入れたりなど、女性たちの仕事をサポートするような作業を担う。その一方で、日常的な作業に関してはC氏の父親の出番がほとんどなくなり、冬の間の彼の仕事はタマネギ畑の様子を見て回ったりすること程度になった[16]。夏の盛りのイチゴの苗の育成や秋の苗移植も、同様にC氏 1 名プラス女性複数（妻・母親・「働き手」数名）という体制で行われる。

キュウリ農業の時と同様、B村のイチゴ農家たちは「作目班」を組織した。会員数は当初 13 軒だった。「作目班」は、共同での生産資材の購入を行ったほか、各農家が週に何日か一斉にイチゴを収穫し、その日の夜に運送会社の 8t トラックでまとめてソウルに送るなど、出荷面で大きな機能を果たした。キュウリの時と同様、当初はイチゴを運んで行った業者が売上金を持ち帰り、それを各農家に手渡していたが、売上金を紛失するといった事件も起きたため、出荷の際に「作目班」のメンバー 1 名が交代でトラックに同乗して行くといった対策もとられた。オンライン入金というシステムができ、青果商から各農家の農協の口座に売上金が直接振り込まれるようになるのは、1990 年ごろのことである[17]。

1992 年、B 村のイチゴ「作目班」は隣接する 4 つの村のイチゴ「作目班」とともに 1 つの「営農組合」（生産者組合）を結成した。イチゴ栽培が全国的に拡散し産地間の競争も激化する中、それぞれの村が別個に「作目班」を作り週に何日かのみ商品を送っていたのでは市場で強い力を持てない、との思惑からである。会員農家数は計 105 軒に達し、イチゴの収穫期になると、毎晩、A 面の中心集落に作られた集荷場から大量のイチゴを積んだトラックが首都圏に向けて出発するようになった。各農家はいつでも自由にイチゴを収穫できるようになり便利にはなった。しかし C 氏たちに言わせれば、村単位での「作目班」の時代にみんなで協力して出荷作業をし、その後で集荷場代わ

だ。

[16] ただし、収穫するイチゴの量が少なく「働き手」をわざわざ雇わない日、ビニールハウスのビニールを掛け直す日、苗育成のために田を整地する日などには、C氏の父親もイチゴ農業の欠かせない労働力となった。

[17] C氏の家では、この時期はまだ、C氏の父親が家計や財産の管理を行っていた。C氏は、運送業者がソウルから持ち帰った現金封筒をそのまま父親に手渡していたほか、C氏名義の農協の口座にオンライン入金がされるようになった後も 30〜50 万ウォンずつ出金しては父親に預けていた。父親がそれらを箪笥の中などにしまって管理し、C氏や妻は現金支出の必要があるたびに、父親から金を受け取って支払った。

りの売店前でみんなで酒を飲んだりすることで感じていた「面白さ」は、それ以後無くなってしまったという。

B 村には、1991 年、トラクター・田植機・コンバインという 3 つの大型農業機械が初めて導入された。C 氏よりもやや年下の村人 2 名が政府の補助金を受け、一人が田植機とコンバイン、もう一人がトラクターをそれぞれ購入したのである。彼らはその翌年度から、他の家の農作業を請け負う「委託」と呼ばれる仕事を開始した。金さえ払えば田植えや刈取りも数時間のうちに機械でやって貰えるようになったのであり、C 氏の家でもこれ以後「オブランモ」による手作業での田植えなどは行われなくなった。

韓国社会では、1990 年前後から急速に、全国的に自家用車の普及が進んだが、この現象は C 氏たち B 村のイチゴ農家の暮らしにも大きく影響した。C 氏がイチゴを栽培する 5 棟のビニールハウスは、大邱・高霊方面と陜川・晋州方面とを結ぶ幹線国道沿いにある。1990 年頃から、主に週末にそこを人が訪ねて来てイチゴを買って行くということが起こり始めた。週末を利用して大邱から遊びに来た自家用車のドライバーたちだった。それに目をつけた C 氏たち B 村の 5 軒のイチゴ農家は、1992 年から週末ごとに国道脇でイチゴの直販を開始した。結果は大成功で、パラソルを立てて待っているだけで車が列を作って待つほどで、多い日は 1 日に 50～60 万ウォンもの売り上げがあった。今では A 面管内のどこでも見られる道路沿いでのイチゴ直販だが、このとき C 氏たちが始めたのが最初だった。しかし間もなく 88 高速道路の高霊 IC の前などにイチゴの直売所が林立するようになり、B 村でイチゴを買って行く客はいなくなったため、早くも 1994 年には断念した。それとは別に、C 氏夫妻は 1993 年頃から、1990 年に購入した自身の軽トラックを利用して、自ら大邱の街角まで行ってイチゴを売り始めた。平日、午前中のうちにビニールハウスでの収穫作業を済ませて大邱に行き、午後から夕方にかけ、アパート団地の近くなどの路上に車を止めて、近くに住む消費者たちに直接販売した。これもよく売れたという。

この時期、C 氏一家の生活は一層「近代的な」ものへと変化した。台所の改良が好例である。既に見たとおり、C 氏の幼少期、家の炊事やオンドル暖房のための燃料は薪であり、山から薪を集めて来るのが C 氏たちの重要な日課の一つだった。薪から練炭に燃料が変わったのは C 氏が軍隊に入る少し前の時期（1976 年）であり、さらに 1983 年前後には台所にガスレンジが導入された。練炭はすぐには燃えないため、朝など早く湯を沸かしたい時には不便だったが、ガスレンジはその問題を解決してくれた。ただしオンドル暖房の燃料は引き続き練炭だった。最後に行われたのが 1987 年頃の「厨房改良工事」である。これは個人負担 300～400 万ウォンと国からの補助金により台所を「近代的」に改良するというもので、当時の B 村での一種の流行だった。C 氏の家の台所はそれまで土間作りで、「飯炊き場」とでも呼ぶべき暗い場所だったが、この工事により土間の上に床が貼られ、台所が家族が集まって食事をする明るい空間へと生まれ変わったという。あわせて、竈が床下に隠れたのに伴いオンドル暖房も石油ボイラーに変わった。そのほか C 氏の家に洗濯機やカラーテレビが来たのもこの時期（1987 年頃）である。1988 年のソウルオリンピックはそのカラーテレ

ビで楽しんだという。

C 氏の家では 1990 年にも別の工事が行われた。それまで C 氏夫妻と子供たちは、C 氏たちの新婚時代からずっと母屋の狭い一室で暮らして来た。しかし箪笥とテレビが置かれた旧式家屋の部屋に親子 5 人で暮らすのはさすがに窮屈で、敷地内に別棟を建てることにしたのである。小さな倉庫を壊した場所に建てられた新しい洋風の建物には、C 氏夫妻と子供たちが暮らす部屋 2 つと倉庫のほか、浴室も作られた。C 氏の家ではそれまで、庭の井戸の脇でゴムタライに水を張って沐浴をしたり、村の前を流れる川で水浴びをしたりして沐浴を済ませていたが、これにより屋内での入浴が可能になった。

この時期、すでに家を出ていた C 氏の 4 人の弟たちが相次いで嫁を娶り、所帯を構えた。C 氏の父親が息子たちのために新居の準備金など必要な費用をすべて出してやったが、長男である C 氏とその妻が中心になって家計を支えていたことを考えれば、C 氏の妻の「私たち（夫婦）が弟たちに所帯を持たせてやった」という表現は、正しいと言える。

⑸ イチゴ農業の時代②（1995 年～2004 年）

1995 年頃、C 氏は、妻と 3 人の子供たちを連れて村を出て大邱に移住する決心を固めた。B 村の「里長」（村長）や「開発契長」も務めた C 氏だったが、心の中ではいつも、自分がこれからも B 村に住んで農業で食べて行く人生を選ぶべきなのか、それとも思い切って村を出るべきなのか、悩み続けていた。そして子供の教育環境、農業で食べていくことの難しさ、嫁入り当初から都市暮らしを望んでいた妻の気持ちなどを考えた末、自身が 40 代になった今が最後のチャンスと決心したのである。C 氏夫妻には C 氏名義の口座にオンラインで振り込まれて来るイチゴの売上金の中から両親に秘密で積み立てておいた約 7 千万ウォンの貯金があった。彼らはその金で大邱に家を借り、C 氏がトラックなどの運転手の仕事、妻が食堂でのパートなどをして生活費を稼いでいく計画を立てた。両親にも自分たちの決意を伝え、あとは実際に住む家を決めるだけという段階まで来ていた C 氏夫妻の計画だったが、大邱で家を見て回り自分の家に戻った時、彼らは、自分たちの留守中、両親が何も口にせずに自分たちの帰りを待っていたことを知らされた。両親の無言にして強固な意思表示を受け、彼らは計画を断念するほかなかった。

この事件を契機にC氏夫妻は腹を決めた。2 人は以後“一生懸命に農業を営み、ここに良い家を建て、自分と自分の家族が良い暮らしができるようにする”ということを自分たちの目標と定めた。彼らはまず、大邱で家を借りるのに使うはずだった 7 千万ウォンの貯金で農地 2 団地を購入した（1998 年）。農業を営んで成功をするには大規模にやることが不可欠だと考えたためだ。C氏夫妻は 2005 年の春にもそれまで長いこと賃借していた約 700 坪の田を坪 5 万 7 千ウォンで購入しているが、彼らはその際にも「両親が『（規模拡大は）もうそのぐらいにしておけ』と反対するのは分かっていたから、私たちだけで相談して全部決めて、両親には最後に話だけした」、「できるなら 1 団地でも多くやりたい。私たちは欲が深いから」と笑いながら語った。C氏一家によるこのような耕

地の拡大を可能にしたのは、すでに述べたB村への大型機械（田植機・コンバイン・トラクター）の導入と「委託」の開始である[18]。C氏たちは、以前は自家労働力で1〜2団地植える程度だった冬季のタマネギ農業も、外部の労働力を大量に動員して大規模に行うようにしたほか、夏の暑い盛りに手間のかかるイチゴの苗をたくさん育て他の家にも売ることで収入を得もした。社交生活の面でも、以前は「ずっとここに住み続けるか50対50ぐらいの気持ちだったから、それまでは仕事もそんなに一生懸命やらず、里長やいろいろな集まりの総務職などをたくさん引き受けて出歩いてばかりだった」が、この時期以後、可能な限り自分の家の農作業に時間とエネルギーを打ち込むため、なるべくそういった仕事も引き受けないようにしたという。

この時期はB村の農民たちを取り巻く環境が次第に厳しいものになって来た時期でもある。第一に、都市への人口流出と高齢化の進展により、労働力の不足が深刻化した。C氏の家でイチゴの収穫期にイチゴを摘んだり選別したりするために雇う「働き手」を例にとれば、当初はB村に住む女性たちに仕事を頼んでいたのだが、1995年前後にそれまで毎年来て貰っていた人たちが転出や高齢を理由に継続できなくなったとき、村の中では代わりになる人を見つけることができなかった。手の空いている人の中にその仕事ができる健康状態の人が残っていなかったためだ。以後C氏の家では、C氏が毎朝他の村から車で往復30分近くかけて「働き手」を連れて来るようになった。一度に20人近い「働き手」を雇う必要があるタマネギ収穫の時期など、各農家の主婦が日程調整を行い、1ヶ月以上も前から世話人を通じて「働き手」を予約しておいたりする程だ。ただしこのような努力の末に確保できる「働き手」もほぼ全員が70代以上の「ハルモニ」（おばあさん）であり、中には80代というケースもある。その中でも少しでも仕事のできる「ハルモニ」を押さえることが、C氏たちをはじめB村の農民たちの重要な課題となっている。

第二に、イチゴ農業の収益性の低下である。1997年の韓国の経済危機とそれ以後の経済不況は、それまでイチゴのような嗜好品の消費を牽引していた都市中産階級の生活を直撃した。1993年から大邱の住宅街でイチゴの直接販売を行っていたC氏夫妻はその影響を肌で感じており、経済危機以後、イチゴの売り上げは激減したという。そのため彼らは大邱に出る回数を次第に減らすようになり、2004年からは完全に中止している。このように需要が減少する一方、イチゴの生産は全国に拡散を続けて来た。かつてはイチゴの産地として知られた高霊郡も、今では数多いイチゴ産地の一つに過ぎなくなっている。市場は飽和状態で、C氏たちに言わせれば、イチゴの販売価格は「10年前も今も同じ」である。それにもかかわらず生産コストは上昇の一途を辿って来た。都市消費者の好みに合わせ、栽培品種・栽培方法・包装などがよりコストのかかるものへと変化してきているほか、原油価格の高騰はビニール・肥料などの生産資材や輸送にかかるコストを上昇させた。人件費も、C氏一家がイチゴ農業を始めた当初に3千ウォンだった「働き手」の日当が、今では朝晩の送り迎えつきで2万3千ウォンになっている。

[18] C氏自身もその後、管理機（畑に畝をつくるのに用いる機械：1997年頃）・トラクター（2000年）・堆肥散布機（2005年）など、農業機械を少しずつ買い揃えて来ている。

この時期にC氏たちが生活のゆとりを失ったもう一つの要因は、彼らの「世代」の問題にある。この地域で農業を牽引し経済活動の中心となって来たのは、キュウリ農業やイチゴ農業が導入された当時に若者だった、現在年齢40〜50代の人びとである。そして1990年代中盤以降という時期は、C氏をはじめとするその世代にとって、子供の教育にもっとも金がかかる時期に当たっていた。倹約はどの家にとっても必然的な選択だった[19]。

こうした状況により、この地域では 1980 年代の好況下で誕生した数多くの親睦の集まりの参加率が低下したり、A面の中心集落に最も多いときに 7 軒ほどあった「茶房(タバン)」の数が 4 軒へと減少したりした。C氏自身、この時期以降、絶対に必要だと考える 2 つの集まり ― B村洞友会（B村に住む同年代の男性たちの親睦会）とA面乙未会（A面内に住む乙未年生まれの人びとの親睦会）の会合 ― を除き、他の集まりには参加しなくなったという。

(6) 2005 年現在

C氏一家が現在住んでいるのは、B村への転入後 35 年にわたり住み続けて来た家を取り壊して2003 年秋に新しく建てたコンクリート作り 2 階建ての洋風家屋である。屋外に作られた階段から 2 階に上がると玄関がある。玄関を開けて中に入ると 8 畳ほどの広さの広いフローリングの空間（「居室」）があり、その周りに「内房」（C氏夫妻の部屋）・「小房」（子供たちの部屋）2 部屋・台所・浴室が配されている。「居室」は空間的にも機能的にもこの家の中心であり、C氏夫妻や子供たちは、普段、大型テレビやエアコンがあるこの部屋で寝そべって談笑するなどしてくつろいでいる。名節時や忌日に「チャグンチプ」（分家）の人びとも集まってC氏の亡祖父母に対する祖先祭祀が執り行うのも、この「居室」においてである。一方、建物の 1 階部分は、C氏の両親が生活する空間と、農業資材・食糧などを保管するための倉庫になっている。1 階にも浴室などの設備があり、両親は基本的に 1 階で起居しているが、食事だけはC氏の妻が作ったものを 2 階台所の座卓で食べる。ただし両親は朝食も夕食も他の家族たちよりも先に、別に食べるのが一般的である[20]。庭には、約 3 年前に買い換えたC氏の軽トラック、C氏の父親が村の中を乗って回るための自転車などが置かれているほか、犬が 1 匹繋がれている。古い家では現金収入源として牛と豚を飼っていたが、家の新築にともないそれらは処分した。隣の家との間にはトラクター・耕運機・管理機・堆肥散布機が整然と置かれている。

現在 C 氏夫妻は 51 歳と 47 歳になった。結婚式の写真では初々しい表情でタキシードとウェディ

---

19 なお、C氏の家では従来C氏の父親がすべての出納を管理しており、C氏夫妻が必要とする時には、その都度、父親から現金を受け取って支払っていたが、長女が高校に上がった 1998 年頃からはC氏夫妻が現金を支出する機会が増え、そのやり方では面倒になったため、C氏夫妻が直接家計を管理し、両親には毎月一定額の小遣いを渡すようになった。

20 C氏一家のある 1 日（2004 年 12 月 13 日）の朝食の内容を例示すると、ご飯、白菜のキムチ、じゃこの煮付け、エゴマの葉の漬物、切り干し大根と海苔の和え物、海苔、イカの煮付け、「アルタリ大根알타리무」（小ぶりの大根）のキムチ、「トウガラシのムルム고추무름」（青トウガラシに小麦粉をまぶして蒸し薬味醤油で和えたもの）、白菜と里芋と卵のおつゆ、コーヒーだった。C氏一家の食生活の詳細な内容については、朝倉（2005：113-119）を参照のこと。

ングドレスに身を包んでいた 2 人も、今やすっかり貫禄のある農家の「アジョシ」（おじさん）と「アジュモニ」（おばさん）になっている。C 氏の両親はどちらも 70 代になっており、特に調子の悪いところはないものの身体の衰えは隠せなくなっている。

子供たちもすっかり大きくなった。勉強が得意だった長女は高校から慶尚北道清道郡の進学校で寮生活をし、2001 年春に 4 年制の大学の数学科に入学した。大邱市内の姨母（C 氏の妻の妹）の家に下宿をし、そこから大学に通っていたが、現在は大学を一時休学し、高霊「邑内」の職場で臨時職員として働いている。一方、次女は美術が得意で、高校進学時には浦項市にある美術系の高校に行きたいと C 氏たちに懇願した。しかしすでに長女を高校の寄宿舎に入れていた C 氏一家に次女までを寄宿舎に送る余裕はなく、その願いを叶えてはやれなかった。そのことについて C 氏夫妻は今でも娘に申し訳なく思っている。地元の高校に通った次女は、その後、姉と同じく大邱市内の姨母の家から専門大学に通い、2004 年の春に卒業した。現在は姉と同じ職場で、同じく臨時職員として勤めている。そして子煩悩な C 氏は、毎朝・毎晩、娘たちを軽トラックで高霊「邑内」の職場まで送り迎えしている。学生時代を大邱で過ごしたこともあり、娘 2 人は何かにつけては大邱に出て行く。友達に会うのも、髪を切るのも、服を買うのもすべて大邱であり、ほとんど週末ごとにバスで大邱に出かけては、ピザなども食べて帰ってくる。

一人息子である長男は、現在、大邱市内の専門大学の 2 年生で、電気工になるための勉強中である。姨母の家から大学に通った姉たちとは異なり、キャンパス内の寄宿舎で暮らしている。当初 C 氏夫妻は息子に、将来、公務員など月給を受け取って「楽に」暮らせる仕事に就いて欲しいと考えていたため、彼が 4 年制の大学に進学することを望んでいた。しかし本人は高霊「邑内」で電気工を営んでいる叔父（C 氏の末弟）のところで一緒に働きたいとの意志が強く、結局 C 氏たちは「本人が行きたいと言うんだからしょうがない」とあきらめた。2005 年 9 月から、長男は 2 年間の兵役に入っている。

表 1 は、2005 年 1 月～12 月にC氏が耕作した 12 ヶ所の耕地（①～⑫）について、その 12 ヶ月の栽培スケジュールを大雑把に示したものである[21]。

子供 3 人をすべて大学までやり、現在、村の中でも一、二を争う立派な家に暮らしている C 氏だが、農村から出られなかった自身の人生を今でも悔やんでいる。C 氏によれば、かつての国民学校のクラスメート約 40 人のうち、今も自分のように田舎に残っているのはわずか 3 人、他は都市に出て暮らしており、すでに廃校になった同校の同窓会すら、釜山・ソウル・大邱などで持ち回りで行われている。C 氏は、大邱で行われる年の同窓会にも参加しない理由を、「都会に暮らす勤め人た

[21] (1)⑦および⑫はそれぞれ 200 坪程度の小区画だが、他の耕地はほぼ 600 坪である。
(2)⑩および⑪は、A 面内の他の村の土地を賃借して耕作しているものである。
(3)④は一毛作のみ可能な田、⑫は畑であるが、他はすべて二毛作が可能な田である。
(4)①および②には、1 年中、ビニールハウスが各 3 棟・2 棟ずつ立っている。夏季のゴマとトウガラシは、イチゴを抜いた後、そのままハウスの中に植えられる。
(5)この表には出ていないが、主に自家の食糧用として、各耕地の隅などにサンチュ・トウモロコシ・サツマイモ・サトイモ・小豆・大豆なども植えられている。

ち」と「農業をやっている人間」とではスケジュールが合わないから、とのみ語る。韓国社会の急激な変化は、40 年前に山奥の同じ国民学校で学んだ子供たちの人生の間にも、大きな違いを作り出している。

表１．栽培スケジュール

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
①	イチゴ					ゴマ			イチゴ			
②	イチゴ					トウガラシ			イチゴ			
③	休	休	休	休	イチゴ苗					休	タマネギ	
④	休	休	休	休	稲作					休	休	休
⑤	タマネギ					稲作					タマネギ	
⑥	タマネギ					稲作					タマネギ	
⑦	タマネギ					休	休	休	タマネギ苗		タマネギ	
⑧	タマネギ					稲作					タマネギ	
⑨	タマネギ					稲作					タマネギ	
⑩	タマネギ					稲作					タマネギ	
⑪	タマネギ					稲作					タマネギ	
⑫	休	休	休	休	イチゴ苗		トウガラシ			白菜・大根ほか		

C氏夫妻は、今、自分たちが 60 歳になるまでは、これまでどおり少しでも多く農業を行おうと考えている。子供たちを大学まで行かせてやることと、B村に立派な家を建てることという目標までは実現したが、今後、娘たちを嫁にやるのにも金がかかるし、息子には将来少しでも楽に暮らせるよう、農地 1 団地でも多く財産を残してやりたいからだという。また、C氏たちにとって、農業は単なる収入源にとどまらない。C氏はいつも農業をやっていない弟たちに米・トウガラシ粉・タマネギ・イチゴジャム[22]などを無償で渡している。また筆者が目にした範囲内でも、息子がガールフレンドを連れて来た時には“ご両親への贈り物”と言ってイチゴジャムやトウガラシ粉を渡していたほか、商売をしているC氏の末弟が顧客への挨拶用にとC氏の家のイチゴを何箱も持って行きもした。C氏の妻が、夏の炎天下、トウガラシ畑で作業をしながら「こんなことでもしないと義弟たちにあげるものもない」と述べたように、彼らが熱心に農業に励むのは社会的なネットワークを維持するためでもある。

[22] 大きさがあまりに小さかったり不恰好だったりするイチゴは、商品価値が無いため、ジャム加工用に回される。「営農組合」を通じてジャム工場に出荷されもするが、多くの農家では、主婦が自分の家でもジャムを作っている。C氏の家でも、イチゴを収穫しない日など時間のあるときに、妻が庭の大鍋を使ってジャムを煮て、ガラス瓶に詰めている。都市に住む子供たちや親族・知人などを通じ、ジャムの販売網を構築している家も多いが、C氏は「面倒だから」という理由で販売までは行わず、弟や知人たちに無償で配る程度だ。

息子には安定した月給生活者になって欲しいというC氏夫妻の願いとは相容れないが、上述のとおりC氏の長男は叔父（C氏の末弟）が高霊「邑内」でやっている電気工店を継ぐという夢を持っている。ただし仮に息子が高霊「邑内」で働くことになったとしても、C氏夫妻には、将来、息子やその家族と同居する考えは全くなく、息子が結婚する時には高霊「邑内」に新居を用意してやるつもりでいる。両親との同居により、彼ら自身、特に嫁という立場のC氏の妻が、嫌というほど苦労を味わって来たからである。C氏夫妻は「昔みたいに嫁にひどい扱いをすれば、今は嫁が出て行ってしまう」と笑い、実際、息子が家にガールフレンドを連れて来るたびに、ご馳走を作ったり、遊びに連れて行ったりしている。息子のガールフレンドから来た携帯電話のメールを嬉しそうに保存しているC氏たちの姿からは、彼らが将来、舅や姑として嫁につらい「シジプサリ」を強いることは想像も出来ない。

3．おわりに

本稿ではここまで、韓国社会が大きく変貌を遂げる中で農村に住み続けて来た、ある無名な一家族の生活史を記述して来た。具体的な一家族に焦点を搾り、定点観測的にその現代史を記述したような記録はあまり例がないように思う。本稿の記述の内容が、韓国農村における食生活や住生活の変化、家族関係の変化、都市と農村の関係の変化、農民たちの世界観といった主題の研究に、民族誌資料として役立てられるなら幸いである。

本稿を締めくくるにあたり、筆者としては次の1点についてのみ言及しておきたい。それは、社会がドラスティックに変化する中でC氏一家が生き延びて来られたのは、C氏の父母の世代とC氏の世代という過渡期の2世代が一身に「損」を被ったおかげではないか、という点だ。例えばC氏の両親は、自身の上の世代に倣えば40代になれば仕事もせずブラブラできたはずなのに、70代の今もビニールハウスやタマネギ畑で汗を流している。C氏とその妻は、自分の上の世代に倣えば子供たちに家父長的な態度をとれるはずなのに、子供たちには自分たちと同じ思いをさせないようにと、自分たちの代でそれを食い止めようとしている。この2つの世代が「やらなくても良かったはずのこと」をやったり、「やらせて良いはずのこと」をやらせなかったりと、ジェンダー・ジェネレーション・家族観など文化的なものに関して一身に「損」を引き受けてきたからこそ、急激な社会変化の中でもC氏の一家が現在の地に「軟着陸」ができていると言えよう。そして、それはC氏一家だけの話にとどまらないのではないか。

C氏から生活史の聞き取りを終えた後、筆者はC氏に「自分たちが『損』をしていると思わないか？」と尋ねたことがある。それに対するC氏の答えは次のようなものだった。「オレが、オレの家族が、楽しくいい暮らしが出来るように、そして将来少しでも楽に暮らせるようにと一生懸命やっていたら、そうなっていた」[23]

[23] 筆者がB村でのフィールドワークで得た成果は、1年半という長い期間にわたって筆者に関心と愛情を注いで

参考文献

朝倉敏夫
　2005　『世界の食文化①　韓国』東京：社団法人農山漁村文化協会。
高霊郡
　1996　『高霊郡誌』高霊：高霊郡。
慶尚北道
　1993　『慶尚北道史』大邱：慶尚北道。
金南順・鄭酉午
　1975　「딸기栽培에 關한 地理學的 考察」『師大論壇』제 4 집, 暁星女子大學校 師範大學學徒護國團.

くださったC氏ご一家に負うところが大きい。あらためて、深く感謝申し上げたい。

研 究 ノート

遠刈田の熊供養
―クマ猟師の後裔たち―

田澤 晋太

Ⅰ．はじめに

宮城県蔵王町遠刈田温泉では、昔から、狩猟が盛んに行われてきた。1989 年（平成元年）、クマの巻き狩りを一緒にやってきた男たちが、遠刈田温泉に、熊の供養碑を建立した。以来、毎年 8 月下旬になると、男たちは「熊供養」と称して集まり、それまでに捕獲してきたクマを供養し、山の神に豊猟と安全とを祈願し、共に酒を酌み交わして語り合い、ゲームをして遊び、楽しむ習いになっている。

本論の目的は、遠刈田における熊狩りの歴史を振り返りつつ、現在の姿を見ること、及び男たちにとって「熊供養」がどのような意味を持っているのかを考えることにある。

この研究ノートは、2001 年から 2002 年にかけて筆者が行った聞き取り調査・参与観察よって得たデータ、及びその後の補足的な調査で得たデータをもとに作成した。なお登場する人名は、すべて仮名である。

Ⅱ．調査地とその周辺

蔵王町遠刈田は、東北の中枢都市・仙台市から南西に約 30 ｷﾛﾒｰﾄﾙ、東北地方を南北に貫く奥羽山脈の東麓に位置する、世帯数 473、人口 1371 人の集落である[1]。古くから湯治場として、また蔵王山への信仰登山の基地として繁栄してきた。現在でも、蔵王観光の拠点として、町内のホテルや旅館は 1 年を通して、湯治客やスキー客などでにぎわう。

調査地へは、筆者は電車とバスを使って行くことが多かった。仙台駅から大河原駅まで電車で約 40 分。そこから遠刈田温泉へは、2～3 時間に 1 本程度のバスで約 1 時間の道のりである。駅前の停留所で、遠刈田温泉または青根温泉行きのバスに乗る。バスは駅を出ると、白石川を渡って国道を西へと走る。やがて道は、白石市から蔵王町を経て川崎町へ抜ける旧笹谷街道に合流し、バスは蔵王山の前衛、青麻山（海抜 799 ﾒｰﾄﾙ）を左手に見ながら北上する。道は町役場のところで再び西に折れ、バスは蔵王の山々へ向かって畑や果樹園の中を走る。小妻坂という集落のあたりから、道はゆるい坂道となり、間もなく遠刈田温泉に到着する。「遠刈田湯の町」のバス停で降りると、そこは

[1] 平成 7 年の統計。蔵王町（2002）による。

町の表通りである。100 ﾒｰﾄﾙほどの通りに、旅館・公衆浴場・土産物屋・コンビニエンスストア・理容室・肉屋・雑貨屋などが立ち並ぶ。古い旅館は、藩政時代から代々続いてきた家が多い。そこから一本南にはずれた裏通りには住宅や豆腐屋・駐在所・酒屋・電気屋、こけし職人の工場などがある。

温泉街の西のはずれには、バス・ターミナルやガソリンスタンド、レストランがある。そこを過ぎてしばらく行くと、大きなホテルがあり、そばに、道路を跨ぐ大きな鳥居がある。そこからは蔵王エコーラインと呼ばれる登山道路に入り、道路はつづら折りになって高度を上げる。途中で有料道路の蔵王ハイラインに入り、やがて道は蔵王連峰第２の高峰、刈田岳（海抜 1758 ﾒｰﾄﾙ）の頂上直下に達する。エコーラインの途中にはスキー場、刈田岳山頂にはレストハウスがあり、お釜（火口湖）を見物に来た観光客が食事や休憩をとれるようになっている。

エコーラインが完成する昭和 40 年代までは、地元の人が炭焼きなどの仕事で使う林道が「不動滝」の辺り（海抜 850 ﾒｰﾄﾙほどの地点）まで伸びているだけだった。蔵王山では、「大黒天」（海抜 1460 ﾒｰﾄﾙほどの地点）から下は仏の山、上は神の山といわれ、蔵王山中腹よりやや上の「賽の河原」（海抜 1200～1300 ﾒｰﾄﾙの地点）は、死者の霊魂の集まる場所といわれていた（氏家 1978:91-92）。地元の人たちは、特別なとき[2]を除いては高山地帯に足を踏み入れなかった。地元の人で、「私ら登山なんてしない」と言った人がいる。旅館の番頭を務めるかたわら、山菜やキノコなどを採集し、現金収入を得ていた増田国一さん(73)だ。国一さんは秋になると、暇をもらって山に入り、キノコやヤマブドウを、多いときでは 20 ｷﾛｸﾞﾗﾑほども担いで帰ってくる。地元の人たちにとっての「山」とは、生活の糧を得るための仕事場だったのである。

町の南はずれにある橋を渡ると、川向こうは木地師[3]の里として有名な、新地と呼ばれる集落である。新地の木地師についての最も古い記録は、元禄 14 年（1701）の宮村と曲竹村の山争いの文書であり、その中には、「新地と申す所に木地挽八人年久しくまかりあり」とある（蔵王町 1993:448、1994:180）。しかし、彼らと現在新地に住む木地師の子孫たちとの関係は不明である。古老の言い伝えによると、会津から分離して北上してきた木地師の一団のうちの一派で、弥次郎[4]に留まるものもあったが、そこに留まらずに北進してきた一族が、寛文 7 年（1667 年）に七日原にたどり着いた。それが新地の木地師の先祖だという（橘 1963:145）。新地の木地師は寛保 3 年（1743）、仙台藩主の命により、白石城主片倉氏が七日原に軍馬育成のための牧（牧場）を開設したおり、足軽身分に取り立てられて牧番を命ぜられた（竹内 1974:24）。幕末、戊辰戦争のときには各戸から 1 人ずつ参加している（NHK1973:258）。明治になって、東北本線が開通するなど、交通機関が発達し、

[2] 大黒天より上に登るときには、昔は手甲脚絆、白装束の姿で金剛杖をついて登り、大黒天になると、わらじを履き替えた（氏家 1978：91-92）という。地元の人には「お山がけ」「お沢がけ」といって、成人を記念して登山する習慣があったようである。遠刈田に住む佐東森政さん（75）や翠川タツ子さん（76）には、20 歳くらいのときに蔵王山に登った経験がある。

[3] 木地師とは、山の木を伐り、木材を加工してお椀やお盆、鉢などを制作した技術者である（蔵王町 1993：177-178）。

[4] 新地よりさらに南の山中にある集落。

遠刈田温泉が好景気に湧くようになると、木地師たちが片手間に作っていた子供用の玩具が、湯治客に飛ぶように売れるようになった。ろくろなどの機械の改良もあり、木地師の生活は大きく変わった。やがて、木地師たちの作っていた日用雑器は陶磁器・鉄製品、近年では機械によって大量生産される化学製品にとって代わられるようになり、木製品の日用雑器の需要が減って、昭和 30 年頃から、本来の木地製品の余技として作られ、遠刈田温泉の土産物として販売されていた「こけし」が主流を占めるようになり、今に至っている（蔵王町 1993:177-178）。

新地集落を過ぎてさらに南へ行けば、七日原・北原尾などの高原地帯に入る。七日原は近世には片倉家の牧（まき）だったが、明治以降は仙台市の財閥・早川氏の牧場となり、乳牛が飼育された。北原尾は戦後、南洋のパラオから引き揚げてきた人々が入植した土地である。現在、七日原や北原尾では蔵王の山を背景にした広大な土地のなかで、酪農や野菜の栽培などが行われている。この地域では昭和 50 年代頃から、クマによる家畜の飼料用作物（デントコーン）やトウモロコシ、養殖ニジマスの食害が目立つようになり、周辺農家が被害を訴え、有害鳥獣駆除が行われるようになっている。

再び表通りに戻ってみよう。公衆浴場前の広場の北には鳥居があり、左手には蔵王の山の神を祭った刈田嶺神社、丘の上には湯の神を祭った社がある。急坂を登って丘の上に上がり、そこから少し林の中を西へ歩くと、「チンザン（金山）」と呼ばれる場所に出る。昭和の始め頃まで、ここでは金や銅の鉱石の採掘が行われていた。林の中を北へ抜けると、道路に面して住宅がポツポツと点在し、周囲に畑が広がった平らな場所にでる。このあたりは集団と呼ばれる集落であり、戦後になって開拓された土地である。

筆者が最初に接触することができた地元のハンターは、集団で農業を営んでいる、佐東拓男さん(63)だった。佐東さんの家は親父さんの代に、県南の丸森町からやってきた。筆者は当初、蔵王連峰東麓でのクマによる被害や有害駆除の実態、仙台市の自然保護団体の活動といったもの全般に漠然とした関心を持って、川崎町から遠刈田へとあてもなく歩いて来た。すると道ばたの小さな小屋で、おばさんが直売用の大根を並べていた。話しかけてみると、「うちの父ちゃんはクマとるんだ」という。このおばさんが佐東さんの奥さんだった。それから佐東さんにお話を伺い、古くから猟をやっていた人として、こけし職人の翠川政人さん(75)を紹介していただいた。翠川さんに会って話を聞き、遠刈田に古くからの狩猟の伝統があることを知った筆者は、芋づる式に、いっしょに猟をしたことのある人を紹介していただくことになったのである。

Ⅲ．遠刈田の人々と狩猟との関わり

遠刈田では、昔から狩猟が行われてきた。現在、遠刈田の猟友会には、50 代～70 代の 23 人のメンバーがいる。彼らの職業は農業・（元）会社員・（元）公務員・旅館経営者・ホテル従業員・こけし職人・商店経営者・理容業などさまざまである。ハンターの高齢化と若者の鉄砲離れによって、

人員数は減少傾向にあるが、現在もなお狩猟は活発に行われている。11 月中旬～2 月中旬の猟期[5]には、60 代のメンバーを中心とした有志４，５人で岩手県まで遠征して、他の地域に住む友だちのグループと協力して、シカの巻き狩りを行っている。また、より少人数あるいは個人でキジ・ヤマドリ・カモなどの鳥や、ウサギ・タヌキを獲ることもある。猟期外では、有害鳥獣駆除として、檻型の罠を使ったクマの捕獲が 8～10 月に行われる。

3-１　戦前～昭和初期

現在 70 代のハンターには、炭焼きの経験がある人がいる。遠刈田には農地が少なかったため、昭和初期までは木炭産業が主要な産業であり、大勢の人々がこの仕事に従事した。大正末～昭和初期の頃には遠刈田には薪炭組合ができており、組合が国有林の払い下げを一括して行い、その年の木炭の価格は組合の総会で決定された。当時、木炭の集荷業者として丸万商店と北岡商店の二店があり、大半の人々がどちらかの店に所属して炭を焼いていた（堺 1986:21-22）。こうした人々は焼子（ヤキコ）と呼ばれた。彼らは組合から、木炭の材料になる原木を伐採する山（原木山）の割り当てを受けて、そこに炭窯を作って炭を焼いた（蔵王町 1993:196）。彼らは、夏場と冬場に行われる炭焼きの仕事の合間をぬって、季節に応じて山菜・キノコ・イワナ・鳥や獣をとって生活していた。

特に晩秋に行われる、「クマヤマ[6]」・「ウサギヤマ」と呼ばれる、10～20 人の比較的大人数の人員を必要とする「ブクリヤマ[7]」（追い込み猟）は、男たちの大きな楽しみだった。当時、狩り場で指揮をとっていたのは、やはり炭焼きに従事していた佐東英蔵さん（故人。明治 40《1906》年生まれ）や、その父親のエンジュロウ（英次郎）さんだった。佐東家はもともと新地の木地師であり、英蔵さんの弟にあたる佐東六夫さん(75)によると、英次郎さんの代に、新地から遠刈田温泉に移ってきたという。新地の木地師たちは本業が暇になる冬場に、「シシヤマ」と呼ばれる、カノシシ（シカ）・アオシシ（カモシカ）・イノシシの巻き狩り[8]を行っていた（菅野 1961:152）というから、佐東家の人たちも代々このような狩猟に参加していたものと思われる。

英次郎さんや英蔵さんを知る人は、彼らを「山を知り抜いた人だった」と評する。彼らは、どの時期にどこにいけば何がとれるかということを、ことごとく知っていたようだ。英次郎さんなどは、

---

[5] 現在、11 月 15 日から 2 月 15 日までが狩猟期間として法律で定められている（鳥獣保護研究会 1981:72）。

[6] 南会津北魚沼地方においても、熊狩りのことを「クマヤマ」と言ったようである（金子 1937:65）。新地の木地師の先祖が、会津からやって来たという言い伝えと符合しており、興味深い。

[7] 「ブクル」とは、東北地方の方言で、「追いかける」という意味である。「ヤマ」とは狩猟・採集（例えば「キノコヤマ」などと言う）など、山で行う仕事や、その仕事を行う場所を意味する。そこで、「ブクリヤマ」をここでは「追い込み猟」と訳した。

[8] シカ・イノシシは蔵王山麓一帯では明治末には全滅し（千葉 1975:76）、カモシカは昭和初期に絶滅が懸念されるようになった為、昭和のはじめ頃から禁猟となった（宮城県教育委員会 1982:1）。佐東六夫さん（75）によると、遠刈田の小妻坂という集落に番場寅吉という男がいたが、この男がカモシカを獲って、白石の方に「アオシシの肉だ」と言って配ったが、警察に見破られて随分「ゴッシャガレ（怒られ）」て、酒の三升か五升を持って誤りに行ったそうだ。「この辺りでは有名な話だよ」と六夫さんは言った。

山のものを捕獲・採集するだけでなく、山中の沢にワサビを植えたり、イワナを放流したりして9、山菜や魚を増やす活動も行っていたという。

昭和 20〜30 年代頃、遠刈田にあった佐東英次郎さんの家は「猟師のたまり場」になっており、大きな囲炉裏を囲んで男たちが座り、しょっちゅうタバコをふかしていたために煙がもうもうと立ち、毎晩、深夜 12 時頃まで男たちがたむろしていたという。いつ、どこの猟場で狩りをするかは、ここで話し合われて決定された。炭焼きをやっていた番倉男さん(73)は次のように語る。「オライ（俺の家）のおやじは、毎日毎日お茶飲みにいったもんですよ。（英次郎さんが）長老でね。その人のいうこと聞いて、今日はあそこ、明日はあそこってみな決めたもんですよ。」

「クマヤマ」は 10 月 15 日、猟の解禁と同時に始まり、40 日間ぐらいかけて行われた。冬ごもり前のクマを狙って、雪の積もらない年内中に行うことが多かったようだ10。猟師たちは秋になると、糞や「オリキ」した後の「タナ11」などの痕跡から、クマのいそうな場所の見当をつけておく。「クマヤマ」が始まると、翠川政人さん(75)は、毎朝弁当を持って猟場まで歩いて行く。猟師たちは蔵王山中を流れる水系（澄川・濁川・秋山沢川の沢沿い）に、11〜12 カ所ほどの「ヤマ」（猟場）を区別し、それぞれに名前をつけていた。猟場に着くと、午前中に一つの「ヤマ」をやり、それが空振りに終わると、午後に場所を変えてもう一つの「ヤマ」をやる。夕方には家に帰る。それが毎日続いたという。

「ブクリヤマ」では、参加者は獣を追い出す「セコ」の役と、追い出されてきた獣を銃で撃って仕留める「タツ」（「タチ」ともいう）の役とに分かれる。猟の初心者は、まず「セコ」になって山を歩き、猟場の地形を熟知する必要があった。翠川政人さん(75)は、「目をつぶっても歩けるくらい」に、また「どこにこんな石がある、木がある」と分かるまでに猟場を歩き回ったという。また、鉄砲を持たず、「セコ専門で」やる人もいた。佐東英蔵さんの甥にあたり、佐東六夫さんとは兄弟のようにして育った増田国一さん(73)がそうだったし、小宮国彦さん(60)のお父さんもそうだった。

猟場にたどりつくと、まず、猟の経験が豊富な者が、各参加者の射撃の腕・体力・経験などを総合的に判断して、狩り場全体の配置を考え、その後、「セコ」や「タツ」をそれぞれの場所に配置していく。これを「セコビキ」「タツビキ」と言う。全員が配置についた頃を見計らって、猟が始まる。「セコ」は「ホーイホイ」とか「ホウリャッ」などと大きな声をあげてクマを脅しながら、クマを「タツ」の方に追い上げてゆく12。「セコ」は両隣から聞こえてくる他の「セコ」の声に注意し、

9 イワナやヤマメの放流は、現在も漁業協同組合が行い、入漁権を発行して漁業資源を管理している。

10 地元では、「冬至十日前」といって、冬至（太陽暦 12 月 22 日頃）の 10 日前にはクマが冬ごもりのために穴に入ると言われている。クマは吹雪のときに穴に入るので、どこの穴に入ったかは誰にも分からない、とも言われる。

11 クマは木に登って枝の上に座り、他の枝からドングリやブナなどの木の実を枝ごと折り取って食べ、食べた後の枝を尻の下に敷いていく。晩秋になって木が落葉すると、残った枝が棚のようにも、鳥の巣のようにも見える。これを「クマダナ」あるいは単に「タナ」などと呼ぶ。

12 2003 年 2 月、及び 2005 年 12 月と 2006 年 1 月・2 月の 4 回、筆者も実際に、岩手で行われたシカの巻き狩りで「セコ」をやってみた。筆者は不慣れだったため、最初は登ったり下ったりを繰り返してかなり体力を消耗した。獣道を歩けば、山の斜面を等高線とほぼ平行に進むことになり、一番楽であることを学習した。

自分がどちらかに寄りすぎていないかとか、歩くのが速すぎないか、遅すぎないかなどを判断しながら進んでいく。もし「セコ」と「セコ」との間の距離が離れすぎたり、「セコ」の声が小さかったりすると、そこを狙ってクマが包囲網の外へ逃げ出そうとして、「セコ」の方へ向かって走ってくる。これを「セコガエリ」と呼ぶ。

「タツ」の方では、「タチバ」と呼ばれる場所で静かにクマを待っている。「タツ」が大きな音を立てたり、煙草を吸ったりすると、クマに音や臭いをとられて「セコガエリ」が起きるからだ。最もクマが出る確立の高い「タチバ」は「トメタチ」と呼ばれ、射撃の上手な者が配置された。しかし、まれに射撃の腕が未熟な者のところにクマが現れることもあり、そこで「タツ」がクマを打ち損じた場合は、「セコ」からさんざんに罵られたという。しかも、打ち損じた人の名前がその「タチバ」につく場合もあり、それ以降その「タチバ」は「某しくじり」などと呼ばれた。

クマを無事に仕留めると、丸木を伐ってきてクマをくくりつけ、麓に運び降ろした。柴でソリを作ることもあったという。佐東六夫さん(75)によると、クマを獲った時にその場に居合わせた者には、狩りに参加していなくとも分け前を与えなくてはいけない、という「狩人の仁義」があったので、川崎町の近くの猟場でクマをとったときなどには、鉄砲の音を聞きつけて「川崎の連中」がやってくる前に、大急ぎで支度をして帰ったものだという。

昭和初期～昭和 20 年代の頃は、遠刈田温泉から蔵王山中の猟場までの交通手段は徒歩のみだった。丸木にぶら下げたクマを担いだ男たちが、「わっしょい、わっしょい。」とかけ声をかけて帰ってくる頃には、すでに暗くなっていることが多かったという。あまりに帰りが遅いときには、女の人たちが提灯を持って迎えに出るということもあったそうだが、後には宴会用の鍋だけ用意して先に寝てしまうようになったそうだ。担いでこられたクマは佐東英次郎さんの家に運び込まれた。特に大きなクマは、解体する前に縁側の梁にぶらさげて、見物に集まってくる人たちに見せていたという。当時小学生だった永岡勇男さん(60)は次のように語る。「クマとると、クマとったぞーって遠刈田の町ン中さ伝わんのわ。そっと（そうすると）、見に行きたい人はみな行ったわけだから。」

仕留めたクマは解体され、「クマヤマ」の参加者で均等に分配された。鷹觜仁志さん(75)によると、遠刈田ではこうした分け方を、「チョウフワケ」と呼んだそうだ。クマの解体を始める前に、まず「棒秤」で重さを量る。「棒秤」はもともと木炭の重さを量るために使うもので、色々な大きさがあり、大きなものではクマ丸ごと一頭を量ることのできるものもあったという。こうやって量った重さを基準に、参加者に分配する肉の量を例えば１人につき一貫目（約４ｷﾛｸﾞﾗﾑ）とか決めておく。次に小刀を使って皮をはがす作業に移る。作業には熟練したものがあたった。これは剥製にする場合と敷き皮にする場合とでは、違った切り方をするため、技術を要するからである。また皮に脂肪が残っていると売り物にならないために、「毛穴が見えるほど」きれいに剥いだという。

次に皮をはがれて丸裸になったクマの腹を切り、内蔵を全部出す。このときにまず胆嚢をとる。胆嚢は皮が薄くて破れやすいので、中の胆汁がこぼれださないように、管になっている部分を慎重に糸で縛ってから切り離す。その後、桐の板で上下から挟み、紐でくくって、囲炉裏の上で乾かす。

ときどき表面に熊の脂を塗ったりして、紐を少しずつきつくしながら伸してゆく。乾燥させたクマの胆嚢は「クマノイ」と呼ばれ、万能薬として重宝された。胃腸の病気・子供のひきつけ・二日酔い・歯痛など、「本当に何にでも効く」とのこと。筆者は佐東周一さん(60)が所有していた「クマノイ」を見せていただいたが、煙草の箱ほどの大きさで厚さは 5 ミリメートルほどの円盤状のものだった。筆者は佐東森政さん(75)が所有していた「クマノイ」の、米粒の半分ほどのかけらを嘗めさせてもらったことがあったが、顔が歪むほど苦かったことを覚えている。普通はオブラートなどで包んで飲むものらしい。「クマノイ」は、高額で取り引きされてきた。乾燥させた胆嚢は、普通は 40 グラムほどになるが、現在では 1 グラム 1 万円ほどが相場だという。昔も今も自家用で使うのが普通だったが、買い手がつけば売ることもあったという。「これが欲しくてクマとるようなものだ」と言うハンターもいる。

熟練者が胆嚢を切り離すのと前後して、頭部と四肢が切断される。この後、内臓を川や井戸に持っていって洗う。腸（大腸・小腸・胃袋などの消化器）は内容物を出してきれいに洗われる。腸を煮て鍋を作る者と、骨から肉をはがして精肉にする者とにわかれて作業は進む。前肢・後肢・腿・肩・首・肋・背肉（ロース）などに区別された肉は、参加者の人数で、目分量で等分に分け、参加者 1 人ずつに分配される肉が仕分けられる。また心臓・肝臓・「マメ」（腎臓）なども同じように均等に分ける。佐東六夫さん(75)によると、仕分けられた肉が誰の者になるかは、くじ引きで決めていたようだ13。ただし、頭の肉だけは、「ヤダイ（矢代）」と称して、クマに留めを刺した者に与えられた。

肉の分配が終わる頃には、腸を煮た鍋ができあがっており、酒が好きな者は一杯やりながら鍋をつつくことになる。鍋は味噌で味付けをしており、豆腐を入れることもあったという。番倉男さん(73)は「腸っつうのは苦いから、うんと。ひときれ食ったら、豆腐一切れカネェ（食わない）と、カンネ（食えない）ってそれぐらい苦いんだ。」と語る。腸は非常に苦いものだったが14、そのかわり体が「ホドッた（暖まった）」と屋島富三郎さん(75)は語る。こうして鍋を囲みながら、その日の「クマヤマ」の内容について話しあったという。宴会が終わるのは、遅いときでは夜中の二時になることもあり、「次の日は仕事にならなかった」と男たちは語る。

ところで、猟に宴会はつきものだったが、佐東六夫さん(75)によると、戦後間もない頃、遠刈田にやって来た進駐軍と、青根温泉ですき焼きの宴会をやったことがあるそうだ。当時六夫さんは 21 歳で、海軍から帰ってきたばかりだった。このときはクマはとれなかったが、砂糖、牛肉、ウィスキー、煙草など当時手に入らなかった物が何でもあり、「大宴会」だったという。みんな外国の煙草が珍しかったので、「洋モクだ洋モクだ」と言って、ちょっと吸ってはもみ消してもち帰ったそうだ。帰りはみんな「ベロンベロンに酔っぱらって」、トラックに乗せてもらって遠刈田に帰ってきたとい

13 筆者が参加した 2003 年 2 月、岩手で行われたシカの巻き狩りの時にも、仕留めたシカを解体したあとに、狩り場でのリーダーだった佐東周一さん（60）が即席でくじを作っていた。
14 クマの腸が苦いのは、コクサギ（ミカン科の樹木）の実を食べるからだ、と佐東英蔵さんは考えていたそうだ。

う。

クマやウサギ、キジやヤマドリなどの肉、イワナは旅館や自炊の湯治客が買った。酒井六郎さん(80)によると、佐東英蔵さんが二日がかりで釣ってきた10〜15 kgのイワナを、英蔵さんの奥さんが四角いお盆に何段にも重ねて売り歩いたという。また、昭和 30 年代頃までは、分配されたクマの肉をホオノキの葉や経木で包んだものを、女の人たちが湯治客に売って歩く風景が見られたという。小宮国彦さんのお父さんは、捕獲したクマの重量や、「クマヤマ」に参加した者の人数、各自に分配された肉の量や、肉を売った金額などを帳簿につけていたという。佐東六夫さん（75）によると、クマの肉は、新鮮なものは、つるしたクマから削ぎ切りにして売って、刺身でも食べたという。脂がのっていて、とてもうまかったという。当時は、豚や牛の肉が現在のように安価で手軽に買うことができなかったし、魚屋などもなかったというから、山の獣の肉や魚は喜ばれたのだろう。佐東六夫さん(75)によると、太平洋戦争の後に湯治に来ていた傷病兵に、ウサギが売れに売れたという。

クマの血は薬になった。翠川政人さんの奥さん、辰子さん(76)のお話によると、クマの腹を開いたとき、「フクマ」（腹腔部）に血が溜まっているが、その上澄みのきれいな血（「ドウチ」と呼ぶ）を、お猪口の糸底に入れて、一杯五銭で湯治客に売っていたと言う。「ドウチ」は、冷え性や貧血、婦人病の薬として売られた。また、余った血は片栗粉とまぜて乾燥させ、粉薬にして使った。子供がしもやけになったときに、「クマの血」というと嫌がって飲まないから、黙って飲ませたりしたそうだ。佐東和利さん(49)のお袋さんも、「血が足りない」と言ってはこの薬を飲んでいたという。辰子さん(76)は現在でも、クマがとれると血をもらってこの薬を作り、使っている。彼女はこの薬の作り方を、佐東英蔵さんのお袋さんから教わったそうだ。

毛皮も売れた。鷹觜仁志さん(75)によると、ウサギやタヌキの毛皮は、昭和 20 年代ころまでは、白石からやって来る毛皮商（カワヤ）が買い上げていったという。ウサギやタヌキの毛皮などは軍帽の耳当てなどに使われたそうだ。昭和 15 年頃には、営林署を通じて軍隊から毛皮供出の割り当てが来たこともあったそうだ。また、佐東六夫さん(75)によると、テンの毛皮で一番上等なものは、大正から昭和の初めにかけては、米二俵ほどの値がついたという。年の暮れに毛皮をとると、猟師は「ああ、いい正月だな」と感じたそうだ。

しかし第二次大戦後、毛皮の値段は下落した。明治・大正末期には米一俵程度の値段で売れていたというキツネやタヌキの毛皮が、戦後は「弾丸代くらいにしかならならなかった」と佐東六夫さん(75)は語る。

やがて高度経済成長期を迎え、木炭や石炭から石油へとエネルギーの比重が移行していくにつれ、炭焼きは生業としての成立の基盤を失い始める。屋島富三郎さん(75)は、昭和 40 年代に蔵王にエコーラインが建設されるときに、道路工夫をするために炭焼きの仕事をやめた。道路工夫で得られる日当は 500 円だった。これは炭焼きで得られる日当の二倍だったという。

3-2 昭和 40 年代～平成 18 年現在。

現在狩猟活動の中心となっているメンバーは、60 代の男たちである。彼らは昭和 40 年代の初め頃に銃をもち、猟をはじめた。このころ、40 人弱だった猟友会のメンバーが 60 人弱にまで増加した。生活に余裕ができたことが、ハンターが増えたことの大きな原因のようだ。果物を商う村山定市さん(60)は、狩猟をはじめた動機を聞いた筆者の質問に、次のように答えた。「はじめた理由は、ひとつは冬場の運動不足を解消しようっていう気持ちもあったのね。あと友達、周くん（佐東周一さん）だの同じ年代の人らやってっから、俺もやってみようっていう、それだけだな。」

筆者は、彼らが狩猟を始めたもうひとつの理由として、狩猟が身近な楽しみだったということも挙げられる、と考えている。佐東拓男さん(63)や佐東周一さん(60)の父親は「鉄砲ぶち」（ハンター）だったし、小宮国彦さんの(60)のお父さんは専ら「セコ」として「クマヤマ」に参加していた。彼らはそのような父親の世代の姿を子供の頃から見てきたので、猟を始めることはごく自然な成り行きだったのではないかと思われる。

昭和 50 年代頃から、8 月から 10 月にかけて民家の近くにクマが出没して農作物が食害され、周辺の農家が被害を訴えるようになり、ハンターたちは、有害鳥獣駆除という形で、集落近くの山や沢で、臨時に「クマヤマ」を行うようになる。このような臨時に行われる猟には仕事の都合で参加できない人も多く、なかなか猟に必要な人数を集めるのが難しかった。そこで、狩猟の経験が無い農家の人たちにも「セコ」として参加してもらって猟をしたり、檻型の罠を使ってクマを捕獲したりするようになった。クマを捕獲するために罠をしかけるのは、罠の免許を持っている、佐東拓男さん(63)や佐東周一さん(60)が中心となってする仕事である。農業を営んでいる佐東拓男さんは、畑が忙しい夏場のクマとりは「ヒマダレ」（東北弁で、「面倒な仕事」ほどの意味）だと語る。

捕獲したクマの利用の仕方にも変化が見られる。昭和 40 年代に狩猟を始めた猟師たちの話によると、この頃、保健所からの指導でクマ肉の売買が禁止されるようになったという。この頃、「クマヤマ」参加者各自に分配された肉は、各家庭で家族といっしょに食べたり、親戚・友達・知り合いなどにさらにお裾分けされたりした。クマの肉が食べたい人はあらかじめ知り合いの猟師に頼んでおき、獲れたときに分けてもらい、そのお礼として酒や品物を返す、ということもあったようだ。現在でも、このような贈答は普通に行われている。

クマの血はすでに売買の対象ではなくなっていたらしく、血を飲むという習慣も一般的ではなくなっていたようだ。この時期に猟を始めた佐東周一さん(60)は、筆者が「以前は血を売っていたそうですね」という話をしたとき、「それははじめて聞いたなあ」と言っていた。また、周一さんの話によると、以前、クマを解体しているときに、お年寄りが血をもらいに来たことがあったが、そのときは「何、血ぃ飲むの」と思って驚いたという。

昭和 40 年代の 60 人弱をピークに、遠刈田の猟友会の会員数はその後減少し始め、平成 18 年現在では 23 人になっている。スキー場や別荘地の開発で、鳥や獣の住処も減少した。昭和 59 年に蔵王一帯が自然保護区に指定されてからは、蔵王山中の猟場での狩猟は行われなくなった。狩猟を始

めようとする若者もほとんどいなくなり、ハンターの高齢化が進んでいる。現在、遠刈田では 20 代から 30 代のハンターは「5 人いるかいないか」という程度だという。

Ⅳ.「熊供養」

筆者が「熊供養」について知ったのは、2002 年の 7 月 14 日、佐東拓男さん(63)のお宅に訪問したときだった。このとき筆者が、檻型の罠で捕獲したクマを解体するときの手順について質問すると、佐東さんは次のように答えた。「小刀を入れるときに、御神酒をやる。一応ね。お神酒って言うかお払いって言うか、供養だな。」その後、佐東さんは「熊供養」という行事が 8 月の 25 日にある、ということを教えてくださった。

筆者はその場で「熊供養」への参加の許可をいただき、その後、佐東さんが運転する軽トラックで「熊供養」が行われるという、「熊供養」の石碑のある場所へ連れて行っていただいた。

石碑は「チンザン（金山）」に建立されている。まわりを雑木林に囲まれ、東屋がひとつ、テーブルとベンチが二組ほどあるだけの静かな場所である。石碑は、二本の桜の木の間に建っており、石碑の前には供え物などを載せるコンクリートブロックが一つと、その両脇に、花を生けるための竹筒が一つずつ置いてある。石碑は、自然の岩をそのまま使ったような平たい台座と、その上に乗った、山形に曲線を描いて切り出された御影石とからできている。高さは約 1.2 ㍍、胸ほどの高さ。幅は 1.5 ㍍ほどある。御影石の表面中央に、縦書きで「熊供養」の三文字が、その下に 23 人分の人名が、これも縦書きで刻まれ、猟場の頭だった佐東英蔵さんを筆頭に、「クマヤマ」に参加してきた現在 60～80 代の男たちの名前が見られる。英蔵さんをはじめ、4, 5 人の方は既に亡くなっている。左端には「平成元年、〇〇揮毫」の文字が刻まれている。

「熊供養」の石碑は、平成元年（1989）に、佐東周一さん(60)が発起人となり、いっしょに「クマヤマ」をやってきた 23 名が連名し、お金を出しあって建立した。それから毎年お盆の頃になると、「熊供養」あるいは「クマまつり」と称してハンターの仲間うちで集まり、クマの供養と山の神への豊猟・安全の祈願を行い、酒を飲んで遊ぶようになった。もっとも、このようにあらたまった形で「熊供養」が行われるようになったのは、石碑が建ってからのことだ、と鷹觜仁志さん(75)は言う。熊の供養とそれに伴う宴会は、ずっと昔から行われてきたが、石碑が建つまでは、特に時や場所を決めてやることはなかったそうだ。

発起人の佐東周一さん(60)は、白石市三住地区にある、鹿の供養塔を見て、熊の供養碑を建てようと思いついたという。三住には「鹿二千供養塚」と彫られた古い石碑が建っているが、これは藩政時代に、蔵王山麓で行われた大規模な巻き狩りで捕獲したシカを供養するために、片倉家の山案内人が建てた石碑のひとつである（阿子島 1978:20, 1979:49-58）。

佐東さんは、「熊供養」の石碑を建てた理由として、今までにとってきたクマの供養という目的をあげている。また、彼は「いっしょに（猟を）やってきたグループがまとまっているうちに」建て

ようとした、と語る。このことから、石碑に人名が刻まれていることからもわかるように、石碑の建立には、仲間たちがともにクマ猟をやってきたことを記念する目的があったことを示していると思われる。

「熊供養」は、クマの供養、山の神への豊猟・安全の祈願、そして宴会の３つの部分に分けられる。以下では、筆者が実際に参与観察を行った「熊供養」の様子を記述する。

4-1 クマの供養

2002（平成 14）年 8 月 25 日午後 6 時、「熊供養」の石碑の前で、筆者は参加者の到着を待っていた。むし暑く、ヒグラシやアブラゼミがさかんに鳴いていた。一番乗りでやって来たのは、旅館を経営している鷹觜仁志さん(75)だった。鷹觜さんによると、10 日前に北原尾の方で一頭クマが現れたので、罠をかけて獲ったという。しばらくすると参加者が三、四台の車に分乗してやってきた。参加者は筆者を入れて 16 人だった。筆者は鷹觜さん、屋島さん(75)、翠川さん(75)、佐東拓男さん(60)とはすでに面識があったが、あとは初めて会う人ばかりだった。彼らは石碑のまわりに集まり、花や御神酒などを供えたり、石碑に酒をかけたり、ロウソクに火をつけて灯明をあげたりしていた。それからひとりずつが石碑の前にしゃがんで線香をあげ、瞑目して合唱し、拝み終わったものには、用意された御神酒と赤飯がふるまわれた。男たちは終始にぎやかに冗談を飛ばし、よく笑い、楽しげな雰囲気だった。筆者にも「これから何が始まるのか」という期待と興奮があり、お祭りの始まる前のような、そわそわした気分になっていた。

4-2 山の神への参拝

次に一行は再び車に乗って、近所にある佐東周一さん(60)の家へ向かった。佐東さんの家の庭には山の神の祠がある。祠の内部には、お札やクマ・シカ・イノシシなどの頭骨が納められている。お札は、毎年、猟期前に虎捕山神社[15]に参拝してもらってくる。佐東周一さん(60)によると、これは佐東英蔵さんの代からずっと続いている習慣だという。ここで男たちは山の神に対して、これから始まるクマの罠猟や、猟期の間の豊猟と安全を祈願する。さきほど「熊供養」の石碑を拝んだときと同じように、ひとりずつ順に祠（ほこら）の前に進み出て、立ったまま一礼し、それから柏手を二回打つ。拝み終わった者から、コップについだ御神酒をまわし飲みする。このとき、「まめで達者で」で、ということで茶豆が参加者にふるまわれた。男たちはクマの供養のときと同じく立ったまま飲み食いし、にぎやかに冗談を言い合っていた。

4-3 宴会

再び車に分乗して、鷹觜仁志さん(75)が経営する旅館へと向かう。旅館の一室には、すでに 16 人

[15] 俗に佐須の山の神と称せられている、福島県相馬郡飯舘村の佐須山津見神社のこと。神社のある山を、魚を捕ったり、航海をするときの目印としたことから、漁師の神として、また山で働く者、農家、養蚕家などに広く信仰されている（飯舘村 1976:429）。

分のお膳がコの字形に並べられ、宴会の準備が出来ていた。上座には長老格の三人が座る。中央には鷹觜さんが座り、その両隣に屋島さん(75)、翠川さん(75)が座る。筆者は佐東周一さん(60)の隣に座って話を聞くと良い、と言われ、佐東さんの下座に座った。全員が着座したあと、鷹觜さんがたちあがり、猟友会の会長として、「今年も有害鳥獣駆除の時期がやってきましたが、違反なく無事故でやりましょう」という挨拶を述べる。このあと筆者は鷹觜さんから客として紹介されたので、立ち上がって、緊張しながらもなんとか自己紹介をすませた。

参加者ははじめのうちは自分の両隣に座った人と話しながら酒を飲み、肴をつついていた。筆者はこのとき初対面だった佐東周一さん(60)にクマ猟の話を聞いていたが、やがて座がばらけて、佐東和利さん(49)や屋島さん(75)が筆者の席の前に寄ってきて座り、昨今の猟の話で盛り上がった。和利さんが、クマなどの獲物は「山の神さまからの恵みだから」と何気なく言った言葉が筆者の印象に残っている。

酒も入り、お互いの緊張もほどけていい気分になってきた頃、鷹觜さんが席を立って、和紙のようなものを持って戻ってきた。その途端に、参加者たちは「おおっ」と声をあげ、嬉しそうな顔をしながらお膳を下げて、宴会場の中心に空間を作り始めた。鷹觜さんが、そこに持ってきた和紙を広げ、参加者がその周りに集まってきた。筆者は何が始まるのか分からなかったが、面白そうだったので慌ててビデオを撮ろうとすると、男たちは口を揃えて「ビデオ禁止」と言った。なぜそうなのかはすぐに分かった。皆が 100 円玉を用意しはじめたのだ。筆者は、「これは賭けですか」と口に出したが、男たちは笑いながら、口々に「そうじゃない」と否定した。彼らによるとこれは「遊び」だという。筆者もこの「遊び」に加わるうちに、大体のルールがわかってきた。以下、それを手短に説明する。

使われるのは、「六角独楽」と呼ばれる、側面に六つの絵が描いてある、六角柱型のコマと、縦二升、横三升の六つの升目に、独楽の目のものと同じ絵が描かれた 90×120 ㎝くらいの和紙である。それぞれ（上段右から左に）①「富士」・②「鷹」・③「茄子(なすび)」、（下段右から左に）④「達磨(だるま)」・⑤「虚無僧」・⑥「乞食」という、と筆者は説明を受けたが、実際に「遊ぶ」ときにはそれぞれ①「ヤマ」・②「ピイ」・③「クロ」（茄子の絵の色が黒いから）・④「アカ」（達磨の絵の色が赤いから）・⑤「アオ（アオイ）」、⑥「三六(サブロク)」と呼ばれる。筆者はこの「遊び」の名前は何というのか、と周りの人に質問したが、「双六っていうのかな」と答えが返ってきた。プレイヤーは自分の好きな升目を選んでお金を「賭け」、「親」になったプレイヤーがコマを廻す。出た目と賭けた目とが一致したプレイヤーが勝ちとなり、掛け金の四倍を他のプレイヤーが賭けた目からとり、残りの掛け金を「親」がとる。最も多く金をとったプレイヤーが、次の「親」になってコマを廻すのである。これを繰り返して遊ぶ。

後で調べたところによると、六角独楽を使ったこの遊びは、「ドンコロ廻し」と呼ばれ、昔、新地の木地師たちが正月などに楽しんだ遊びだった（菅野 1961:161）。木地師は秋の山入り（仕事始め）の前に、山の神の精進講を行っていた。明治のはじめには、新地七戸、遠刈田二十四戸、小妻坂三

戸が全員そろって旧10月25日に行っていた。一同は山の神を祭って家内安全や商売繁盛を祈願し、ごちそうを食べて、歌をうたったり、力くらべをしたり、「ドンコロ」を廻して賭け事をしたりして楽しいひとときを過ごしたという（蔵王町 1993:180-181）。男たちの話によると、昔、猟の獲物がお金になった時代には、大きな金額がかけられ、クマの肉を売って得た稼ぎの大半をすってしまう人もいたそうだ。

この夜の「遊び」は酒を飲みながら延々と続いた。六角独楽をまわすにはコマの軸を、掌を合わせるようにしてはさみ、静かに押し出す。勢いよく廻そうとして力むとうまく廻らない。失敗すると、「酔ったんでないか」とからかわれるもとになる。コマをまわす「親」の癖で、それぞれ出やすい目というものがあるらしく、それの「読み」がこの遊びの面白さの一つらしい。なぜか「アオ」の目をばかり出す人がいると、「念力でもかけてるんでねえの」と笑いが起きる。コマがまわる最中には、「ピイ、ピイ」「アオこい、アオこい」などと、参加者は自分がかけた目の名前を連呼する。「茄子」の目を「農協」と言い換えてみたり、なかなかでない「富士」の目について「噴火しないな」と言ったり、即興で歌を作って唱いながら独楽をまわしたりして、冗談が飛び交った。酒が入って良い気分になっていた筆者に、佐東拓男さん(63)が笑いながらこう言った。「田澤くん、これがマタギ16の遊び。こうやって、クマヤマやった後に集まって、飲んで、喰って、最後にこれやるの。」

この「遊び」は午後 11 時頃まで続いた。宴会には特にお開きの時間は決まっていないらしく、参加者はそれぞれ思い思いの時間に帰っていった。気がつくと、筆者を含めて５人だけが残っており、最後に一勝負して宴会はお開きとなった。

Ⅴ．おわりに

遠刈田温泉の男たちは昔から、山に入って狩りをしてきた。狩猟は彼らにとって現金収入の手段であるとともに、大きな楽しみでもあった。社会経済的な状況が変化して、狩猟の産物の経済的価値が低くなり、生業としての狩猟は成り立たなくなった。近年、環境の変化による獲物の減少、猟場の保護区化、高齢化にともなう狩猟人口の減少などによって、男たちは昔ほど盛んには「クマヤマ」をやらなくなったが、狩猟の伝統はなお健在である。

「熊供養」に集まる男たちは、クマを供養し、山の神に豊猟と安全を祈願し、酒を飲んで遊び、猟の思い出を語り合う。彼らにとって「熊供養」とは、山の神の恵みに感謝し、ともに猟をやってきた仲間とのきずなを確かめ合う大切な集いなのである。

引用文献

16 猟師のこと。もともと遠刈田には「マタギ」という言葉はなく、昔から、「マタギ」といえば秋田県阿仁地方の猟師のことを指した。翠川政人さん(75)は、佐東英蔵さんから、遠刈田温泉より上流にある峨々温泉の辺りに、阿仁のマタギが来たことがある、という話を聞いたことがあるそうだ。

阿子島　雄二
　1978　「山神と鹿供養塔考」『東北民俗』12、15-20。
　1979　『郷土物語白石地方の歴史』上、東京:歴史図書社。
飯舘村
　1976　『飯舘村史 第三巻 民俗』福島県:飯舘村。
氏家常雄
　1978　「東北地方の賽の河原と祖霊信仰」『東北民俗資料集』7、87-96、仙台:萬葉堂書店。
NHK 仙台製作グループ
　1973　『近代東北庶民の記録』東京：日本放送出版協会。
堺 六郎
　1986　『蔵王のまたぎと岩魚釣り』宮城：堺六郎。
菅野新一
　1961　『山村に生きる人々』東京：未来社。
橘文策
　1963　『木地屋のふるさと』東京：未来社。
千葉徳爾
　1975　「蔵王山東麓における野生大型哺乳類の分布およびその変動について」『東北地理』27-2、74-81。
鳥獣保護研究会
　1981　『鳥獣保護法の解説』[改訂３版]、東京:大成出版社。

宮城県教育委員会
　1982　『宮城県におけるニホンカモシカの生息状況』仙台:宮城県教育委員会。
蔵王町
　1993　『蔵王町史　民俗生活編』宮城県:蔵王町。
　1994　『蔵王町史　通史編』宮城県:蔵王町。
　2002　『宮城県蔵王町統計書　平成 13 年度版』(PDF 版)、宮城県:蔵王町。
http://www.town.zao.miyagi.jp/kurashi/section/kikaku/toukeipdf/hajimeni.pdf

おやじたちは今
―「おやじの会」に見る男縁の再構築―

薄葉　豊

１．はじめに

近年、全国各地で「おやじの会」が急増している。おやじの会とは、子育て、子供との触れあい、教育、健全育成、地域貢献、自主学習、そして男どうしのお付き合い等を目的として、男性のみが集まって活動する、学区もしくは地域単位の集団である。2004 年に実施されたアンケート調査では、仙台市を含め、宮城県内に 86 団体のおやじの会が存在することが確認された（お父さんたちのネットワークホームページ）。

本研究の目的は、仕事に生きてきた男性たちが、おやじの会を通して今地域に帰ろうとしている、その現実を明らかにしていくことである。今なお続くおやじの会の増加には、社会の変化に伴う男性たちの変化が背景としてある。そのことを、本論文を通して明らかにしていきたい。

かつて上野は、選択的でヨコ型である女縁に対し、男縁は「社縁のヒモつき」で「男が男縁をつくるのは、女が女縁をつくるのよりむずかしい」と述べた（上野 1988:776-778）。しかし私が見た男縁は、社縁とは区別され、きわめてインフォーマルな付き合いをするものであった。近年見られる男縁は、上野が言っていた時代のそれとは異なってきているということも、この論文で明らかにしたい。

２．男たちの離散－戦後日本男性の社会的変化

ここではおやじの会について触れる前に、日本男性の社会的な変化について、その歴史的な側面から簡単に見ていきたい。

戦前の就業形態をさかのぼって見てみると、その半数以上は農業や漁業を中心とする第一次産業であった。1950 年の段階でも、第１次産業就業率は 48.3%であった（西川 2003）。また、戦前は都市化もさほど進んでおらず、戦前の都市人口比率は 30%以下であった（小田 1997）。以上のことから、戦前の日本社会は、そのほとんどが第１次産業中心の農山漁村であったと考えられる。そこは、自分の住んでいる地域の中に働く場所があるという、「職住一致」の社会であった。男たちは、地域の中で生活をおくっていたのである。

ところが、戦後の経済成長が産業化に拍車をかけた。それまで 48.3%あった第１次産業就業率が

1960 年には 30.2%、1970 年には 19.7%にまで低下し、代わって第２次、第３次産業就業率が急激に伸張していった（西川 2003）。男たちは雇用制という流れの中で、都市部の工場や企業で働くようになっていったのである。このことから都市化が進み、戦前は 30%以下だった都市人口比率も、60 年代には 60－70%にまで伸びていったのである（小田 1997）。そして都市勤務者のための居住地として出現したのが、団地やニュータウンをはじめとする、都市郊外住宅地であった。男たちにとってそこは、仕事から帰ってきて寝るための場所でしかなかったのである。そしてこのような流れがジェンダーによる役割分担を明確化し、男たちは家庭にも地域にもいない「カイシャ人間」となっていったのである。戦後の日本社会は、まさに「職住分離」の世界であった。

３．男縁－男たちの集合？

上野（1988:720-789）は、女性たちの付き合い関係を「女縁」と呼んだ。女縁は地縁から区別され、極めて選択性が高く、「チューニング・コミュニタス」[1]に基づいていると上野は言う。男性と違って社会化されていない女性たちの付き合い方は、気の合う仲間どうしが集うという意味において選択性が高く、また肩書きがないのでヨコ型になりやすいのである。

そして上野（1988:776）は女縁に対し、「男の選択縁」、「脱社縁の男のつきあい」を「男縁」（だんえん）と呼んでいる。上野の議論を参照し、私は男縁を「職場以外の場で作られる、男性だけのプライベートな付き合い」と定義する。したがって職場の男性どうしの付き合いは社縁であって、男縁ではない。

80 年代後半において上野が見た男縁とは、「異業種交流研究会」と、大阪市内の「銭湯愛好会」であった。前者はその名の通り異業種の男性とお付き合いしようという集団であり、後者は市街地の風呂屋の常連客で作った、年齢も職業も異なる男どうしで、裸の付き合いをしようという集団である。男だけが集まって、職場以外の場でプライベートな付き合いをしようとする点では、両者に違いはない。しかし上野は、両者とも「社縁のヒモつき」だとしている。例えば異業種交流研究会は、「仕入れた情報や人脈を、いずれは仕事に役立てようという意図がみえすいている」わけであり、利害関係のない女縁とは違う。また「銭湯愛好会」も、結局は「会長」や「経理部長」という役職を作り、ワープロで作った「規則」を会社のコピー機で印刷し、会長はいつのまにか「会長」と呼ばれないと機嫌が悪くなってしまうようになったというのだ。これも、肩書きも規則もない女縁づきあいとは大きく異なる点である。

上野（1988:778）は、「男たちは社縁の中で鍛えられているから、いつのまにか企業のミニチュアをつくってしまうのだろうか…男が男縁をつくるのは、女が女縁をつくるのよりむずかしい」と述べている。確かにこの時代にも男縁はあった。しかしそれは、全く仕事と切り離されたものでは

[1] 「波長の合う相手と、周波数を選別するように見えない手段でお互いに選び合った共同体」。V．W．ターナー（1996）の「コムニタス」を援用した用語である（上野 1988:770）。

なかったのだ。その背景には、「アフターファイブにどれだけ社外の人間とつきあうかが…社内の評価を決める」という、80 年代後半以降の風潮があったように思われる（上野 1988:777）。仕事ばかりでなくプライベートもバランスよくこなせる人間が、企業のイメージアップに繋がっていく時代だったのであり（文 2003:45-47）、その点で男縁づきあいも仕事の一環としての性格を免れず、ある意味では戦略的に展開されていったものであったと考えられる。

しかし、社縁絡みの男縁が、現在まで続いているわけではない。仕事とは関係なく、きわめてインフォーマルな付き合いをする男性たちの集いが、近年急増している。それが、おやじの会である。おやじの会に見られる男縁のあり方は、上野の言う男縁とは大きく異なるものである。

４．おやじの会

近年、全国各地で「おやじの会」が急増している。私は、おやじの会を男縁に基づく集団、つまり男縁集団であると考える。

近年増加している男縁集団の名称は、「おやじの会」とは限らない。例えば「とうちゃんの会」、「おやじ倶楽部」、「男の会」、「おやじの腕まくり」など、会の名称は様々である。しかし実際は平仮名書きの「おやじの会」が圧倒的に多く、メディア上でも「おやじの会」として認識されているため、私は上述のような男縁集団一般については「おやじの会」と呼ぶ。しかし、個々の会を事例としてあげる場合には、正式な名称で呼ぶこととする。

おやじの会の先駆けは、1983 年に立ち上げられた川崎市多摩区の「いたか」[2]であると言われている。90 年代に入るとおやじの会は全国各地で急増し、仙台市でも 90 年代後半からおやじの会が増加している。「いたか」の世話人である大下氏はおやじの会の急増について、「バブル崩壊後、企業でリストラが相次ぎ、男たちが家庭や地域も人生の一部だと肌で感じるようになったことが原因ではないか」と述べている（朝日新聞 2003）。また最近では、おやじの会どうしの交流会も盛んである。上述の「いたか」は近隣のおやじの会と「川崎おやじ連」を形成し、仙台市でも「西中田小おおっ！とうちゃんの会」を中心に 10 数団体が集まり、「お父さんたちのネットワーク」を形成している。また 2003 年には、おやじの会の全国組織「おやじ日本」が立ち上げられている。

ところで全国に広がるおやじの会を見ていくと、活動の目的や内容は会によって大きく異なっていることがわかる。そこで文献調査で得た情報を基に、私はおやじの会を大きく２つのタイプに分類した。それは子供との交流や教育を目指す「子供交流型」と、地域への貢献や地域住民との交流を目指す「地域交流型」である。以下この類型に従って、全国各地のおやじの会について見ていく。なお全国各地のおやじの会についての調査は、雑誌やインターネット等を活用しておこなった。

---

[2] 「いたか」という会の名称は、会のあるメンバーが自宅内を歩いていた際、幼い息子に「あっ、お父さん、いたのか」と言われたという笑い話に由来している（時の動き 1988:68-71）。このことが、当時の男性がいかに家庭や地域との係わりを失っていたかを物語っている。

（1）子供交流型

子育て、子供との触れあい、教育、健全育成等を目的とするのが、子供交流型のおやじの会の特徴である。子供交流型にあたるおやじの会のほとんどが、PTA 活動の一環として活動している。そこでは、PTA 役員がそのままおやじの会会員となるケースが多い。例えば「PTA 会員ならどなたでもご参加自由です」（折立小お父さんの会ホームページ）と、参加資格を PTA 会員に限定しているおやじの会も少なくない。しかし最近では、PTA 役員の OB を会員として取り込むなど、PTA から離れて自主運営組織として活動するおやじの会も増えてきてはいる。また、定例会に各会員の妻たちを参加させたり、学校の教員を参加させたりするおやじの会もある（時の動き 1988:68-71、加藤 1988:152-159）。それは、父親たちが母親や教員との面識を作っていくことで、間接的に子供の教育に係わろうとしているためである。

このような子供交流型のおやじの会では、おやじの会会員の男性たちが学校行事に助っ人として参加したり、学校児童を対象としたキャンプ会、スキー会、餅つき会などを催したりしている。したがって、子供交流型にあたるおやじの会の活動は、学区単位でおこなわれることが多い。いずれにしろ以上のような活動の中で、会員である男性たちは自分の子供や他の子供たちとの交流を図り、あるいは教育していくのである。

（2）地域交流型

地域行事への参加、自主学習、そして男どうしの付き合い等を目的とするのが、地域交流型のおやじの会である。このタイプは、鳥取県に多く見られるように思える。例えば鳥取県泊村のおやじの会や、同県名和町のおやじの会は、どちらも公民館サークルとして活動し、集まった男性たちが市民講座に参加したり、定例会で発表や討論をおこなったりしている（桑尾 1989:66-70、鳥取県名和町教育委員会 1986:45-47）。また同県賀露町のおやじの会では、道沿いに風車を設置して、風車の町としての観光資源を活用する等の活動をおこなっている（藤田 2000:15-21）。そして以上のようなおやじの会は、しばしば行政の支援を受けながら活動している。鳥取県では過疎化が深刻な問題となっていることもあってか、おやじの会を通して地域活性化を図ろうとする行政側の意図も見え隠れしている。

一方、教育や地域貢献とは少し離れて、純粋に地域の男どうしの親睦を深めようとするおやじの会もある。例えば大阪府高槻市南平台ニュータウンのおやじの会は、「安心して暮らせるように、普段から顔の見える付き合いが必要だ」という趣旨のもと、下は 20 代から上は 60 代まで、様々な年代の男性住民が参加している[3]。基本的には、定例会と称した飲み会を開き、一緒に酒を飲んで親睦を深め、そうやって地域に仲間を作っていこうとするのである（社納 2004:44-46）。

[3] 中には独身男性もおり、子供との交流を図るおやじの会とはやや違った性格を持っている。

（3）おやじの会の共通点

以上、「子供交流型」と「地域交流型」に分けて、全国各地のおやじの会について見てきた。各おやじの会の活動目的、活動内容は一様ではなく、会によって大きく異なっている。しかし、全てのおやじの会にはある共通点がある。それは、「地域の男だけが集まって、職場以外のプライベートな空間で活動している」ということである。結局、活動目的が教育であろうと地域貢献であろうと、地域の男だけが集まって、男どうしで顔の見える付き合いをしているという点においては、どのおやじの会も同じなのである。

また様々な形で、職場とは違った気楽な付き合いを求めようとしていることも、各おやじの会に共通して言える傾向と思われる。例えば「タテ社会だけのつながりだけなく、ヨコ社会の人間関係を作るため、おやじの会の親睦をはか」ったり（西初石おやじの会ホームページ）、「組織だって活動しているのとは違」ったりする（南材おやじ倶楽部ホームページ）。この他、集まりたい人が集まれる時だけ集まる、強制参加はさせない、役員を置かないなどとするおやじの会は多く見られる。会社のような組織内での人間関係とは一線を画し、自由参加、ヨコ型のメンバーシップを求めようとするのも、おやじの会の共通点ではないかと考えられる。

そして、地域の男性だけが集まって、職場とは違った「プライベート」で「インフォーマル」な活動をしているという点においては、上野の言う男縁とおやじの会に見る男縁とでは大きな違いがあることがわかる。おやじの会は、どうやら「社縁のヒモつき」ではないようなのだ。以下、私がフィールドワークをおこなった「Sおやじの会」を見ていくことで、そのことを具体的に明らかにしていきたい。

5．Sおやじの会

ここでは、私がフィールドワークをおこなった「S おやじの会」について見ていく。

S おやじの会に集う男性たちは、Sタウンに住む 40−50 代の人たちであり、仕事をしながら休日を利用して活動している。この S おやじの会でのフィールドワークとインタビューが、本研究の主な研究方法である。調査期間は 2003 年 6 月から 2005 年 12 月までである。なお、本論文に登場する S おやじの会の男性たちについては、みな仮名を用いるものとする。

（1）Sタウン

Sタウンは、仙台市のニュータウンであり、Sおやじの会の主な活動の舞台である。1985 年に造成が終了し、同年分譲が開始されている[4]。2005 年 10 月現在で約 1900 世帯、約 7000 人の住民が居住している。

Sタウンは１－５丁目まであり、１－３丁目が西地区、４・５丁目が東地区と大きく２つに分か

[4] 1995 年に全ての分譲が終了した。

れている。ほとんどが戸建て住宅であるが、１部には公営の集合住宅が立地している。地縁組織としては、１・２丁目町内会、３丁目町内会[5]、東地区町内会、そして公営住宅の自治会がある。公共施設として主なものは、市民センター、コミュニティセンター、児童センター、そして各丁に１つずつ集会所がある。その他、東地区にＳ小学校とＳ中学校が、西地区にＳ西小学校がある。商業施設は、大型スーパーが１店舗ある程度だ。

ここは住宅地であり、住民の雇用源となり得る場はない。したがって男性住民はＳタウン外に雇用先を求め、その妻は核家族としての家庭の中で家事や育児に専念する。こうして「昼間人口＝女性、夜間人口＝男性」というジェンダーによる分断が生じる。Ｓタウンの中には様々なサークルが存在するが、Ｓおやじの会の人たちやその奥さんたちに話を聞くと、そこに参加するのはほとんどが女性、あるいは子供たちである。定年退職した男性が参加するサークルや老人会はあっても、現役で働く男性だけが集まるサークルはなかった。少なくとも、Ｓおやじの会ができるまでは。

このように、朝から晩までＳタウンを留守にする男性たちには、互いに交流する機会がないという問題があった。またこの他、Ｓタウンでは少子高齢化も進んでいる。仙台市の資料によると、2005年10月現在で高齢者比率（65歳以上人口／総人口）は約９％、またＳ小学校のホームページによれば同校の児童数は80人となっている。2004年の入学者数は７人だったと、Ｓおやじの会のある男性は語っていた。そしてこの少子高齢化が原因となって、商店の衰退や小中学校の廃校が懸念されている。

（２）Ｓおやじの会の立ち上げ

Ｓおやじの会を立ち上げたのは、Ｓタウンに住む５人の男性たちであった。彼らはそのほとんどが会社員であり、50代の男性たちである。彼らの共通点は、以前町内の地縁組織に参加した経験がある、ということである。例えば５人のうちの１人、Aさんは、1995年に町内会長を務め、その後５年間も町内会長を務め続けた。Aさんは同時に、体育振興会[6]の役員も務めた。PTAの役員になったこともある。

またBさんは、1991年に西地区町内会長に選出されている。風邪をひいた奥さんの代わりに出席した総会で、たまたま選出されたのである。Bさんは、町内会長の役は１年で辞したものの、同時に所属した体育振興会はその後も続け、今でも所属している。そしてBさんは、この体育振興会でAさんと知り合っていた。またBさんは、1992年にＳ西小学校のPTA役員を務めた経験もあり、同年Ｓ小学校のPTA役員を務めていたCさんと、合同研修会で知り合っている。

そしてDさんは、1992年に東地区町内会の役員になった経験がある。Bさん同様、奥さんの代わりにたまたま出席した総会で選出されたという流れだ。ところでＳタウンでは年１回、夏祭りがおこなわれる。夏祭りの運営は町内会の仕事であり、Dさんは夏祭りの実行委員も務めた。ところ

[5] ３丁目は最も分譲が遅かったので、90年代初頭までは、１－３丁目が西地区町内会としてまとまって運営されていた。
[6] 体育大会やスポーツ大会を催す、学区単位の組織。

がＳタウンの町内会にはいわゆる「引き継ぎ」がなく、D さんはどうやって夏祭りを運営していいのかわからず困っていた。そこで前年度夏祭りを実行した西地区町内会役員を招いて、説明を受けようという話になった。この時、前年の 1991 年に西地区町内会長を務めた B さんが講師として現れ、B さんと D さんはここで知り合っている。また D さんは 1996 年に PTA 役員を務めた経験があり、この時一緒に役員を務めた E さんと親交を深めていた。

A－E さんの５人は、偶然のきっかけからＳタウンの様々な地縁組織に参加することになり、そしてそれをきっかけに様々な住民とのお付き合いを深めていった。その結果、１つの集団から別な集団に参加していく人もいれば、１つの集団に長年参加し続ける人もいた。そしてその中で、A－E さんはそれぞれ「顔見知り」になっていった。各関係はそれぞれ独立していながらも、１本の線で結びついていたように思われる。いずれにしろ彼らは、その中で住民との付き合いに楽しみを見出していったのである。

しかし D さんは、PTA 役員を務めた時、ある疑問を持っていた。

「当時の PTA で、男は私と E さんだけでした。女性は元気で仲が良いのに、男はな～んか引っ込み思案なんですよねぇ。女性は凄いですよ。スーパーなんかでバッタリ会うと、ワーっとお喋りが始まって。男は職場に向かうバスの中で会っても、挨拶すらしませんから。こういうのは何かおかしいんじゃないかって、E さんと話したんですよ。男だけで集まれる場所を作ろうって。」

こうして、Ｓタウンの男性のあり方に疑問を持った D さんと E さんは、「男だけが集まる場所を作ろう、そうすれば男たちも仲良くなるはずだ」と考えたのである。当時、仙台市でもおやじの会が増加し始めていた。各地で活発に活動するおやじたちの話を耳にし、D さんと E さんは、「Ｓタウンのおやじだけが集まる、Ｓおやじの会を作ろう」と考えるに至ったのである。

そこで２人は呼びかけをおこなうことにしたのだが、仕事ばかりで町内のことはよくわからなかったので、町内会の役員を務めたことのある男性たちに呼びかけた。しかし元町内会役員が全て２人のもとに集まったわけではなく、地縁組織を通して多少なりとも「顔見知り」になっていた A－C さんが、２人のもとに集まったのであった。偶然のきっかけで地縁組織に参加した経験が、ここで功を奏したのである。彼ら５人は D さん宅に集まり、数回の協議を開き、Ｓおやじの会をどのような会にすべきか話し合った。

中には、Ｓタウンの未来を懸念して立ち上げに係わった人もいる。それは A さんだ。

「やっぱり父親のネットワークがちょっと弱いんじゃねぇかっつうのがあって…極端な話になるけど、宮城沖地震みたいに何か災害が起こった時に、そういうネットワークが必要になるんでねぇか、と思うのね。」

Aさんはタウンの危機管理が必要だと感じていたのであり、そのためには最も結びつきが弱い男どうしがネットワークを作るべきだ、と感じていたのである。いずれにしろ、この時Sタウンの男たちが集まって、腹を割って話をすることができたのだ。

こうして1998年、Sおやじの会が誕生した。

（3）Sおやじの会の概要

Sおやじの会を立ち上げた5人の男性たちは、有志を募るためにSタウン内にチラシを配布した。隣近所の父親に手渡したり、町内会に頼んで回覧板で回してもらったりと、その方法は様々であった。いずれにしろ、チラシを見て興味を持った男性たちが、続々と5人のもとに集まってきたのである。

こうして参加者数は徐々に増加し、現在では38人の男性たちがSおやじの会に参加している。しかしその中でも通常活動に参加しているのは、おおよそ10人程度である。彼らはみな40−50代であり、仕事をしながらも、その合間をぬって活動に参加している。サラリーマンもいれば、自営業者や公務員もいる。

Sおやじの会には、一応決まり事がある。立ち上げに係わった男性たちが作ったものであり、その名を「Sおやじの会申し合わせ事項」（以下、申し合わせ事項と呼ぶ）という。その内容は、Sおやじの会のあり方を端的に示すものである。例えば、「協調と対話の精神をもって互いの人格を尊重する」と定められている。Sおやじの会には様々な職業に従事する男性たちが集うが、各々の価値観を対立させることなく、彼らは上手く共存しあっている。また「参加、及び脱会は自由」と定めることで、強制的な参加はさせないことにしている。例えば夏祭りなど年1回しか参加しない人たちもいるが、毎回活動に参加している人たちは、そのことを理由に彼らを差別的に扱わない。さらに、「特定の政治活動、宗教活動を行ってはならない」と定めることで、様々な価値観を認め合おうとする姿勢が強調されている。

しかし、こうした決まり事は「今はあんまり頭に入ってなくって」と、現会長は語る。実際、申し合わせ事項の存在を知らずに活動している人は多い。Sおやじの会には入会の手続きが一切無く、したがって申し合わせ事項を提示する機会がないのだ。最近Sおやじの会に入った人も、私から申し合わせ事項の話を聞いて、「そんなのがあったんですか。全然知りませんでしたよ」と驚いていた。もちろん、申し合わせ事項の存在を意識して活動している人などいない。それでも、「価値観は1つではない」、「俺たちは自由で平等だ」という意識は、彼らの間で常に共有され、行動として表れているのである。

またSおやじの会には、一応の役割分担がある。まず「会長」がいるのだが、会長のやる仕事は限られている。例えば祭りに出店をだす際、誰が何を担当するかを考えて、定例会で皆の承諾を得る。そして祭りが終わったら、その収支を報告する。また何かあったら、対外的にSおやじの会を代表する。この程度である。会長だからといって、何かとリーダーシップをとったり、偉そうな態

度は出さない。他の人たちも、会長だからといって特別な扱いをすることは、一切無い。

他には「企画総務」という役割がある。これはイベント事の企画や立案を担う役なのだが、この役割ももはや形骸化している。「この指とまれ」方式のSおやじの会では、現実的には、メンバー[7]全員が企画立案者となっている。そして最後に、「会計係」がある。祭りに出店をだす際に金銭の出入りを管理するのが、この会計係の仕事である。しかし会計係の出番は、ほとんど祭りの時だけである。なぜならSおやじの会には年会費がなく、その都度メンバーから必要費を調達しているからだ。つまり、1年を通して管理すべき金銭などないので、会計係の出番は祭りの時に限られるのである。

ちなみに申し合わせ事項には、「世話人は総会によって選出され承認される」と定められているが、Sおやじの会で総会がおこなわれたという事実はない。これまで会長を務めたのは2人だが、前会長が現会長にその座を委ねたのは、単身赴任が決まって会長を続けるのが難しくなったからだった。実際には、会長はその場その場の状況に応じて、柔軟に決定されていると言える。

このようにSおやじの会では、決まり事にとらわれず、役員のような組織だったものも作らず、メンバー全員が自由で平等な付き合い方をしている。

（4）男どうしのお付き合いーおやじと酒

では、Sおやじの会ではどのような活動がなされているのだろうか。申し合わせ事項の付記には、「この会は努めて懇親会を行うものとし、その場合は自分の飲み物と、料理一品持ち寄りとする」と記されている。これを受けて、というわけではないが、Sおやじの会では月1回、毎月第4土曜日に「定例会」がおこなわれる。この定例会が、Sおやじの会の主な活動である。定例会はメンバーの間では「例会」と呼ばれ（以下例会と呼ぶ）、立ち上げ以来毎月おこなわれている。

例会をおこなう場所は、あまり定まっていない。コミュニティセンターを使うこともあれば、集会所を使うこともある。しかし、町内の公共施設を利用しておこなわれることに間違いはない。Sタウンには居酒屋が無く、居酒屋を利用するとなれば、Sタウンを出て市街地まで車で行かなければならないからだ。

例会の開始時刻は、毎回 18 時となっている。しかし、この時間にメンバーが集まることは少なく、時間通りに到着するのは鍵係の人くらいである。その他の人はだいたい 19 時前後に集まってくる。この傾向は例会だけでなく、Sおやじの会の諸活動において見られる。一応集合時間は決めるけれど、各人が都合の良い時に集まる。決して強制はしない。これが「おやじ時間」である。

例会といっても、特に何かをするために集まるわけではない。みんなで酒を飲んで、好きなように話をすればいいだけのことである。つまり、飲み会である。そこでは町内の話や世間話で盛り上がる。祭りやイベントが近づくと、「こんなことやろうよ」、「それいいね」と意見を出し合う。Sお

[7] 現会長は、「Sおやじの会に、会員ていないんです」と語る。会社のようなタテ型組織にならぬよう、Sおやじの会では会員制のような組織だった制度は設けられていない。そこでSおやじの会の個人については、基本的には「メンバー」と呼ぶことにする。また彼らは父親であり、「近所のおじさん」でもあり、同時に1人の「男」でもある。そのような様々な意味を込めて、あえて「おやじ」と呼んだりする。

やじの会では、男たちは目的を持って集うわけではなく、むしろ「集う」ことそれ自体が目的になっている。

絶対にしてはいけないのが、仕事の話である。いったん仕事の話をし出すと、愚痴や勧誘、対立に発展しうるからである。「せっかく仕事からも母ちゃんからも解放されたっつうのに、ここで嫌な気分になっちゃあつまんないでしょ」と、あるメンバーも言っている。最近ではようやく把握できるようになってきたが、互いの職業について「２、３年前までは本当に何もわからなかった」と言う人も少なくない。職業ばかりか、互いの出身地や年齢すら知らない。最近の例会でも、もう知り合ってから何年も経つのに、たまたま同郷だとわかった人たちもいた。彼らは、どうやらあまりプライベートな部分には突っ込まないようだ。だからこそ、長年良い関係を保てるのかもしれない。

彼らが仕事関係の話をするとすれば、それは仲間から相談や悩みを持ちかけられた時だ。例えば、「家の電灯が壊れてしまった。複雑な仕組みになってて、どうやって直したらいいか分からない」という相談に対し、電気工事関係の仕事に就いている人が応えていた。また、「自宅のテレビが映らなくなった。そろそろアンテナ変えた方がいいかな」という相談に対し、放送電波関係の仕事に就いている人が応えていた。このように、様々な職業に従事する男性たちが集う場所では、それぞれの職業的見地からアドバイスすることが可能となっている。これが、男縁の強みではないだろうか。

例会の日を利用して、いつもとは少し違った活動をすることもある。例えばＳおやじの会５周年記念の日、みんなでバーベキューをしたことがあった。この日の最後には、蕎麦打ちを趣味に持つメンバーが、蕎麦打ちを披露してくれた。また、年末には必ず餅つきがおこなわれる。ついた餅を鏡餅にして、新年の門出を迎える準備とするのだ。もちろん、蕎麦を打つ時も餅をつくときも、酒は欠かせない。

その他毎年恒例となっている行事としては、花見がある。４月になるとＳタウン内の空き地や、近くの公園を利用してメンバーが集まり、ブルーシートの上で大宴会を催す。心地よい春の陽気が、彼らの気分を一層高揚させる。中には、太鼓やお囃子までやり出す人たちもいた。一方で、何やら難しげな議論をしたり、酔って眠りに就いてしまう人もいた。

この他、活発なメンバーの提案によって、不定期にイベントが催される。例えば、2001 年には付近の河川で「釣り＆バーベキュー会」が開かれたそうだ。また 2005 年には、「家族対抗ボーリング大会」が催された。この日はメンバーとその家族が集まり、楽しく激しいボーリングバトルが繰り広げられた。

以上述べてきたように、Ｓおやじの会では、男性どうしの親睦を図るための様々な活動がなされている。そしてその際、酒は彼らの必需品となる。酒は「おやじのガソリン」なのだ。このような言い方をすると、彼らが酒ばかり飲んでいるように聞こえるが、実は酒を酌み交わすことこそが、彼らが仲を深める１番の方法なのである。私も初めの頃は緊張しながら彼らの活動に参加していたが、酒の力が彼らと私の距離を縮めてくれた。仕事ばかりに傾いてしまい、顔を合わせたことのなかった男たちがお付き合いをする時、共に酒を酌み交わすことは、彼らが親睦を深める１番の近道

なのである。

とはいえ、現役で仕事をする男たちである。出張や単身赴任でなかなか顔を出せない人もいる。そんな時は、ITが彼らの強力な助っ人である。メーリングリストを上手く使うことで彼らのコミュニケーションはより円滑なものとなり、「おやじだより」というミニコミ誌を発行し配布することで、活動に参加できない人も会の活動状況を把握できる。技術職者が多いためか、彼らは本当に電子機器関係に親しい。管理者の事情により閉鎖となってしまったが、2004 年まではSおやじの会独自のホームページも持っていた。最近では、今話題となっているコミュニティー・ネットワークサイト「mixi」[8]を始めよう、という動きまである。時代の変化に対応していくおやじたちである。

（5）地域に帰る男たちーおやじと祭りと主婦サークル

上述の通り、Sおやじの会は町内の公共施設を利用して活動している。利用する時は「Sおやじの会」の名前で利用する。すると、Sおやじの会の名前、そしてその存在が町内に知れ渡っていくのである。その結果、祭りを運営する町内会や、様々な行事をおこなう学校にまでSおやじの会の存在が認識され、そこからSおやじの会のもとに地域行事の協力依頼が来るようになる。そしてこの協力依頼を受けて、Sおやじの会は様々な地域行事に助っ人として参加するようになる。ここでは、そうした地域行事への参加を通して、地域に出て行く男たちの姿を記述する。

①Sタウン夏祭り

上述した通り、Sタウンでは年１回、毎年７月になると夏祭りが催される。Sおやじの会は町内会からの依頼を受けて、1999 年から毎年夏祭りに参加し、焼き鳥、焼きとうもろこし、金魚すくいといった出店をだしている。

夏祭りは毎年７月末の土曜日におこなわれる。メンバーたちは出店の準備をするために朝９時には集合し、３つの班に分かれる。仕入れ先から材料を搬送してくる班、搬送された鶏肉や焼きとうもろこしを湯の入った鍋でボイルする班、そして夏祭りがおこなわれるS公園で出店のテントを張る班の３つである。材料の搬送は、鉄工会社を経営するメンバーが所有する軽トラックを使っておこなう。ボイルはコミュニティセンターの調理室でおこなう。テントを張る班は、焼き鳥を焼くU字ブロックを設置し、その中に大量の炭を入れて点火する。この時、機材販売をしているメンバーが持ってきたガスバーナーで、点火する。準備が終わるのが 16 時、そして 16 時半になると夏祭りが開始される。

夏祭りの時、Sおやじの会は、時として大量の商品を売り出す。2002 年に売り出した焼き鳥の本数は 7000 本だった。しかし毎年夏祭りの時には、20 人近いメンバーが集まる。彼ら全員が力を合わせて出店をまわすため、毎年売れ残りはない。ちなみに焼き鳥の単価は１本 50 円である。これ

[8] 唯一「友人の紹介」のみによって登録可能となる、新しいコミュニケーションサイト。登録した個人はサイト内で自分の日記を作ったり、趣味の合う者どうしで「コミュニティー」を作り、それを通して友人の輪を広げていく。若者の間で流行となり、メンバーたちは「ここでSおやじの会のコミュニティーを作ろう」と奮闘している。

ほど安い値段で売れるのは、彼らが利益を追求していないということもあるが、メンバーの有する仕事関係の情報により、極端に安い原価で仕入れることができるからである。しかしこれほど安い単価でも、毎年多少の黒字が発生する。こうして発生した利潤は、以後の活動のためにストックする[9]。

夏祭りは、毎年20時半頃終了する。終了15分前には大きな花火が打ち上げられる。Sおやじの会のメンバーのほぼ全員が、夏祭りを「最も楽しい活動」として位置づけている。上述のように、夏祭りの出店の準備は容易ではない。しかも、仕事の疲れもまだ残っているであろう土曜の朝から、メンバーたちは出店の準備に取りかかるのである。しかし、だからこそ商品が全て売れ、大きな花火が打ち上げられる時の男たちの達成感、そして一体感は、何とも言い難いものだろう。それが欲しくて、彼らは毎年夏祭りに参加するのかもしれない。「夏祭りは楽しい」と彼らが口をそろえて話すのも、きっとそのためであろう。

②おまつりひろば（児童センター祭り）

Sタウンには、児童センターがある。高校生までの子供なら誰でも無料で利用できる、仙台市運営の公共施設である。この児童センターでは、毎年10月になると「おまつりひろば」が催される。これは、Sタウンの子供たちを対象に催される祭りである。この児童センターからの協力依頼を受け、Sおやじの会は2001年から毎年このおまつりひろばに参加している。他にはボランティアの学生や、学校の母親たちからなる健全育成会が参加する。

Sおやじの会の出し物は、やはり出店である。売り出す商品は毎年違うが、焼き鳥は毎年出している。その他、磯辺焼きや金魚すくいを出すこともある。準備の作業体系や単価は、夏祭りと同様である。ただし、おまつりひろばは夏祭りと比べると規模の小さい祭りなので、売り出す商品の量は少ない。

2003年に出した金魚すくいでは、子供たちの長蛇の列ができた。中には待ちきれず、割り込んでくる子供もいる。すると店番をしているメンバーは、「まだこの子がやってるでしょう」「順番守ろうね」と優しく声をかける。一方で、「ダメダメそれじゃ。こうやってとるんだよ」「そうそう、うまいうまい」と、子供たちと一緒になって祭りを楽しむおやじたちがいる。

祭り終了後、出店参加者のための「お疲れさま会」が館内でおこなわれる。そして参加者用の食事にするため、Sおやじの会のメンバーは、祭り終了後も焼鳥や磯部焼きを焼く。するとまだ帰宅せず残っている子供たちが、焼き鳥の臭いに誘われてやってくる。そしてまだ売っているものと勘違いして、「1本ちょうだい」と言ってお金を渡してくるのである。もちろん、数も限られているし、祭りも終わっているので売ることはできない。しかしおやじたちは、「サービスな」と言って、参加者用の焼き鳥から1本差し出す。お金は受け取らず、「ほれ、早く帰りな」と子供たちに帰宅を促し、「俺らの分は別にいいからよ」と職員に説明する。

---

[9] 材料を購入するための資金は、毎年町内会から「前渡金」として前借りする。そして売り上げの中から、前渡金と同等の金額を町内会に返還する。

この場面は毎年見られるのだが、その度に「おやじの優しさ」が感じられる。

③主婦サークルX

Sタウンには、交通安全活動をおこなう主婦サークルがある。もともとはSタウンの主婦たちが集まってお茶を飲む会だったのだが、今では交通安全活動に力を入れている。おそらく、中心メンバーF さんの夫が警察官で、町内会の公安関係役員を務めたことがあるためだと思われる。

この主婦サークルの交通安全活動に、Sおやじの会のメンバー数人が参加している。きっかけは、Sおやじの会のB さんと警察官であるF さんの夫が知り合いだったことである。B さんが 1991 年に西地区町内会長を務めた時、公安関係役員を務めたのがF さんの夫だったのだ。こういった経緯で、B さんはF さんとの親交も深めていった。そしてB さんは以前から仲が良かったA さん、そしてその他にもSおやじの会のメンバー数人を誘い、F さんのサークルに参加するようになったのだ。

この主婦サークルは、様々な文化施設で、また祭りなどの場で、派手な衣装を着て交通安全活動をおこなう。春や秋など、警察行政が交通安全強化活動をおこなう時期にあわせて、町内で交通安全のPR 活動をおこなったりもする。また毎年３月になると、新たに小学校に入学する新１年生を市内の公共施設に集め、様々な催し物を楽しんでもらおうというイベントがある。ここにも主婦サークルX が参加し、舞台でかわいらしい演劇をおこない、そこで子供たちに交通安全の基礎知識を学んでもらうのである。

これらの交通安全活動に、Sおやじの会のメンバー数人が参加する。特に新１年生を集めるイベントには、最も多くのメンバーが参加する。そこで彼らは、主婦サークルXの女性陣と一緒になって、派手な仮装をして演劇に出る。その仮装ぶりは、誰が誰かの判別もつかない程である。主婦サークルXに参加しているSおやじの会メンバーに話を聞くと、「いやあ、騙されたね。交通安全だって聞いて行ったのに、いきなり変な格好させられてさ」と笑っていた。しかし、それでも彼らはお手伝いとして、毎回主婦サークルX の活動に参加している。仕事の合間をぬって練習に参加している。「騙された」とは言っても、本心では楽しんでいるのがおやじたちである。

④主婦サークルY

Sタウンには、雀踊りを楽しむ主婦サークルがあり、様々な文化施設、祭りなどに参加し、雀踊りを披露している。この主婦サークルにも、Sおやじの会のメンバー数人が参加している。きっかけは、Sおやじの会のG さんだった。G さんは、当時をこう振り返る。

「2002 年の青葉祭り見に行った時にね、Yが出ていたのを見たんですよ。そしたらね、彼女たち、バックミュージック隊を持ってなくって、テープの音にあわせて踊ってたんですね。他のチームはちゃんと持ってんのにね。それでそれ見て、ああ、俺たちにも何かできねぇかなって思って、おやじの例会の時に話してみたんですよ。ところが、『俺たちが口出しすることじゃねぇんじゃねぇか』って話になってね。そしたら、他のおやじがYのお母さんと仲良くなってね。そしたら向こうから

『手伝ってよ』って言われて。じゃあ、いっちょやってみっかってことで、おやじたち何人かに声かけして。」

こうして主婦サークルYに興味を持った数人のメンバーたちが、和太鼓やお囃子などバックミュージック隊として、Yの活動に参加するようになった。仕事の都合でなかなか練習に参加できない人もいるが、それでも「太鼓は楽しいよ」と言う。太鼓の方に夢中になり、Sおやじの会に顔を出さなくなってしまう人もいた。彼はその後、Sタウンの子供たちからなる「和太鼓隊」を立ち上げ、現在はそちらの活動に力をいれている。

以上、Sおやじの会のメンバーが、祭りや主婦サークル等の地域活動に活発に参加している様子を記述した。Sおやじの会は公共施設を用いて活動しており、そうすることでSおやじの会の名前と存在が町内に認識されるようになっていったのである。その結果、町内会等からの協力依頼を受けて、彼らは様々な地域活動に参加するようになったのである。個々の男性だけでは、きっと協力依頼は来なかっただろう。つまり、Sおやじの会という集団が立ち上げられたことによってはじめて、彼らは地域活動に参加できるようになったのである。その意味で、Sおやじの会は、おやじたちが地域社会に出て行くための第1歩だったのである。

また、様々な職業に従事する男性たちの集いが、地域活動でまたも力を発揮していることが分かる。夏祭りに出店をだす時、大量の材料を搬送するため、鉄工会社を経営するメンバーが軽トラックを持ってきてくれた。また炭を点火する時、機材販売をしているメンバーがガスバーナーを持ってきてくれた。さらに、1本 50 円という格安の値段で焼き鳥を売れたのは、極端に安い原価で鶏肉を仕入れることが出来たからである。つまり仕事上の情報を有するおやじだからこそ、格安で材料を仕入れることが出来るのである。このように、様々な職業に従事する男たちが集う男縁集団は、対外的にも大きな力を発揮する。だからこそ、町内会や学校といった地域の公的機関からの信頼も厚いのだ。

さらに彼らは、主に主婦たちが集うものであるが、地域の様々なサークルに参加していくようになる。Sおやじの会に参加しながらもバランス良く各種サークルに参加する人もいれば、他のサークルに大きな興味を持ち出したことでSおやじの会に顔を出さなくなってしまう人もいた。しかし、いずれにしても彼らは、様々なサークルに参加していくことで、Sタウンの様々な住民と付き合うことができたのである。重要なことは、Sおやじの会が1つのきっかけとなって、男たちがSタウン住民とのネットワークを広げていった、ということなのだ。事実、Sおやじの会が立ち上げられる前は、彼らは祭りや主婦サークルに参加していなかった。彼らの地域活動への参加は、Sおやじの会が立ち上げられた後の話なのである。

（6）おやじたちは今―Sおやじの会に集う男たち

Sおやじの会の人たちは、Sおやじの会に入る前、どのような生活をしていたのだろうか。どのような考え方を持っていたのだろうか。そしてそれは、Sおやじの会に入って、Sタウンの男性たちと付き合うようになって、どのように変わったのだろうか。ここでは、Sおやじの会の個人に対するインタビューから、以上の疑問に対する答えを導いていく。

Sおやじの会の立ち上げを提唱したD さんは、Sおやじの会を立ち上げる以前の自分について、以下のように語ってくれた。

「私は、町内に友達がいなくて悩んでいたんですよ。40 ぐらいまでは、仕事ばっかりに傾いていたもんですから。だけど集まってみると、悩みはみんな同じだったんです。」

D さんは 40 代を仕事で一生懸命やってきて、その結果社内では管理職に就くという出世を果たした。しかしその一方で、仕事ばかりで地域に知り合いができず悩んでいた。その悩みは、立ち上げに際してD さん宅に集まった他の４人も同じだったのである。

一方、チラシを見て入ったG さんは、Sおやじの会に出会う前の自分について、そしてその後の自分について以下のように語っていた。

「１つの会社の中にずっといるからかもしれないけど、おやじの会に入る前の自分は考え方が狭かったと思うな。どうしてもこれだけは譲れねぇっていうか、そういう頑固な考え方に走りがちだったけど、おやじの会に入ってからはそうじゃなくなったね。確かに自分のポリシーみたいなのは今もあるけど、それだけじゃなくて、いろんな考え方があっていいんだなと思うようになったね…おやじの会には色んな考え方を持ってる人が集まってくるけど、それぞれがそれぞれの考え方を尊重しあえるところが良いと思うな」

また、同様にチラシを見て入ったH さんは以下のように語ってくれた。

「当時は俺もバリバリの仕事人間だったからさ、精神的にも肉体的にも余裕がなかったわけさ…で、ある日家内からおやじの会のチラシ見せられてさ…家内にも息子にも『行ってみたら』って言われて行ってみたんだけどさ…酒飲みながら馬鹿話するっていうあの雰囲気が気に入ってさぁ…それから同じ場所に住む同じ世代のおやじとの付き合いっていうかさ、今までにはなかった生活が始まったわけさ」

G さんもH さんも、Sおやじの会に入るまでは、家と職場を往復するカイシャ人間だった。その中で、彼らは疲れ切った生活を送ったり、考え方が狭くなってしまっていたのだ。しかし１枚のチ

ラシをきっかけにＳおやじの会に入ったことで、彼らの生活や考え方は大きく変わっていった。地域の男性たちとの付き合いを深めていく中で、様々な考え方を認め合えたり、気疲れしない新しい居場所を見つけ出すことができたのである。その結果、Ｓおやじの会に居心地の良さまで感じるようになった。例えば、Ｓおやじの会で最も若い40代のＩさんは、以下のように語っていた。

「付き合っていて疲れるっていうことがないし、逆にベタベタし過ぎることもない。程良い緊張感と、人生の先輩に対する尊敬のような感情も持てる。しかし、それでいて気を使わない…ここでは、家庭でも職場でも言えないような悩みを打ち明けることができますね」

おやじたちは、家庭と職場を往復するカイシャ人間だった。仕事ばかりに傾いてしまい、地域に仲間を作ることができず悩んでいた。しかしＳおやじの会に出会い、彼らの生活や考え方は大きく変わっていった。そこでは彼らは、家庭での父親でもなく、職場でのサラリーマンでもなく、１人の「男」として付き合うことができるのである。彼らは、「地域」という新しい居場所を見つけたのだ。そしてその新しい居場所の中で、おやじたちは今、たくさんの仲間を作ることができたのである。

６．おわりに

Ｓおやじの会は、Ｓタウンに住む男性だけが集まって、職場以外のプライベートな空間で活動している集団である。つまり、男縁集団なのである。しかし、ここに見られる男縁は、かつて上野が言っていた男縁とは、大きく異なる。それは「社縁のヒモつき」ではなく、ましてや「企業のミニチュア」でもない。男たちは今、肩書きを外し、決まり事や役割にとらわれず、自由で、気楽で、平等な付き合い方をしているのだ。

そこでは、酒がメンバーたちの距離を縮める役割を果たしている。会長などの役割分担は、名目上のものでしかない。そして、祭りや主婦サークルに参加していくようになったメンバーたちは、理屈無しに楽しんでいる。金にもならないし、仕事の利益にもつながらないような活動を、彼らは嬉しそうにやっている。彼らの話を聞いていると、むしろ家庭でも職場でもない、新しい居場所を見つけられたこと、そしてその中で多くの仲間ができたことが嬉しくて、様々な活動に参加していこうとするように見える。

働きながら様々な地域活動に参加していくことは、決して容易なことではない。中には単身赴任で土日しかＳタウンに帰ってこれない人もいる。しかし、それでも彼らは地域活動に参加する。それは強制でも義務でもなく、「好きだから」やっていることなのである。男たちが存在価値を見出す場は、会社という組織から、地域という新しい場所に変化してきているのである。この意味において、彼らはもはや単なるカイシャ人間ではなくなったし、ここに見られる男縁のあり方は、上野が

言っていた時代のそれとは大きく異なっていると言える。

そしてこの傾向は、全国で急増する全てのおやじの会に言えることではないか。結局のところ、活動目的が教育であろうと地域貢献であろうと、同じ地域の男たちが集まって、職場以外のプライベートな場で活動をしているという点においては、どのおやじの会も同じであると私は考える。しかもおやじの会の多くは、役職を置かない、強制参加はさせない、タテ型の人間関係は作らないといった様々な形で、職場とは違った、気楽な雰囲気作りに心がけているように思える。つまり、おやじの会での付き合い方と、職場での付き合い方を、意図的に区別しているのだ。この点では、全てのおやじの会が同じ男縁集団であり、かつおやじの会に参加する全ての男性たちが、カイシャという公の場から、地域という私の場へと居場所を変えようとしているものと考えられる。

そして、男たちがおやじの会へ参加することを通じて、日本社会は再び「地域の中に男がいる社会」へと移行しつつあるのではないか。なぜなら、その活動目的が何であろうと、おやじの会への参加は、地域の男たちが顔の見える付き合いを始めるきっかけになるからだ。そしてそれをきっかけに様々な地域行事に参加することで、男たちは地域に根ざした存在になっていくのではないだろうか。

かつて上野は「女縁は世の中を変える」と言った。しかし今は、「男縁が世の中を変える」時代である。今まで職場にしかいなかった男性たちが地域に帰るということは、非常に大きな意味を持っている。災害や犯罪が多発する今日、男性が地域住民とのネットワークを作っていくことは、地域社会の危機管理に大きな効果をもたらすだろう。

日本社会は、相変わらず職住分離の世界である。二度と、職住一致であった戦前の社会には戻れない。しかしその中にあっても、おやじの会という男縁集団を通して、男たちは地域に帰ろうとしている。「いたか」の大下氏が言うように、バブル経済の崩壊やリストラがその背景にあったのかどうかは私にはわからない。しかし、男たちの考え方やライフスタイルが変化しつつあること、そして彼らにきっかけを与えているのがおやじの会であることは、確信の持てる事実だと私は思う。

日本社会は戦後の経済成長を境にして、地縁社会から人々がバラバラになる大衆社会へと移行し、そして近年、再び繋がりを求めあおうとする新たな社会へと移行しつつある。おやじの会の急増はその象徴であって、男たちのアイデンティティの変化も、こうした流れの一部だと考えられる。

引用文献

朝日新聞
2003 「Weekly 教育－おやじの会、教育に力」『朝日新聞』2003 年 12 月 7 日。
藤田充
2000 「会員活動／話の広場 風車で町おこし－賀露おやじの会－」『風力エネルギー』24(2):15-21。

加藤　仁
1988　「調布七中－土曜の夜は『おやじの会』」『潮』346:152-159。
桑尾雅之
1989　「シリーズ・教育委員会の活性化－地域と学校・教育委員会の橋渡し『おやじの会』－鳥取県泊村教育委員会―」『教育委員会月報』41(4):66-70。
文玉杓
2003　「日本における任意団体－体制への機能的貢献か変革力か？」中牧弘允、ミッチェル・セジウィック　2003『日本の組織－社縁文化とインフォーマル活動』:37-54、東京：明石書店。
西川祐子
2003　「ポスト近代家族とニュータウンの現在」『思想』955:237-260。
小田光雄
1997　『＜郊外＞の誕生と死』東京：青弓社。
社納葉子
2004　「ルポ・町づくり、子育て、そして乾杯－男の近所づきあい・『南平台おやじの会』の場合－」『婦人公論』89(8):44-46。
鳥取県名和町教育委員会
1986　「各期における生涯教育の推進について－成人男子の学習組織『おやじの会』」『社会教育』41(9):45-47。
ターナー、ビクター
1996[1976]　『儀礼の過程』東京：新思想社（The Ritual Process: Structure and Anti-Structure, by Victor Turner, Aldine De Gruyter,1995）。
上野千鶴子
1988　「『女縁』が世の中を変える」有末賢・内田忠賢・倉石忠彦・小林忠雄 2002『都市民俗生活誌第一巻　都市民俗の生成』720-789、東京：明石書店。
＜雑誌記事＞
1988　「ルポ・父親同士のつながりが地域社会の教育力を高める－川崎市・おやじの会『いたか』」『時の動き』42(8):68-71。
＜ホームページ＞
千葉県流山市「西初石おやじの会」　http://nisihatuoyazi.at.infoseek.co.jp/
南材おやじ倶楽部　http://www.geocities.jp/noyajiclub/
折立小お父さんの会　http://www.geocities.jp/oritate_papas/committee040425.html
お父さんたちのネットワーク　http://kreis.sakura.ne.jp/tochannel/hp/wpaper.html

『東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange』規程

1　目　　的：『東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange』（以下、本誌）は、現代世界の諸社会・諸文化に関する広い意味での人類学的研究を掲載する専門誌として、人類学と関連諸分野における学術的交流に貢献することを目指します。本誌は、集約的なフィールドワークに基づく実証研究に高い価値を見出し、新鮮な調査報告の発信に努めます。

2　発行形態：本誌は、定期刊行の学術誌として大学図書館等に配付するとともに、オンライン版を東北大学文化人類学研究室のホームページ上に公開します。

3　使用言語：本誌の使用言語は、日本語または英語とします。

4　論文審査：投稿論文は、活字あるいはＨＰ上で未発表のものとします。論文は編集委員会において厳正に審査されます。「採用」「条件付き採用」「不採用」の結論は、編集委員を通して執筆者に連絡されます。採否および論文のカテゴリー分類についての決定は編集委員会が行ないます。編集委員会での審査内容は公開しません。

5　投稿資格：本誌に投稿できる者は、東北大学大学院文学研究科人間科学専攻（文化人類学専攻分野）に所属する教員および大学院生、修了生に限ります。ただし、編集委員会が適当と認めた場合は、これ以外の者の投稿を受け付けることもあります。

6　発行母体：本誌の発行母体は、東北大学大学院文学研究科文化人類学研究室「東北人類学論壇編集委員会」です。事務局は同研究室に置きます。

投稿規定

1　投稿者は、「東北人類学論壇編集委員会」宛に、原稿（横書き）を１部送付してください。原稿は返却いたしません。

2　原稿の枚数（400 字１枚計算）は、本文と画像を含めて、50 枚以内を目安とします。

3　ワープロソフトに依存する特殊文字や外字は使用しないでください。本文中の「註」の記号は、半角数字を使用してください。

4　画像は著者が作成してください。オンライン版にはカラー画像が掲載できますが、冊子版には白黒画像のみしか掲載できません。雑誌用の画像は送っていただいたものをそのまま白黒コピーして印刷します。

執筆者紹介

久保田　亮　　東北大学大学院　文学研究科　人間科学専攻
文化人類学専攻分野 博士課程後期

菅原　順也　　東北大学大学院　文学研究科　人間科学専攻
文化人類学専攻分野
博士課程後期 平成 17 年度単位取得退学

田澤　晋太　　東北大学　文学部　人文社会学科
文化人類学専修 平成 14 年度卒業生

薄葉　　豊　　東北大学　文学部　人文社会学科
文化人類学専修 平成 17 年度卒業生

東北人類学論壇　　第 5 号

2006 年 3 月 31 日発行

編 集 兼　東北大学大学院文学研究科
発 行 者　文化人類学研究室

編 集 長　嶋　陸 奥 彦

発 行 所　東北大学大学院文学研究科
文化人類学研究室
〒980-8576　宮城県仙台市青葉区川内 27-1
電子メール　tohoku-anthropo@sal.tohoku.ac.jp
ホームページ　http://www.sal.tohoku.ac.jp/anthropology

ISSN 1348-4192

Tohoku Anthropological Exchange

Vol.5

Article

Winter for Socializing:
Change and Continuity in Social Life among Yup'iks/ Cup'iks
Ryo Kubota

Fieldnotes

Changing Family Life in Korea: Life History of a Farmer over Fifty Years
Junya Sugawara

Research Reports

Bear Hunters of Tōgatta Today
Shinta Tazawa

Reconstructing Male Social Relations in the Neighbourhood:
A Case Study of *Oyaji-no-kai*
Yutaka Usuba

March, 2006

Cultural Anthropology Program

Graduate School of Arts & Letters, Tohoku University